
COBALT-SERIES
天使なる者
3
前田珠子
集英社

COBALT-SERIES

天を支える者3

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者3

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者3

天を支える者3 …… 7

嵐と共に …… 97

あとがき …… 201

イラスト／明咲トウル


ガスカール
ナルレイシアの護衛官を仰せつかった青年公爵。彼女とは犬猿の仲――!?
登場人物紹介


スカルトード
超絶美形の青年にしてナルレイシアとは「本好き同盟」の同志！
ナルレイシア
「柱神」を選ぶ「選定者」。「不幸中の幸いの権化」と呼ばれる本好き少女。


ユーカリィヤ
次代柱神候補に
選ばれた13歳の少女。
リオライーシャ
ユーカリィヤの双子の妹。
幼い時に里子に出され、
妹とは離ればなれに。

天を支える者3

21

ディエーン王国王都ロスタロイドの中心とも言える斎王院から、ナルレイシアという少女が姿を消したことを、その護衛役であるところのエルスカーネ公爵ガスカールが知ったのは、その姿の目撃例がなくなって半日経った頃……つまり、夜になってからのことだった。

その日、彼は当主を務めるエルスカーネ家の領内で起こった、代理にはかなわぬ問題を処理するために、ロスタロイドのエルスカーネ家の屋敷で執務に勤しまざるを得ない状況に置かれていたのだ。

問題の少女は王家の血を引くわけでも、名門貴族の血を引くわけでもなかったが、ある意味それ以上に世界にとって重きをなす存在で、尊敬する複数のひとたちから頼まれたこともあり、歴とした公爵であるガスカールが、自ら守っていたのだ。なぜなら、彼女は自らが志望したわけでもないというのに、とんでもなく重く、それゆえに不特定多数の人間に狙われる役目を担っていたのだから。

とはいえ、この報を聞いても、すぐにはガスカールは動揺しなかった。

田舎育ちである彼女は、往々にしてロスタロイド在住の人間には想像もつかない場所で昼寝をしたり、暇を潰したりしてくれるという悪癖の持ち主であったからだ。

（また、あのサル娘が……どこぞの木に登って長すぎる昼寝を満喫してるんだろう。いくら、落ちる心配がないからと言って、姿の見えないあいつを捜すこちらの苦労がかけらもわかっていないあたりは許し難い。いっそ、当分美観が大幅に殺がれるのを覚悟で、あの娘が登れそうな木は丸裸にしてしまうか？）

彼女が、斎王院の敷地内にいることを、この時ガスカールは確信しており、だからこその毒づきだった。

なぜなら、彼はこの日、自分が事情があって、そばにはいられないことを事前に文でもって伝え、決して斎王院から出ないように念を押していたからだ。

貴族の流儀に通じていない、田舎出の山猿娘は、しかしそれだけに純朴で、自らの言葉に対して責任を持つ。自分がそばにいないときには、決してひとりで勝手な真似をするな、と言及した際、渋々ながらも「はい」と答えた彼女が、約束を破るとは思えなかった。

だが、そんな風にガスカールがある意味暢気に（？）苛立っていられたのも、翌日の朝までのことだった。

いくら声をかけても、返事のないナルレイシアの寝室に、彼女付きの女官の許可を得た上で踏み込んだガスカールが目にしたのは、寝た形跡の全くない無人の寝台だった。

（まさか……）

と、一瞬思ったが、彼はすぐに打ち消した。

あの傍迷惑で、常識外れな小娘のせいで、これまで何度、しなくてもいい心配をしてきたのか思い出したせいだ。

（王宮の庭で勝手にたき火をしてくれたせいで、たかが栗の破裂が、あんな大騒ぎになったんだ……）

あの娘に関してだけは、常識というものを重視しては馬鹿を見る——というのが、ガスカールの偽らざるナルレイシアに対しての心境であったため、彼は敢えて、自身にあっては非常識としか思えない可能性を考えた。

（斎王の方々と隠れん坊でもして、そのまま寝入ってしまったとか……）

まさかとは思うものの、完全には否定できないあたりが悲しい。

（頭は悪くないはずだというのに、あいつの精神年齢のあの低さはなんなんだ!?）

おかげで、普段使う必要のない頭の部分まで使わされる——まったく、いい迷惑だ。

「ったく……見つけたら、ぐうの音も出ないぐらい締め上げてやる」

宣言し、勝利を確信したまま乗り込んだその先で、ガスカールは思いがけなくも敗北感を味わうことになるのである。

「いない？」

半ば呆然とつぶやいたガスカールに、彼が訪れた部屋の主――次期柱神候補のひとりである少年ササンシールは訝しげに首をかしげた。

「え、はい。ヴィル・ダカールとは昨日、朝食をご一緒させていただいた後はお会いしてませんけど？」

それがどうかしたんですか――と問われ、まさか真実を告げるわけにもいかず、ガスカールは適当に言葉を濁してササンシールの部屋を辞した。

悪い予感が、胸をよぎったが、ガスカールは無理矢理それを払おうとした。

あの山猿娘をまともに心配しても、馬鹿をみるだけだと、これまでの経験を元に自分に言い聞かせる。

しかし、それも五人の斎王全員が、同じ答えを返した時点までのことだった。

さらには、ナルレイシアに双子の妹のことで相談を持ちかけた、斎王のひとりであるオースリン侯爵令嬢が、「夢で見たことなので、確かなことは言えないのですが……」と前置きして教えてくれた言葉に、ガスカールは血の気が引く思いがした。

なぜなら、いまだ選ばれてこそいないものの、彼女――ユーカリィヤの能力こそが五人の斎

王中最も優れていると、次代柱神の選定者である人物が断言していたことを知っていたからである。

柱神とは、不安定なこの世界の天と地の間――空を支える、世界にとってかけがえのない存在である。

そして、選定者とは、その柱神となるべき者を確実に過たず、見極める者。

そう――消えたナルレイシアは、その選定者なのだ。

そして、「気になる夢を見た」と告げてきたのは、彼女が最も力――あるいは資質を感じ取った相手……なのだ。

ただの夢だと見過ごすわけにはいかなかった。現にナルレイシアの行方は知れぬままであったのだから！

「お聞かせください！」

頼み込んだガスカールに、いまだ幼さの方が勝って見える少女は、驚いたように目を瞠った後、こくりとうなずいた。

そうして、彼女が告げた夢の内容――。

ガスカールは直ちに一通の文を認めたのである。

手紙で呼び出された人物が、ガスカールの屋敷を訪れたのは、その日の午後のことだった。

緑がかった金髪に煙るような灰緑色の瞳を持つ、人間離れした圧倒的な美貌を誇る青年――スカルトードは、勝手知ったるなんとやらとばかりに、家人の案内もなしに、ガスカールの私室の扉を叩いた。

消えたナルレイシアに対するガスカールの態度を咎めるなど、表面上険悪な関係に見えていたこのふたりは、実は彼女の雇い主である老婦人――ファティ・リンシャを介して、ずいぶん前からの知己であり、友人関係にあった。

「突然呼び出すなんて、何事だい？　わたしは構わないけれど、君はヴィル・ダカールについていて、よからぬ企みを抱いている輩に睨みをきかせてないといけないはずだろう？」

夜ならともかくすぐにだなんて――と続けようとした青年に、ガスカールは不機嫌な面持ちで一言応じた。

「手遅れだ」

簡潔すぎる言葉の意味を計りかねた様子で、スカルトードが目を瞬かせる。

「どういう意味だい？」

「わたしが昨日斎王院に行けず、目を離した隙に、あの山猿は勝手に院を抜け出して、挙げ句に行方不明だ。くれぐれもわたしが一緒でないときは院を出るなと言いつけていたというの

に、あの山猿ときたら、何を考えてるんだ！」

親しい間柄ということで、感情の制御がうまくいかないのか、後半部は怒りを隠しきれない口調になっていた。

「……言いつけるって……普通、約束とかって言葉、使わないかな？　彼女は別に君の家臣でもなんでもないんだし。そういう高圧的な態度に出られたら、勝ち気な彼女のことだもの、反発してもおかしくないだろう。とは言え、君という護衛をつけられるぐらい、自分が危険な立場に置かれているってことを、彼女がわかっていないとは思えないし……妙だね？」

勧められる前に、さっさとガスカールの正面の椅子に腰を下ろしたスカルトードは、小さく首を傾げた。

黒髪の公爵は、苦虫を噛みつぶしたかのような顔で頷いた。

「……ユーカリィヤ殿下の夢見では、どうやら何者かに呼び出されたらしい。かなり厳しく言いつけたのに、それを破るとなれば、アマンシールさまかファティ・リンシャか、お前の呼び出しとしか思えなかったが……どうやら違っていたらしいな」

苛立たしげな言葉に、スカルトードは軽く目を瞠った。

「まさか、その確認のためだけにわたしを呼び出したのかい？　わたしだって、柱神さまを身内に持つひとりだよ？　選定者の立場がどれほど重大で、しかも危険か、知らないはずがないだろう!?　この時期に、そんな彼女を『外』に呼び出すだなんて真似、するはずがないだろ

う」

「万が一を考えただけのことだ。お前もあの山猿も、珍しい書物のこととなると目の色を変えるだろうが」

言われたスカルトードは言葉に詰まった――否定できないところが悲しい。

活字中毒者は、珍しい本のためなら千里だって駆けるのだ。

「……それは否定できないけれど、神に誓ってわたしではないよ。そういうことなら、わたしは失礼させてもらう。わたしなりに、彼女の行方を捜したいからね」

立ち上がろうとしたスカルトードを、ガスカールは「待て」と制止した。

「呼び出した本題はそちらの方だ。ツテを総動員してくれて構わない。あの山猿の行方を追ってくれ。下町の、踊るなんとかという宿屋は、その手の輩の巣窟だろう？　あと、神殿関係のほうも駆使してくれるとありがたい。お墨付きなら、アマンシールさまからいただいた」

そう言い、ガスカールが懐から取り出したのは、このディエーンの当代柱神であるアマンシール直筆の書状だった。

アマンシールは現ファラスース王朝の初代国王の弟に当たる人物であり、神籍に入ると同時に俗世との関わりを絶つ他国の柱神と違い、今でも王族としての権利を保持しつづけている稀有な存在だった。俗世との関わりを完全に絶たず、時に国王の判断にすら口出しするのは、なにも我欲のためではない。

彼の『口出し』のおかげで、先の王朝交代劇の際、流される血の量は激減したのだとは、スカルトードが親しい別の柱神から聞いた話だ。

だが、そんな口出しも、王家が安定してからはついぞなかったという話なのだが……。

「わかった」

答えてスカルトードは、ガスカールから書状を受け取った。

書状は二通――一通はこのロスタロイドを担当する情報部の責任者に宛てたもので、もう一通は虹神七神殿におけるその部門の責任者へのもの。

それは、王族としての権利を保持しつつ、神籍にもあるアマンシールにしか用意できない代物だった。

この二通の書状があれば、王家への忠誠を誓うディエーン王国情報部の面々も、虹神七神に仕える神殿情報部も、思うがまま使うことができる。つまりは、それだけ危険な状況だということだ。

「あの山猿が脅迫に屈したり、薬物かなにかで傀儡にされたりしたら、誤った選択をなした選定者には神罰が下る。そうでなく、あくまで意地を張るのなら、誘拐した相手の報復を受ける……どちらにせよ、一刻も早く、あの山猿を保護しなければならないことだけは確かだ」

渋面でそう言い切った青年公爵に、二歳年上の友人である金髪の青年は、ふうぅっ、と大きな息をついてみせた。

「あのね、カール。つきあいが長いわたしやほかの方々は、君がどんなに意地を張ったところで本音を見誤ることはないんだけどね。知り合って間もないひとや、あまりつきあいの深くない人間だと、君の言い様は、まるでヴィル・ダカールに含むものがあるように聞こえると思うよ？　君が頑固に、第一印象にしがみついて『山猿』だなんて彼女のこと呼びつづけてたら、周囲にも本人にも誤解させるだけだと思うよ」

友人を思っての、態度改善の提案は、しかしあっさり鼻で笑われ、一蹴された。

「山猿は山猿だ。誤解もなにもないだろう」

これは――現時点では――だめだ、とスカルトードは内心匙を投げた。

ガスカールがナルレイシアのことを、出会う前から毛嫌いしていたのは、ファティ・リンシャが引き取ることになったという、地方出身の娘の調査に出向かせた部下からの報告を目にしたせいだった。

その報告のなかでは、彼女は地方貴族の屋敷に、行儀見習いの名目で入った豪商の――つまりは平民なのだが――娘なのだが、王都に遊学中のその家の跡継ぎ息子が長期休暇で帰宅した際、言い寄ってくるのを意味ありげな態度でのらりくらりとかわして焦らしていた、質の悪い小娘というものだったのだ。

もちろん、現実は違う。彼女が必死に色馬鹿息子の口説きから逃げ出していたのは、その屋敷に、弱小貴族とは思えないほどの書物があったせいだった。全部に目を通すまでは、なにが

なんでも屋敷を追い出されてなるものかという決死の覚悟で、彼女は限界まで色馬鹿息子の魔手から逃れつづけたのだ。

すべては愛する本のため——その気持ちは、同じ本の虫であるスカルトードには、痛いほどによくわかるし、自分やナルレイシアほどではないとはいえ、やはり本の魅力に取り憑かれたとしか言いようのないファティ・リンシャやアマンシールを親代わりに育ってきたガスカールにだとて、当然理解できることのはずだった。

しかし、我慢ができないほどの身の危険を覚えたナルレイシアが、色馬鹿息子に強烈な肘鉄を食らわせた後、色馬鹿息子は自分を溺愛する母親に、ないことないことでっちあげて泣きつき、完全に彼女のことを悪女に仕立て上げた。

ガスカールから派遣されたナルレイシアの行状調査人が、最初にあげてきた報告書は、その色馬鹿息子に買収された家人の証言に基づいたものだった。

(……まあ、喧嘩腰とはいえ、あれだけ丁々発止のやりとりをつづけてたら、さすがにヴィル・ダカールがそんなことのできる少女じゃないことは、いいかげんわかってるんだろうけど……引っ込みがつかないのか、自分の非がわかっても、意地でも謝りたくない天敵とでも見なしたのか……それとも、なにか、思いがけずに彼女に弱みでも晒したかな……?)

実のところ、スカルトードの推理は全部が大当たりだった。

が——。

友人の、そうしたところを暴いて楽しめるほど、いまの状況は甘くはない。

「ありがたく使わせてもらおう……だけど、いいのかい？　この書状さえあれば、わたしでなく君自身が動いても、なんら問題はないはずだろう？」

かえって、他国人であるスカルトード自身より、ディエーンの大貴族であるガスカールの方が、有効利用できるかもしれない。

そう匂わせた青年に、黒髪の公爵は、今度こそ馬鹿にしきったように鼻を鳴らした。

「アマンシールさまに衰えの兆しなく、平穏そのものだった十五年前でさえ、前王家の特徴である紫の瞳を持って生まれたわたしを危険視する輩どもは数えきれず、ついには標的であるわたしではなく、一緒にいた両親の命だけを奪う結果になった。斎王が選ばれ、次代との交代が確実視されているいま、最も危険視されているわたしが動いたところで、疑心暗鬼を招くだけだろうが。わかりきっていることをわざわざ聞くな。殴るぞ」

軽口のように聞こえたが、最後の一言を告げるガスカールの紫の双眸には、紛れもない殺気が宿っていた。

自分が動ける立場なら、他者になぞ頼るものか――！

言葉以上に雄弁に語る紫の双眸に宿る意志の明確さに、スカルトードは笑い出したくなるのを必死に堪えた。

脳裏に甦るのは、身内である柱神に連れられ、初めてロスタロイドを訪れた日のこと。身内

の屋敷とよく似た、精霊の息吹が重厚に満ちた小さな屋敷で、スカルトードは初めてガスカールに会った。

先祖返りと言われる紫の瞳を持って生まれてきたがゆえに、前王家復活の兆しと見なされた少年は、そんな勝手な周囲の思惑と懸念のために、両親ともども命を狙われ、皮肉にもただひとり生き残ってしまったことで呆然としていた。

紫水晶の双眸に宿るのは、ただただ虚ろな光——。

それがあまりにも圧倒的な虚ろさで、スカルトードは結局、そのときはなにもできなかった。

ガスカールの抱え込む虚無の大きさ、深さに圧倒され、二度と会いたくないとさえ思った。けれど、彼の身内である柱神は、彼の心中などお構いなしに、それ以降もスカルトードをあの子供のいる屋敷に半年か一年の周期で連れて行きつづけた。

黒髪の子供の瞳に、感情らしきものが宿ったと気づいたのは——本来は戻ったと表現すべきなのかもしれないが、出会ったときがときだっただけに、そうとしか思えなかったのだ——五度目にその屋敷を訪れたときのことだった。

そのことに安堵し、親しくなる努力を始め、なんとかつきあえるようにはなったものの、スカルトードはずっと気づいていた——ガスカールのなかの虚無が消えてはいないことに。

今もまだ、それは友人のなかに息を潜めて隠れている。



だが――。

（カール……多分君のことだから、どうせ気づいていないだろうけど……）

本当に言いたいことは胸に収めたまま、スカルトードは人外大魔境的美貌に、満面の笑みをたたえた。

「早急に調べさせてもらうよ。わたしだって、ヴィル・ダカールのことは気に入ってるんだ。選定者の三割が辿る不幸な末路になんか、追い込みたくないからね」

「頼む」

と一言、ガスカールが口にした。

「任せなさい」

スカルトードは胸を張って言い切った。

ガスカールの瞳に宿る虚無は、今でも消えてはいない。

けれど……。

自分の勘違いでなければ、確実に薄れているのだ。

そう――ヴィル・ダカール……ナルレイシアと出会い、喧嘩三昧の日々を送っているそのなかで！

自分のせいで両親が死んだ――否、殺されたという事実を受け止めているガスカール。

そのせいで、一時、自身の命にすら無頓着になった青年。

ファティ・リンシャやアマンシールのおかげで、自暴自棄な態度こそ取らなくなったものの、それでも最後の一線で、自分の命をどうでもいいもののように捉えていて、だから誰も彼を此岸に繋ぎとめる命綱にはなれなかった。

彼の瞳に宿る虚無を取り去ることはできなかった――それができたのは。

「任せなさい」

もう一度繰り返して、スカルトードは年下の友人を見つめた。

ナルレイシアがなにをしたのかは知らない。もしかしたら、ガスカールにも彼女にも、なにかされた、あるいはしたという自覚はないのかもしれない。

それでも、ガスカールの瞳の虚無の影が小さくなったのは事実だ。

ならば、この先もその影を小さくし続け、ついには消し去ってくれるかもしれないナルレイシアを捜し出すことに否やのあろうはずがない。

(それを除いても、あれだけ読書傾向が合って、話も合って、さらにツテまで持ってる同志なんて、この先見つかるかどうかもわからないんだし)

純粋なのか不純なのか、本人にもわからない動機ながら、スカルトードは彼女を見つける気満々で動き出した。

22

圧倒的な美貌の青年が、ガスカールに連絡を取ってきたのは、二日後のことだった。

依然として行方のわからないナルレイシアは、アマンシールに相談の上、体調を崩したことにし、彼の屋敷で療養していることにしてある。精霊の加護の厚いかの屋敷は、病人にとって最高の環境であるため、誰も疑いはしなかった――もちろん、薄々事情を感じ取っているササンシールとユーカリィヤは例外だが、ふたりには厳重に口止めした。

そうして、指定された店――『踊る赤馬亭』を訪れたガスカールは、改築が済んだばかりの二階の一室で、スカルトードと宿の女主人ランディータ、一見まともだが、よくよく見ると堅気ではなさそうな中年の男という三人組と対面したのである。

「やあ、閣下」

淡い金髪に褐色の肌という、印象的な組み合わせの迫力美女の挨拶に、ガスカールは表面上は冷静さを保ちながらも、内心驚きを覚えずにはいられなかった。

この『踊る赤馬亭』が、ロスタロイドにおける国家情報機関の活動拠点のひとつであることを知るだけに、その責任者がこんなにも若い女性だとは思っていなかったのだ。と言うか、先日会った時は、てっきり宿の主人の娘かなにかだと思い込んでいたのだ。まさか女将だったとは……商売の関係上、娼館の女将なら珍しくはないが、それでもここまで若いというのは普通ではない。

数代に渡る拠点を、親から引き継いだ形で任についたのか……それとも。

（飛び抜けて有能なのか）

そんな彼の心中を読み取ったかのように、ランディータがくすりと笑った。

「そんな怖い目しないどくれ。三年前に死んだ旦那の稼業引き継いだってだけなんだから」

宿だけなら、そうであっても不思議はないが、もうひとつの稼業の性質を考えると、そう簡単にはいかないはずだ――やはり相当な腕利きなのだろう、とガスカールは判断した。

「この度はご協力感謝する」

小さく頭を下げると、今度はランディータが驚いたように目を瞠った。

しかし、それも一瞬のこと、彼女は左隣に立つスカルトードに顔を向け、可笑しそうに告げた。

「スカー、さすがはあんたの友達だ。まさかお貴族さまにお礼を言われるとは思わなかったよ。大抵の貴族野郎ときたら、下々のあたしらなんて、同じ人間だとも思ってやしないからねえ。誰かが自分のために働くのは当然どころか、光栄に思えとかふざけたこと言うやつも珍しくないし」

「そういう相手には、しっかりばれないように報復するひとが何言ってるんですか。……まあ、彼は貴族としては規格外品に近くはありますけどね」

スカルトードの苦笑まじりの言葉からも、ランディータの有能さと隙のなさは窺える。

（なるほど、一筋縄ではいかなそうだ）

思いながら、ガスカールは三人目の男に目を向けた。

褐色の髪に栗色の瞳、目に焼けてこそいるが、肌の色はディエーン人のものだ。ノリこそ効いていないものの、それなりに小綺麗な服を身につけ、髪もさっぱりと整えている。絶えずなにかを窺うような目つきをしていることを除けば、一般人に見える。

しかし、男の態度がそれを裏切っていた。落ち着かなげに肩や指を震わせ、しきりに目を瞬かせて、ランディータやスカルトードの様子を気にしている。

なにか後ろ暗いものを抱えていると見て間違いなさそうだった。

頼んだ依頼の内容が内容だけに、この男がここにいる意味はひとつしかない。

「情報提供者か？」

尋ねた彼に、答えたのはスカルトードではなくランディータだった。
「その前に、ひとつ確認しておきたいんだけど、こいつが見聞きした状況が、ちょっと特殊でね。あんまり大きな声では言えないことしてる最中の出来事だからさ、聞いても見逃すって約束してくれないかい？　あたしらがそのつもりでも、お貴族さまが気まぐれを起こして勝手に反故にでもされちゃあ、この先いろいろと支障が生じるんでね」
案の定、男は堅気とは言えない仕事に従事しているらしい。
だが、情報機関の専門家であるランディータが、見逃しても構わないと思う程度の悪事なら、ここはその判断を信じたほうがよかろう、とガスカールは決めた。
「一筆認めればいいのか？」
そう尋ねると、なぜかスカルトードが小さく吹き出した。
「ねえ、ほら、言った通りでしょう？」
嬉しそうに褐色の肌の美女に問いかける声には、まぎれもない笑みが宿っていた。
「……確かに。口約束ですまそうとしないあたり、この若旦那は頑固で律儀にできてるようだね。おまけに判断も早い。わかったよ、スカー。あんたの言うことを信じよう」
渋い顔をしてうなずいたランディータは、問題の男に目を向け、「大丈夫だから、洗いざらい吐いちまいな」と言い切った。
一度顔を合わせたことがあるだけのガスカールの人柄を確かめるために、ランディータが、

密かに彼の反応を試していたことを知ったのは、件の男から事情を聞き出した後のことだった——。

男が生業としている仕事は空き巣だった。

徒党を組まない独り働きを主とする男の狙いは、ロスタロイドの南地区にある中から下に属する階級が居を構える住宅街。自分の家を持っているものの、使用人を雇うほどではないという家は、大抵が夫婦共働きで、昼間留守にすることが多いのが理由だった。

男が常に小綺麗な格好を心がけているのも、周辺の住民から不審を買わないためだった。

その日、男はかねてより目をつけていた家に、『仕事』に入った。

子供のいる家を除けば、昼間は閑静な住宅街だ。住人は夜にならなければ帰って来ないことも、事前の調べでわかっていることもあり、男は悠々と仕事をこなした。

いつも通りにいかなかったのは、目星をつけた部屋に、ろくな金品がないと気づいた時のことだった。

こぢんまりした家の中で、あと捜していないのは、道に面した窓のある居間ぐらいだった。普通、そうした部屋には金目のものは隠さないはずなのだが、空き巣や泥棒の裏をかくつも

りで隠すという線も否定できない。なんにせよ、このままではほとんど儲けがないのだ。多少の危険は冒しても、探すしかないと男は思った。

そうして、目的の部屋に入った途端、男は窓の外を通る人影に気づき、咄嗟に身を屈めた。早く通りすぎてしまえ、と念じながら、人影が遠ざかるのを待った。

しかし残念ながら、気配はなかなか消えてくれない。

なにをしているんだと、そろりと窓から覗いた男の目に映ったのは、この界隈では見かけない、上質の衣装に身を包んだ、十五、六の金髪の少女だった。

何かを探すようにあたりを見回しているところを見ると、待ち合わせの目印でも探しているのだろう。

さっさと立ち去ってほしいという男の願いが天に通じたのか、ほどなく二十代半ばと思しき、これまた品のいい男が合流し、二人は連れだって歩き出した。

が、その様子を見ていた男は、少女の動きがぎこちないことに気づいた。

治安の悪い地区で暮らす男にとって、それがなにを意味するかは明白だった。

少女は、刃物をつきつけられ、どこかへ連れ去られようとしているのだ。

しかも、二人の周りには、一定の距離をおいて、数人の男たちが立っていた。

拐かしの手口だ。これが、下町でも『掃きだめ』と呼ばれる一角でのことなら、なにも珍しいことではないが、中流家庭の家が並ぶこの地区では話が違う。

しかも男は、ふたりの服装から、このあたりの住人でないことに気づいていた。貴族か裕福な家の娘と、その家人――傍からはそう見えるに違いない二人連れだったのだ――という組み合わせは、東地区にこそふさわしいものだった。

事情ありだな、と直感した男は、最初はもちろん関わり合いになるつもりはなかった。情報はそれだけで金になるものだが、大きすぎるそれは、逆に危険を引き寄せるものだということを、男は経験上知っていた。

だから、このことは胸に収めて終いにしてしまおうと、心に決めたまさにそのとき――。誘拐されようとしている娘が、隣を歩く男に気づかれないよう、ぽとりと道ばたになにかを捨てるのを見てしまった。遠目でよくわからなかったが、丸めた紙くずに思えた。

結局男は、男たちの姿が見えなくなるのを待って、その家での仕事を諦め、入ったとき同様、裏口から逃げ出した。ケチのついた仕事に執着しないのも、捕まらないための秘訣なのだ。

そう……男は、早々にその場を離れるつもりだった。

しかし、なぜか男は少女が落とした紙くずが気になり、つい拾ってしまったのだ。これが事件になったとき、もしかしたらこの拾い物が金になるかもしれないという誘惑に、男は抗いきれなかったのである……。

「で、そのとき彼が拾った紙くずというのがこれです」
一度丸められたせいで、くしゃくしゃになった一枚の便せんを、スカルトードがガスカールに差し出した。
受け取り、文面にざっと目を通した黒髪の公爵は、いっそう不機嫌な面持ちになった。
そこに綴られているのは、ガスカールからの呼び出しだったのだ。
「……あの馬鹿」
苦虫を噛みつぶしたような顔で、彼はまんまと拐かされてしまった少女を罵った。
「これのどこがわたしの筆跡なんだ」
その言葉に、異議を唱えたのはスカルトードだった。
「手紙の一通も送ったことのない君に、ヴィル・ダカールを非難する資格はありませんよ。第一、斎王院に届けられた時点で、怪しくないと判断するでしょうし」
「それが甘いというんだ。自分の立場を考えれば、用心に用心を重ねても、それでもまだ足りないことぐらいはわかりそうなものだ」
苛立ちも露わに言い切るガスカールに、今度はランディータが呆れたように告げた。
「無茶言いなさんなって。あの娘は、生まれたときから権謀術数だらけの世界で育ってきた、あんたみたいなお貴族さまとは違うんだよ。田舎から出てきて間もない小娘に、あんたと同じ

警戒心持てって方が無理だ」

これに、スカルトードまで同調する。

「まったくですね。こういう事態を避けたいのなら、君はもっと真剣に、選定者であることの意味と危険性を教えておくべきでしたね。アマンシールさまのときの選定者が、どんな最期だったのか、君だって聞いたことがあるでしょう。わたしの身内のときは、幸いにも柱神候補がひとりきりだったため、選定者に危険が及ぶことはなかったそうですが」

なにやらすっかりガスカールひとりがやり玉にあげられる格好となってしまった。

ならばお前たちはなにをしたんだ――と言いたくなったが、さすがにそこまで彼は厚顔になれなかった。一度選定者と認定されたナルレイシアに、自由に面会できる立場に――裏技を使えば可能だったが――このふたりはなかったのだから。

とはいえ、やりこめられるだけの立場――言い換えればふたりの八つ当たりし放題の的――になるつもりもなかったガスカールは、じろりと睨みをきかし、スカルトードに問いかけた。

「それで、その現場というのは？」

ナルレイシアが行方不明になってから四日――。

幸いなことに、晴天がつづき、雨は降っていない。

ガスカールの持つ異能は嗅覚に変換されるものであり、現実の匂いとは微妙に違うものの、それでも雨の浄化力によって、気配が洗い流されていないことは彼にとって不幸中の幸いと言

えた。

もっとも、彼のこの能力を知る者は多くはなく、ランディータなどは「いまさら行っても、こっちで調べ尽くした状況だけど？」と、その行為の無意味さを指摘したぐらいだった。

だが、スカルトードは違う。

彼は、ガスカールが異能者の気配を、特殊な嗅覚で感じ取ることができることを知っている――選定者となったナルレイシアが、視覚で異能の種類や強さを感じ取れるのと同じように。

だから、緑がかった金髪の青年は、すぐさま立ち上がったのだ。

「そう言うと思ってましたから、すでに馬は用意してあります。馬車のほうがいいようなら、用意させますが……どうします？」

ほんのさっきまで、ガスカールを非難していたとは思えない対応に、青年公爵はわずかに眉宇をひそめた。

（切り替えが早いというか、全部見越してるというか……時々鼻につくのは、こいつが出来過ぎなせいなのか。それとも単なる年の功なのか）

年とはいっても二歳しか違わないことを思えば、なにをされても気に障るのは、偏に自分の負けず嫌いな気質に起因していることもわかっているので、なおさらなにも言えなくなる。

「もちろん、馬に決まっている」

その方が早いし、雲が厚くなり出していることには、ガスカールも気づいていた。

雨が降る前に――。
それは、どうしても調べておかなければならないことだった。

スカルトードとともに馬を駆り、問題の場所を訪れたガスカールは、薄れつつあるとはいえ、微かに残る気配の臭気に、さっと顔を曇らせた。
「ヴィル・ダカールが攫われたのはこのあたりだという話だけど……なにか、君の鼻に引っかかるものはあるかい？」
「ひとを犬扱いするな」
不機嫌な面持ちで、即答を避けたガスカールだったが、その心中は決して穏やかではなかった。
なぜなら――。
そこには、彼のよく知る人物が放つ香気が残っていたからだ。
「……まさか」
呆然と、彼はつぶやいた。
信じたくないと、紫の双眸が凍り付いていた――。

23

時を遡ること四日――。

金髪に黄玉の瞳を持つ少女ナルレイシアは、ふかふかの豪華な寝台のなかで目覚め、かなり混乱した。

（え？　これって、寝台の天蓋よねえ……でも、斎王院で貰った部屋の寝台のとは違ってるし……ファティ・リンシャのお屋敷の寝台には天蓋なんかついてなかったし、『踊る赤馬亭』のお布団はこんなにふかふかじゃなかったし、もちろんフィレアの実家の天井とも模様違うし……）

ひとつひとつ、可能性を吟味し、否定した結果として、自分が見知らぬ部屋で寝かされていることに気づいたナルレイシアは、そのただごとでない事態に仰天し、がばっと起き上がった。

その途端、全身に走った痛みに顔をしかめる。

「……っっつぅっっ！」

田舎育ちの少女は、すぐさまその痛みの正体が、筋肉痛及び打ち身によるものだと判断した。

しかし、なぜそんな痛みを覚えるのかがわからない。

おまけに、見覚えがないのは寝台の天蓋だけでなく、部屋全体だったのだから、混乱は大きい。

「こ……ここって、どこよ……？」

呆然としてつぶやくが、答えを返してくれる者はいなかった。

頭を抱え込んでしまう。

ナルレイシアは一所懸命、いまやるべき最善の策を取った。

つまり、飛んでいる記憶を取り戻すことだ。

（ええーっと、確か、いつも朝一番でやって来るくせに、今日に限ってなかなか来ないからどうしたのかって思ってたら、誰かと話し合う予定が入ったから、待ち合わせの時刻を二刻ずらしたいって手紙が届いたのよね。それでいつもの抜け道つかって、指定されてた場所まで出向いて……）

気を落ち着かせるために、ナルレイシアはことさらゆっくりと、記憶を反芻した。

ここで恐慌状態に陥っても、なんの意味もないどころか、却って害になる、と判断したからだ。

（そしたら、待ってたのは、あの傲慢男の家来なんかじゃなくて……いきなり背中に刃物つきつけて、「ご同行願います」なんて言う男たちで……）

その後、刃物をつきつけた男に半ば引きずられるようにして、用意されていた馬車に乗り込まされた。

しかも、ご丁寧に目隠しまでされた。

（本当に……あのときは、生きた心地がしなかったわ）

生命の危機を、ひしひしと感じた。

（物語の女主人公なら、絶対気を失ってるところよね……なのに、わたしったら全然気が遠くなったりもしなくって……ロマンス好きなのに、わたしって、もしかして適性皆無ってことなのかしら!?）

自分の置かれた状況が、まだ判明していないこの時点で、そんなことを気にする余裕があるというだけで、すでに典型的ヒロイン気質とは無縁なわけだが、一部冷静、でもやっぱり一部混乱中のナルレイシアの意識は、そうしたことは認めない。

（だのに……馬車に揺られて……目隠しされたままで通された部屋は、ここは違っていて……んー、なんと表現していいのかわからないけど……）

ナルレイシアは、そのときの記憶を、忠実になぞり、追体験した。

豪華で豪華で豪華で――そのくせ品位に溢れた調度が配置されたその一室に通されたとき、ナルレイシアは正直目眩を覚えた。

（うそ、あれってばリーズの刻印入りの小箪笥。アウィックの水差しに杯、あ、この長椅子なんてエイブリィのだわ！）

父親が手広く商売しているもので、ナルレイシアの鑑定眼はけっこう鋭い。

だから、市販品でなくとも――つまりは特注品だということだが――見抜くぐらいの眼力は養われていた。

そのため、一目でここがただの場所でないことに気づいたのだ。

それも、恐らくはただならぬ場所であろうことに。

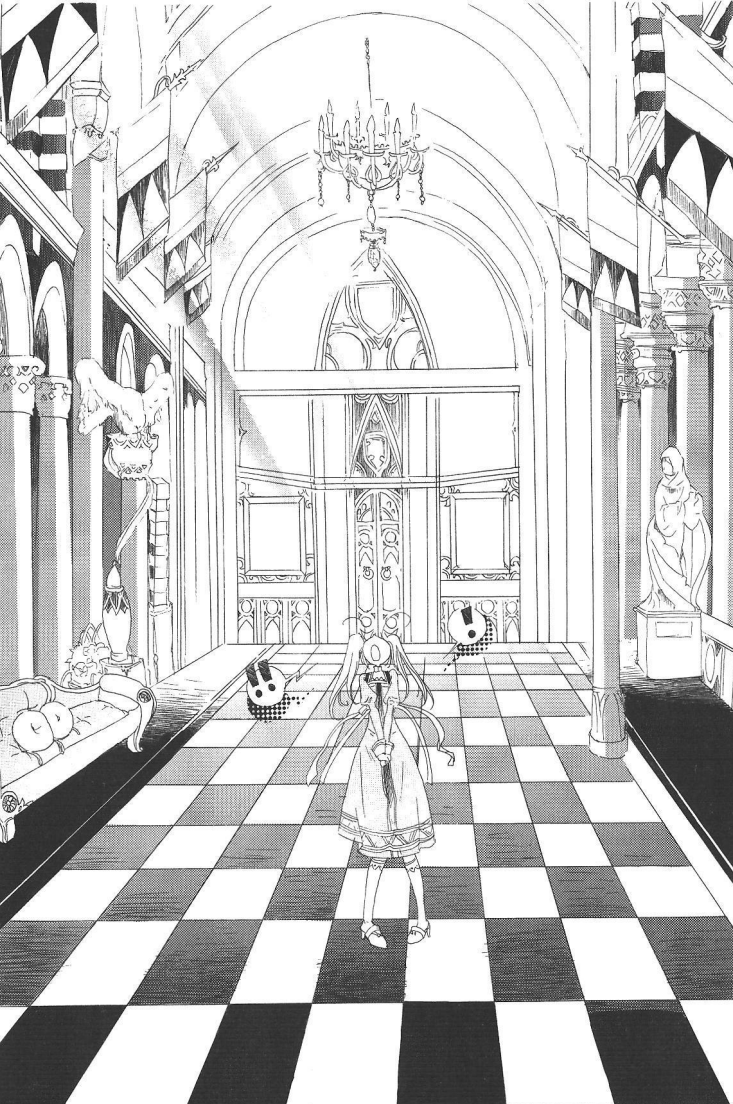
そうして、そんな場所に自分を招き入れたのもまた、ただならぬ相手に違いないと。

（わたし、どうなっちゃうの……？）

怯える彼女の心情など斟酌せずに、運命は歯車を回す。

近づいてくる足音に、反射的に身を縮こませた彼女は、扉の向こうから姿を現した人物を目にした瞬間、息を呑んだ。

それは……あまりにも彼女の予想から外れた存在であったのだ。



どんな脂ぎった中年男――もしくは野心にぎらぎらさせた男が現れても、ナルレイシアは決して動揺すまいと心に決めていた。

刃物を突きつけてまで、自分を攫うような輩の種類は限られており、その目的もひとつだと、彼女は信じていたのだ。

ところが――だ。

実際に部屋に入ってきたのは――。

褐色の髪と、榛色の瞳を持つ、十前後の少年だった。

その少年が、まさか自分を誘拐した主犯だとは思いがたく、ナルレイシアは必死に別の可能性を考えに考えまくった。

(見たとこ、ものすごーっくいい服着てるけど、でも、お気に入りの小姓のこと、これでもかってぐらいに着飾らせる貴族がいるって話は聞いたことがあるわ……)

もしそうなら、この少年が主犯ということはない。

(それでもって、懐事情がきつきつだって言ってらしたササンシールさまのとこの仕業でもないってことよね)

だとしたら、ほかの誰の関係者だろう……呆然としつつも、それなりに頭を働かせながら、必死に考えていたナルレイシアに、入ってきた少年は、とんでもない呼びかけを口にした。

「ファティル・ダカール……ですか？」

ファティルとは、未婚の高貴な女性につける尊称である。

今でこそ貴族の令嬢全般に使われるようになっているが、元々は王家かそれに連なる名門の未婚の女性、あるいは女性の柱神に冠されるべき尊称であることを、彼女は師匠である老人から教えられていた。

「やめてください、ファティルだなんて、ファティルだなんて！　わたしはただのダカール家の娘ですっ！」

と、思わず叫んで……そこでちょっとした不思議に気づいた。

誘拐犯の配下と思しき少年相手に、なぜ、自分は丁寧に対しているのか。

我ながら、相手の身分に臆したり、どこまでも頭を下げるような性格ではないとわかっているというのに……なぜ？

そもそも、身分の高い相手にはどこまでも絶対服従などということを身につけられていたら、行儀見習いに出向いた先で、女好きの、自分に言い寄られてうっとりしない女はいないと勘違いしている馬鹿殿――馬鹿君と言い換えても通じる――に、肘鉄で応じることなどなかったはずだ。

あれだって、そのお屋敷に所蔵されている書物を一冊でも多く読みたいがために、本来の限界値を五割増しに頑張って……けれど結局だめになった例なのだ。

だのに、なぜ、この少年のとんちんかんな呼びかけに、こんなに慌ててしまうのだろう？

ナルレイシアが抱いた疑問は、ほどなく解けた。

少年は、彼女の「ファティルだなんて」発言に、真剣になにか思い悩むような顔をした後、こう問いかけてきたからである。

「でも、斎王院に次代の柱神さまを見極めるお役目を負って迎えられた貴女は、間違いなくこのディエーンでも一、二を争う高貴な女性でらっしゃいます。本来ならファティルでも足りないぐらいなのに、生憎この国には、それ以上の女性に対する尊称がないんですよね」

（だからーっ！　その尊称をやめてって言ってるのに――っっ！）

厭味か、もしかして厭味なのか!?

とまで勘ぐりかけたナルレイシアは、少年が心底困惑しているらしいことに気づいた。

「……ファティルが駄目となると……だけど、うちでは大体柱神さまに対してだって、当代さまとか先代さまとかで言い換えてやってきたし……なにより女性の選定者自体初めてだし」

ぶつぶつ生真面目につぶやいている。

（もしかして、ここで名前でいいとか言ったら、逆にまた混乱させたりしちゃうのかしらん!?なにより、この子って、どう考えても小姓とかって感じじゃないし……）

だとしたら、この少年は何者なのか。

ナルレイシアは、折り合いの悪い青年公爵と、雇い主である老婦人が雑談のなかで交わしていた言葉を思い出した。

『ところで、最近のここの殿下の様子はどう？』

本の修復以外で、唯一ナルレイシアが誇れる特技――美味しいお茶を淹れられるということで、丁度お茶を運んだときに交わされていた会話だった。

『相変わらず優秀ですよ。但し、気になった物事全部を理由づけないと納得できないという、あの気質だけはちょっとどうかとは思いますがね』

そんな会話を耳に挟んだ。

そのときは『殿下』なんて種族は自分とは無縁だと思い、耳に入れても反対方向の耳から通り抜けさせていたのだけれど。

（……まさか？）

嘘でしょう！

――と叫びたかった……けれど、なんだか確認前にしっかり確信してしまったあたり、抜き差しならないことになってしまった。

それでも、まだ最後の最後の希望はある。

勝手に自分が勘違いしてしまったという一線が。

意を決して、彼女は少年に問いかけた。
「わたしはナルレイシア・フォイリリル・ダカールと申します。失礼でなければ、お名前をお教えいただきたいのですが？」
対して少年は、にっこり笑顔で即答した。
「礼儀に通じたお方ですね。わたしはウォルカード・アンストリア・アル・ファラスース。お気づきの通り、この国の次期王太子です」

（次期王太子殿下ーっ!?　なんだって、そんな雲の上の方が目の前にいらっしゃるのよ!?　何かの間違いじゃないのーっ!?）
あり得ない、と叫びそうになった口を、慌てて両手で塞ぎながら、ナルレイシアは混乱の極みにあった。
「ご、ご冗談、でしょう……？」
救いを求める意味で、問いかけた彼女に向けられた少年の表情は……なにを言われているのか理解できないといったものだった。
「冗談……とは、なにがでしょう……？」

心から不思議がっているのが見て取れて、ナルレイシアはがっくりと肩を落としてしまった。

（……ああ、多分間違いなく本物の次期王太子殿下でらっしゃるんだわ。でもって、このきんきらじゃないけど、品がよくて、とことんお金のかかってる家具から察するに、ここは王宮か離宮かの一室で……どーするのよーっっ、わたし!?）

ディエーンにおいて、柱神が代わる度に王朝もまた交代してきたのだという事実を知って以来、ナルレイシアも色々考えたのだ――特に、護衛役になってくれたエルスカーネ公ガスカールが、先祖返りでもって、先の王家の者の特徴である紫の瞳を持って生まれてきたことにより、勝手に危険視した輩によって暗殺されそうになり……結果としてその両親が命を落としたことを聞いて以来。

四六時中そばを離れない――彼の目をこっそりと盗んで、過去の歴史書をよく寝室で繙いた。

そのなかで、目を引いたのは、柱神交代の時期にさしかかっていた、ある王国の歴史を綴った書物の内容だった。

新たなる柱神が出現してもおかしくない時期であるにも拘わらず、その時期、その国に兆しが顕れることがなかった。そしてその時期、十年を置かずとして、いくつもの国の名門と呼ばれた一族が、反逆罪で悉く処分されていた。

国が爛熟した時期には、雨後の筍よろしく、野心ある有力貴族が王家に反旗を翻すことがあると、以前のナルレイシアであれば思っていたところだ。

けれど、新たなる柱神を見極める役目に任ぜられた途端、柱神候補である斎王たちの実家や親族からの贈り物及び圧力攻勢をかけられた時点で、彼女には別の視点が開かれ、それまで見えなかったものが見えたのだ。

新たな王朝の祖となることを望み、選定者である自分に、近づいてくる斎王の家族や親族たち——けれど……ならば、自分の存在は、現在の王家であるファラスース家にとってはどんなものであろうかと……想像した瞬間、背筋が凍った。

斎王はみな、王家の養子——あるいは養女——であるけれど、ひとりとして王家に属する者は選ばれていないのだ！

そのことに気づいたとき、ナルレイシアは恐怖した。

普段は意識していないけれど、彼女は王家を愛し、敬っていた。王家の治世あって、自分たちの平和な暮らしがあることを肌で感じていた。

なのに、自分の選択がきっかけで、王家が滅び、国が歴史書に書いてあるような内乱の時代に突入したら……!?

そんなことには耐えられなかった。

だから、ファティ・リンシャに協力してもらって、彼女経由でアマンシールに手紙で相談し

たのだ。

当代柱神にして、元ファラスース王朝始祖の肉親であるアマンシールからの返書には、心配いらないといった旨が認められていた。

これまでの過ちを繰り返させぬために、最大にして細心の注意を払い、舞台を整えたのだから——と。

信じたいと思った。

けれど、どこから知ったのか、自分に面会を願う斎王の身内たちは、日を追うごとに増え続けた。

最初はお世辞おべっか贈り物三昧だったのが、途中からやんわりと脅す口調に変わってきた。故郷にある家族の安否まで、最近ではほのめかされるようになってしまった。

その大半がたんなる脅しにすぎないだろうことを、ナルレイシアはわかっている。

父が社主を務めるダカール商会は、王都ロスタロイドでこそ影が薄いが、近隣諸国の同業者との縁故の深さで、そうそうの圧力や妨害で揺らぐような組織ではないのだ。

けれど——。

いかに強固な他国の商人との縁があろうと、それはあくまで国が許した権利なのだ。国そのもの——つまり王家が、それを撤回するようなことになったら……？

王家に、そんな風に言われたら……自分は果たして払いのけられるだろうか……？

ずっと、そのことを悩んでいた。その時が来るのを恐れていた。
けれど、その時は来てしまったのだ。
後は頭を上げ、胸をはることしかできないと、ナルレイシアは思った。

これを言ったら、絶対殺される——というか、もっと悪いことに、翻身させるために更にひどい目にあわされるかもしれない……。
それは、きっと、もの凄く痛くて、怖いことの連続に違いない。
(でもでもっ!)
ナルレイシアは悲壮な覚悟を胸に抱いて思う。
(絶対に、次代の柱神さまの手がかりだけは口に出してはいけないわ。こんなに幼い方に対してなら、こちらが警戒心を抱かないって、きっと向こうは思って仕掛けてきたに違いないんですもの! ほんとは信じたいけど……わたしだって、心から信じたいんだけどぉぉっ!)
しかし、王家と当代柱神アマンシールの温情を踏みしだくように、斎王たちの親族が、捕らぬ狸の皮算用をしていることを知れば、恐らく王家は黙ってはいまい——その思いがあったから、ナルレイシアは目の前の少年を信じ切ることができなかったのだ。

いや、少し意味が違うかもしれない。
次期王太子である少年に、もっと目上のものがなにかを命じて、彼にこんなことをさせたのではないかと思ったのだ。
（んー、何にしても、あんな乱暴な手口で、わたしのことここまで連れてきたってことで、質問その他に答える必要はなしってことで……）
それでも、身元不明の惨殺死体になるのだけはいやだなーと思ったナルレイシアは、それに加えてどうしても言っておかねばならないことを思い出し、すっくと背筋を伸ばし、ウォルカードをまっすぐに見据えた。
これを口にして、それで殺されるのなら、それも運命――と、彼女が長広舌の説教を始めようとした、まさにその瞬間――。
ディエーンの次期王太子ウォルカードは、ぽつりと一言、問いを投げかけてきた。
思いがけぬ不意打ちに、ナルレイシアは目を丸くした。
「は……？　なんと……？」
問い返した彼女に、未だ十に過ぎぬ王太子は、ふいっと顔を背けた後、ぼそりと再び繰り返した。
小さな、小さな声だった。
それでも、少年の声ははっきりと、ナルレイシアの耳に残った。

「……ユーリは……ユーカリィヤは、元気ですか？」

と――。

耳までも真っ赤にした少年の姿とその声とその言葉に、ナルレイシアは自分が大きな勘違いをしていたことに気がついた。

24

それは、幼い少年と少女の出会いの物語――。

まだ三人の年の近い王子の内、誰が王太子となるか決まっていなかった、ウォルカードが六歳だった頃――。

ディエーン国王ヴァルナーガ二世は、幼い息子を伴い、旧友の屋敷を非公式に訪れた。

その友人の名はオースリン侯爵サザビィン――国政に直に参加していない侯爵は、その距離感でもって、国の頂点にある王にさえ、率直な意見を口にすることが許されており――無論、その誠実な人柄がなければ、王も許さなかっただろうが――国王は時にそれを聞くために、友人の領地を訪れていた。

とはいえ、そんな事情は、まだ子供にすぎないウォルカードには計り知りようのないことだった。

彼は大人たちの都合で、「しばらく遊んできなさい」と、言われ、ふて腐れた。

来たくて来たわけでもない屋敷で、勝手に放り出されたことで、ウォルカードはそれなりに

苛立っていた。

もちろん、王家の血を引く者として、その名誉を汚す真似をするつもりはなかったが、父王に強引に連れ出された日には、生物の教師に、王宮の庭の奥に、甲虫を捕りに連れていってもらう約束があったのだ。

ものすごーく楽しみにしていたのに、父王の気まぐれでパアになった上、連れて来られた先では、もう用済みとばかりに放り出されたのだ。

ウォルカードが憤慨しても無理はなかった。

ならば、せめてこっちはこっちで勝手にさせてもらおう、と彼は思った。

もっとも、高い木々もなく、整えられた庭園には、彼の興味を引くような虫も生き物もいそうにはないとわかっていたけれど。

(でも、茂みとかに隠れたら、口うるさいお付きの連中のお小言からは逃げられるよな。本当に口うるさいし、落ち着かないし……少しぐらいは周囲に誰もいない自由を味わったって罰は当たらないはずだよな)

そう思い、整えられた茂みに、小さな体を隠していた少年の耳が、苦しげな咳き込む音を拾ったのは偶然だった。

(なんだ? 誰か風邪でもひいてるのか?)

そう思った少年は、しかしすぐに、別のことに気がついた。

その咳の音は、どこかくぐもっていたのだ。
ウォルカードには、覚えがあった。
それは、咳き込む音を周囲に洩らさないために、両手の指で口を覆ったときの音だった。
ウォルカードの場合は、強くあらねばならない王の子が、弱っている姿を周囲にさらしてはならないという思いあっての行為だった。
意地を張りすぎて、一度肺炎で命を落としかけたとき、周囲の大人たちが、泣きながら激怒して、「そんな意地の張り方は間違っている！」と懇々と説教してくれたおかげで、ウォルカードは二度とあんな意地の張り方はしないと誓ったのだけれど。
（なーんか、こいつは似てるような……）
かつての自分に。
なんとなく、好奇心を刺激された。
だもので、ついつい、咳き込む大本を探して行ったら……見つけたのは、自分と同じぐらいの背格好の少女が、寝台の上で身を屈めている姿だった。
青白い顔をして、痩せた両手を口に当てて——止まらない咳を、必死に周囲から隠そうと……否、周囲に聞かせまいと頑張っていた。
（こいつ、馬鹿だ……）
真っ先に、そう思った。

そして、思った次の瞬間には、窓を飛び越えて、少女の寝室に入り込んでいた。
突然の闖入者に、少女は目を丸くして問うた。
「あなた……だれ？」
その問いに、ウォルカードは答えるより、感じた苛立ちをぶつけることを選んだのだ。
「お前、馬鹿だろう？」
唐突なウォルカードの言葉に、少女は一瞬何を言われたのかわからなかった様子で、大きな目を瞬かせた。
「……は？」
見知らぬ少年に、どう対応すべきか判断しかねての少女の反応は、しかしそのときの彼の目には間抜けなものにしか映らなかった。
（やっぱり、こいつ馬鹿なんだ）
幼い彼は、あっさりと決めつけた。
「体が苦しがって、咳を出してるのに、それを隠してどうするんだよ。痛かったり苦しかったりするのは、体がどうにかしてほしいって訴えてる証拠なんだぞ。それを我慢して、どうするんだよ。自分でどうにかできるのならともかく、我慢したって、体を損ねるだけなんだぞ？そんなことも知らないのか」
以前肺炎を起こすまで、意地を張った際に、周囲に言われたことそのままを、ウォルカード

は口にした。

実際、変に意地を張らずに具合が悪いことを打ち明けるようになったら、病状が悪化することも長引くこともなく、断然早く回復することを発見したからだ。

もっとも、剣や体術の稽古で受けた痛みや怪我に関しては、相変わらず意地を張るのだけれど……目の前の痩せた少女は、どう見ても病気に伏せっているようなので、はっきり言った。

少女は……答えなかった。

その態度に、ウォルカードはむっとする。

(なんなんだよ、こいつ)

それまでの人生で、無視されたことなど一度もなかった少年は、大いに苛立った。

「聞こえなかったのか？　周りに心配かけないように、お前は気遣ってるつもりかもしれないけどな、そういうの自己満足っていうんだぞ！　我慢したせいで具合がもっと悪くなったりしたら、結局周りが迷惑するんだ。だいたい、完全に隠せるのならともかく、お前が咳き込むの、庭にいても聞こえてきたぞ!?　中途半端な我慢なんて、傍迷惑なだけだ」

己が正論に絶対の自信を持って言い切ったウォルカードの顔を、枕が直撃したのは次の瞬間のことだった。

「名乗りもしないひとに、どうこう言われる筋合いはないわ！」

少女が、顔を真っ赤にして叫んでいた。

「あ、あの程度の咳だったら！　我慢してたらその内治まるのよっっ！　わかってるから、堪えてたんじゃない！　自分じゃどうにもできない発作なら、すぐにひとを呼ぶわよっ！　だけど、たいしたことないってわかってたから……昨日の夜中にも、みんなに迷惑かけたから……疲れてるみんなの手を煩わせたくなかったのよ！　なんにも知らないくせに、勝手なことを言わないでちょうだい！」

……すごい、剣幕だった。

その迫力に、ウォルカードは少しだけ怯んだ。

少女が、ぎっ、と彼を睨みつけた。

「だいたい、あなた誰なのよ!?」

改めて尋ねられ、ウォルカードは内心反省した。

確かに、彼女の問いに、自分は答えていなかったのだ。

「わ、わたしは」

ウォルカードが自らの名を口にしようとした、まさにその刹那、少女は再び咳の発作をおこした。

今度のこれは、自分のせいかもしれないということで、彼は焦り、部屋の扉に向かって走り出した……のだが。

「……ま、待って……」

少女の小さな声が制止した。

「だって！」

「……だ、……じょ、ぶ……だから……」

少女は、先ほどウォルカードが咎めたのとまったく同じ方法――つまり、両手で口を押さえること――で、咳があまり響かないようにしていた。

彼女に言わせるなら、この発作も大したことはない程度のものだということなのだろう。

けれど、それを見せられるウォルカードはたまらなかった。

……本当に、苦しそうなのだ。

寝台の上に半身を起こしたその体を『く』の字に曲げて、咳きこみつづける姿は、とても見ていられるものではなかった。

（やっぱり、誰か呼んだほうが……）

そう思い、寝室の扉に目をやった彼は、突き刺すような視線を感じて振り返った。

苦しさに、両目に涙をたたえた少女が、声なく「誰も呼ばないで」と訴えていた。

大きな、大きな……金褐色の長い睫毛に縁取られた、露草色のふたつの瞳……。

ウォルカードは、折れた。

そして、扉ではなく、苦しむ少女の寝台に向かって、舌打ちしつつ足を向けたのである。

「その後は、もう見ていられなかったから、彼女の背中をさすって……でも、確かに彼女が言った通り、ほどなく発作も治まったので、そこで初めて名乗って謝罪したんです。普通、わたしが名乗ると、みんなすぐに『ご無礼を！』とか言って頭を下げるんですが、彼女は……ユーリは、そんなことはなくて……ただ、『ありがとう』とだけ言って……」

無理矢理強引な手段で、ここに呼び出されたナルレイシアは、徐々に惚気話化しつつある話題の流れに、言葉も毒気も失っていた。

（……いえね、わたしが巻き込まれさえしなかったら、『小さな運命の出会い』？　きゃあぁぁっ、なんて素敵ー！　なんて盛り上がったかも……というか、絶対そうなってたとは思うんだけど……）

いろいろ、いろいろ、事情に通じてしまった今となっては、事態の複雑さに目眩を感じるばかりだ。

頭ぐるぐる状態になりかけているナルレイシアの様子には気づいていないのか、ウォルカードが話を締めくくった。

「その後、ふたりでいろいろなことを話して……何だか凄く気があって……頻繁に会えないのはわかってましたから、文のやりとりを父とオースリン侯爵に認めてもらったんです。です

が、それも彼女が斎王に選ばれたり、侯爵夫妻が亡くなったりしたしたせいで、叶わなくなってしまって……」

だから、強引な手だということは充分承知の上で、ユーカリィヤの様子を知っている貴女を呼び出したのだ、とウォルカードは告白した。

「ユーリは……元気でしょうか。体を壊したりしてないでしょうか……彼女は体が弱いので、そのことが心配で……」

問いかけてくる少年を前に、ナルレイシアは胸中で息をついた。

（この様子だと、多分この王子さまは、配下がわたしに刃物つきつけたりしたことは知らないのよね……幼なじみの――もしかしたら初恋の相手かもしれない――少女の近況を、ただ知りたくて……まっずいなー、恨み言ひとつ言えないじゃない……）

と、そこまで考えたとき、ナルレイシアは違和感を覚えた。

文を交わす――それは最低月に一度ぐらいの頻度あってこそ使われる言葉ではないだろうか？

女性同士なら、もっと頻繁でもおかしくはないけれど……それでも「交わす」と言う以上、貰いっぱなしの関係は当てはまらないはずだ。

（正確な時期はわからないけど、でも斎王院が開かれて、そこに五人の斎王さまが全員揃ったのは二年ぐらい前の話だって、アマンシールさまから伺った気が……）

いや、気のせいではない。

確かに聞いた。

以来、斎王に選ばれた子供たちは、十日に一度の家族――いなければ親族――との面会、それ以外での外の世界との接触を許されないとかなんとか……。

ならば、現王家の跡継ぎであるウォルカードが、今頃になって、とうに連絡がつかなくなったユーカリィヤのことを案じて行動を起こすのは、どうにもおかしい。

一番考えられるのは、次代の柱神として最有力候補に挙げられるユーカリィヤに関する正確な情報を、最も確実な自分から引き出す目的あってのこと――なのだけれど。

（でも、そんな風には感じられないのよね……）

何なのだろう、この違和感は――。

思わず、額に手を当てた瞬間、あることが閃いた。

それは、ガスカールから聞かされた、彼自身の持つ異能のこと。

前王家の者が持つ特徴――深く澄んだ紫の瞳――を持つ彼には、特異な能力がある。他人の持つ異能を、現実ではない『嗅覚』で、感じ取ることができるのだ。

似たような意味で、ナルレイシアも『選定者』に任じられて以来、異能を持つ者たちの周囲に、光もしくは影、あるいは淀んだ翳りが見えるようになった。

自分の場合は、その役目柄、神々によって後付けされた感覚なのではないかと思う。

けれど――歴史書からこそ抹殺されているものの、柱神同士の間に生まれた、神籍にある人物が始祖となったこの国の王族ならば……力のかけらたる異能を持っていたとしてもおかしくはないのではないだろうか……同じ始祖を持つ、ガスカールが持っているように。

もちろん、確信してはいなかった。

けれど、きっとそうに違いないという思いがあったのも確かなこと。

（どうしよう）

数瞬、迷った後、ナルレイシアは心を決めた。

「えー、っと。殿下。ユーカリィヤさまには、実のところいろいろいっぱい、厄介な事情とか問題とかがありまして……秘密かもしれませんけど、殿下がその異能をもって協力していただけるなら、こちらも善処する用意がありますが」

冷や汗たらたらものの申し出だった。

いくら年下でも、相手は物心つくと同時に、その手のやり口を叩きこまれた相手なのだ。

案の定、ナルレイシアの取り引きめいた言葉を聞くと同時に、ウォルカードは十歳の子供とは思えない、うっすらとした笑みを浮かべて問い返してきた。

「……わたしが、異能の持ち主だと？」

それは、十歳の少年のものとは思えない、迫力満点の代物だった。

内心、

（怖い……こあいよー、こんな子供が相手なのにー）

と思いながらも、ナルレイシアは意地を張り通した。

なぜなら、この先どうしても、異能者を感じ取る能力を持つウォルカードの協力が必要だと感じたからだ。

ユーカリィヤの双子の妹であるリオライーシャを見つけるために。

気迫負けになりそうなところで、彼女は勇気と意志をかき集めて、こう言い切った。

「斎王さまであるユーカリィヤさまは、今、双子の妹君であるお方の不遇に心を痛められ、救われたいと思ってらっしゃいます。わたしはそのことを、ユーカリィヤさまご自身から頼まれました。殿下がなにゆえ、御自らの異能を否定なさるのかは存じませんが、わたしはわたしができることをなすだけのことです。それを殿下が障害とみなされるのなら……」

ひたと、ウォルカードの目を見据えて、ナルレイシアは言い切った。

「勝手にさせていただきます」

と。

それは――世間知らずの怖いもの知らずの小娘であったからこそ、できた――宣戦布告だったかもしれない。

25

（さすが王子さま……まだあんなに幼くてらっしゃるのに、すごい迫力だった！）

馬車に揺られながら、ナルレイシアは深い息をついた。

次期王太子と見なされるだけあって、ウォルカードは侮れない子供だった――もしかしたら異能の持ち主であることは、この国の王位継承問題にあっては、なにか障害になるのかもしれない……とは途中で気づいたけれど、藁にも縋りたい気分だったナルレイシアは、退くわけにはいかなかった。

（言質はいただけなかったけど、それっぽく協力には応じてくださったわよね……）

ユーカリィヤに関わることだったからこその譲歩かもしれないが、ナルレイシアにとってはありがたいことだった。

異能を感じ取る力を持つガスカールにつづき、二人目の協力者なのだ。とはいえ、黒髪の青年公爵と違い、ウォルカードが城下を訪れるのは無理な話なのだけれど。

（でも、はっきりおっしゃらなかったけれど、なんだか精霊に関係した力をお持ちのようだか

ら、協力していただけるのは心強いわ）

ファティ・リンシャの屋敷で、精霊たちとは身近に接していたナルレイシアだったが、いかんせん意思の疎通がはかれたためしはない。

精霊たちはあくまで屋敷とその住人を、危険から守るために動いており、ちょっとした好意を見せてくれることはあっても、こちらの言い分に従ってくれるわけではなかったのだ。

（もしかしたら、ファティ・リンシャの言うことなら、精霊たちも聞いてくれるのかもしれないけど……でも、よくよく考えたら、ファティ・リンシャも謎のお方だわね……）

あの膨大な蔵書量や、派手ではないが上等な調度の数々から察するに、相当な資産家であることは疑いようがないのだが、どういった立場の人物なのか、全然わからない。

フィレアに隠遁する自分の師匠である老人の知己で、公爵であるガスカールが母か祖母のように慕っていて、他国の柱神の縁者だというスカルトードとも友好的で、更にはこのディエーンの当代柱神であるアマンシールとも交流が深い――ともなれば……謎すぎる。

（んー、やっぱりスカーさんと同じように、どこかの柱神さまと縁のある方……なのかしらん？　お屋敷を精霊が守っているのも、そういうことなら得心がいくし……）

などなどと思っていたナルレイシアは、馬車の窓から見える街並みが、見覚えのあるものに変わったことに気づいた。

ウォルカードの部屋も、斎王院も、同じ王宮の敷地内にあるのだから、徒歩で戻ってもよさ

そうなものなのだが、そうはいかない事情があった。

選定者は、次代の柱神候補である斎王の親族及び、現王家の者と接触してはならないという決まりがあるのだ。

とは言え、斎王たちの親族は、勝手に押しかけてきて逃げようがないのだが、王族――それも次期王太子確定とされる人物――と密かに会ったという事実は、さすがにまずい。無理矢理連れて行かれたという事情があっても、ほけほけその足で斎王院に戻る姿を誰かに見られたら、後々とんでもない騒動が持ち上がるかもしれない。

そうしたわけで、ナルレイシアは目立たない馬車でもって、ロスタロイドのよく知る地域まで送ってもらうことにしたのだ。

(もう少し行くと、ファティ・リンシャのお屋敷の近くなんだけど……お休みの日でもないのに顔を出したら、きっと何事かと思われるだろうし、近くにいるだけで、精霊たちがご注進する可能性もなきにしもあらずだし……)

そんなことで、あの老婦人の心を煩わすのは遠慮したかった。

ガスカールから、田舎における自分の良からぬ噂を聞かされても、一切の偏見なく親切にしてくれた恩人なのだ。万が一にも、迷惑はかけたくない。

だとしたら……。

(やっぱり、『踊る赤馬亭』の近く、かなぁ。ガスカールと一緒の下町探索でも、スカーさん

を通じて、あれこれ裏道やらなんやらの情報貰ってるし……）

ただ、そうした場合、ガスカールに知れたとき、「またお前は勝手なことを！」とか言って、盛大に怒られそうなのだが。

（でもあいつの手紙で呼び出されたのは事実なんだし……ま、偽手紙だったんだけど、そもそもあいつの筆跡なんか知らないっていうか、あいつ、考えたら走り書きひとつ、わたしに見せたことないのよね。家紋と封印が、ササンシールさまに教えていただいたエルスカーネ家のそれだったから信用しちゃったわけだけど……あー、そのこと知れたら、絶対迂闊だとか間抜けだとか言われそう……）

しかし、驚くべきなのは、十歳にして偽手紙を用意して、公式に会うことの許されない選定者を呼び出したウォルカードだ。

（ユーカリィヤさまのことを知りたい一念だったとしても……末恐ろしいかも。でもでも、あそこまでユーカリィヤさまのこと気にかけてらっしゃるってことは、絶対初恋よね♡　三つ違いかぁ……ユーカリィヤさまは元々病弱でらしたから、そんなに年上って感じに見えなかったのかも。でも、枕投げられるだなんて、ちょっと意外。結構気が強くてらっしゃるんだわ）

戻ったら、さりげなくウォルカードのことを話に出してみようかしら――。

そう、思った瞬間のことだった。

声ならぬ声――悲鳴――が、ナルレイシアの脳裏に響き渡った！

『いやあぁっっ！　助けてっっ！』

その声には、覚えがあった。

「ユーカリィヤさまっ!?」

叫んだ瞬間、違うと気づく。

これは、あの子だ――ユーカリィヤとそっくりな、あの怯えた子。

リオライーシャ。

里家から攫われた、ユーカリィヤの双子の妹。

実際に耳を打った声ではない……けれど、わかる。わかった。

（近い！）

確信すると同時に、ナルレイシアは御者に向かって叫んでいた。

「止めて！　馬車を止めてちょうだい！」

がくん、と大きく揺れた後、馬車が止まると同時に、ナルレイシアは扉を開き、駆け出していた。

彼女を助ける。

それ以外、なにも、考えられなかったのだ――。

そうして――その後。

「あっちゃ……」

一部始終を思い出し、ナルレイシアは自分の額をぺちゃり、と叩いた。

「わたしったら、間抜けすぎ……飛び出すにしても、あの御者さんに、『踊る赤馬亭』かスカーさんに、このこと知らせてくれって、ひとこと言い置いてきたら、良かったのに……」

考えなしに馬車を飛び出し、直感のままにリオライーシャを捜して、駆けて。

入り組んだ小路の突き当たりで、いかにも怪しそうな男たちに腕を捕まれているリオライーシャを見つけた。

『なにをしているの!?』

大声で叫んで、何も考えずに飛び込んで――。

(せめて、武器になりそうなものでも手に持ってから飛び込んでたら……って、無理か。あっという間に取り押さえられて、薬嗅がされちゃったもんね)

田舎の師匠は、不埒な男の餌食とならずにすむ程度の護身術を、ナルレイシアに仕込んではくれたけれど、それは到底腕っぷしの強い男たちを相手に通用するような代物ではなかった。

無為無策のまま飛び込んだ時点で、こうして一緒に捕まるのは決まっていたことなのだ。

「えーっと、一緒に捕まった、んだよね……?」

ただひとり、寝かしつけられていた寝台から立ち上がり、ナルレイシアは今ひとつ自信が持てないままにつぶやいた。

見るからに、いい部屋だった。

絨毯は南東地域にあるガラシア王国特産のもので、しかも極上品だった。寝具に使われているのは、東方のセアナ産の絹。寝台の脇の小台に使われているのは、北方産の木目が細かく堅い材質で知られる飴色松に違いない。

どれひとつ取ってみても、目が飛び出るような価格の代物だ。

(ま、品質はともかく、ちょっとバランスがちぐはぐなあたり、趣味がいいとは言い切れないけど……)

それでも——この屋敷の主が、経済的に豊かなことだけは疑いようがない。

(おまけのわたしがこの部屋で、目的のリオライーシャさまが地下牢なんてことはないだろうから、あんまりひどい扱いは受けてないと思うけど、最初っから隔離されちゃったかぁ。せめて一緒の部屋に入れてくれたら、少しでも情報交換できたのに……)

そうは思ったけれど、贅沢は言えないと思い直す。

邪魔な目撃者は口封じに殺され、そのあたりに放り出されてもおかしくはないのだから。

(一番いいのは、リオライーシャさまと一緒に、ここから逃げ出して、ガスカールかアマンシールさまの保護下に入ること……だけど)

それはさすがに難しいだろう。
第一、リオライーシャが本当にここにいるかどうかもわからない。おまけの分際の自分が、なにか要求したところで通るとも思えないし、なによりこの待遇が一時的なものに過ぎない可能性が大きすぎる。
（わたしから、搾り取れるだけ情報を搾り取って、あとは息の根止めてポイ、とか……すごくありそうでイヤ）
そうならずにすませるためにも、なにより多くの情報が必要なのだけれど――難しい。
（どうしたらいいのか、考えなくちゃ）
必死に頭を巡らせるナルレイシアの耳に、近づいてくる足音が聞こえてきたのはそのときのことだった。
（ここは、寝たふりをして情報収集！）
素早く寝台に駆け寄り、彼女は布団にもぐりこんだ。

（どうしよう……）
以前とは違う、けれど同じ気配に満ちた屋敷の一室に閉じこめられた少女――リオライーシ

ヤは、きりきりと親指の爪を噛みながら後悔していた。

（こんなことになるだなんて……）

思っても見なかった。

騙されて、里家から連れ出されて行った先は、気持ちの悪い淀みに満ちた屋敷だった。

それまで知らなかった贅沢な食事や豪華な暮らしも、生理的な嫌悪を消してくれるものではなかった。

確たる理由はわからなくても、そこが自分と自分の半身であるユーカリィヤにとって、好ましからぬ場所であることは感じ取れた。

だから、逃げ出したのだ。

けれど、追っ手は執拗で、何度「もう駄目」と諦めかけたことか——。

そんなときに、リオは金色の髪に黄玉の瞳を持つ——まるで黄神さまのお使いのような、年上の少女を幻視したのだ。

（このひとなら、きっと助けてくれる！）

そう、信じた。

信じてしまった——勝手に。

そのひとの周りには、普通では考えられないほどに厚い精霊たちの加護の光が溢れていたから。

（きっと、あのお姉さんは黄神さまのお使いなのだわ）

そうならば、絶対に凄い力を持っているはず――自分を助けることなど、苦もなくやってのけられるはず。

大体、夢でさえ、ユーカリィヤとしか会えなかったのに、救い手を求めたとき、突然あのお姉さんと会えたのだ。時々、夢で訪れた自分に、ユーカリィヤでさえ気づかないこともあるというのに、あのお姉さんは気づいてくれた。

（あのお姉さんこそ、黄神さまのお使いに違いない……どんなことがあっても、あのお姉さんが助けてくれる……きっと、ぎりぎり最悪の状況になったら……）

そう自分に言い聞かせて、リオライーシャは一所懸命、追っ手から逃げつづけた。

最後の最後まで、自分でできる限りのことはしようと思って――くたびれて汚れた格好で、店に入るとイヤな顔をされるだけでなく、妙な疑いを買うということを学んでからは、同じような格好をした人たちを見習うことにした。

食事やお酒を出す店の周囲を、綺麗に掃除する代わりに、お店のひとから残り物のご飯を貰うことを覚えた。

周りのひとたちも皆やさしくて、このままなら、あの恐ろしくも気持ち悪い屋敷に雇われている男たちに見つからずにすむかと思った矢先――。

いつものように、お店が開く前に、裏口のあたりを掃除していたときに、あの男たちが現れ

た。

ユーリに会うために、必ず自分がロスタロイドを訪れると読まれていたのか、それとも誰かが告げ口したのか……それはわからないけれど、あの時ほど目の前が真っ暗になったことはなかった。

もう駄目だ、逃げられない——そう思った瞬間、脳裏に浮かんだのは、あのお姉さんの顔だった。

「いやあぁっっ！　助けてっっ！　お姉さん、お姉さん、お姉さんっっっ！」

夢中で、叫んだ。

そうしたら、本当にあのお姉さんが駆けつけてくれたのだ。

自分を捕まえている大人の男のひとに、「なにをしているの⁉」と怒鳴りつけてくれて、細い腕を必死にさしのべて叫んでくれた。

「こっちよ！」

あのとき、このお姉さんは、本当に黄神さまのお使いなのだと思った。

だから、安心して手を伸ばし返した。

けれど——。

お姉さんは、黄神さまの加護を受けたおかげで、人間なんか敵じゃない……そんな、信じていたような、無敵な存在ではなかった。

男たちに腕を取られ、身動きできなくさせられた後、薬を嗅がされ、がっくりと倒れたお姉さんは、自分よりは年上で、体も大きいけれど、当たり前の人間の少女に過ぎなかったのだ。

そうと知っていれば、危険だとわかっているときに、助けを求めたりしなかった。……本当に命の危険を感じていたら、もしかしたら知っていても呼んだかもしれないけれど……でも、そこまでの危機感を覚えなかったあのときに、呼んだりはしなかった。

結果的に、自分だけでなく、お姉さんまで巻きこんでしまった。

リオライーシャはそれが悔やまれてならない。

「わたしの、せい、で……」

寝台の上で、リオライーシャは膝を抱え込んだ。

「わたし……どうしたら、いいの……？」

呼びかける相手は、生まれながらの半身たる少女しか、いなかった――。

26

舞台は数日後の王宮に移る。

突然、エルスカーネ公爵の訪問を受けた王子ウォルカードは、たったひとつの心当たりのために、内心冷や汗をかいていた。

前王家直系の血を、唯一引いているエルスカーネ公爵家は、先々代の王妹の降嫁先ということに加え、現公爵であるガスカールが、当代柱神アマンシールの養い児同然の扱いを受けていることもあって、ウォルカードも幼いころから親しくつきあってきた相手だった。

十も年が離れていることもあって、一緒に遊んだりしたことはなかったけれど、勉学やふと覚えた疑問などを、丁寧にわかりやすく説明してくれたり、度の過ぎた悪戯には拳まじりの指導をされたりと、ウォルカードにとって数少ない、頭の上がらない相手でもあった。

そんなガスカールの庇護下にあるナルレイシアを、その目を掠めるようにして、強引に招いたことは、早晩ばれて小言を食らうだろうと予想且つ覚悟はしていたのだけれど、お付きの侍従の「なにやら大層お怒りのご様子で」との言葉に、胃が痛くなった。

ガスカールは……怒ると本当に怖いのだ。
（だけど、ヴィル・ダカールには、神罰が下るような立ち入ったことは質問しなかったし……もちろん、この時期、王子のぼくが彼女と接触するのがそもそも問題だっていうのはわかるけど……）
他者に対して「わたし」と言うことに慣れて久しいウォルカードは、けれど思索に耽ったり、親しい間柄の人物と対するとき、幼いころの癖が抜けきらず、「ぼく」を使ってしまう。
（ええっと……もしかして、ヴィル・ダカールはぼくとユーリのことを慮って、どんな話をしたのか、カール兄上に話さなかったのかな……？　護衛兼お目付役のカール兄上としては、そのあたりの事情をぼくのほうに聞きに来た、とか……？）
いかにもありそうなことだと思った。
（義理堅いひとだなぁ……ヴィル・ダカールって。カール兄上になら、話してくれたってかまわなかったんだけど……あ、そうか。彼女は地方の出身だから、ぼくと兄上が親しいってこと、知らないのかも……だったら、なにがあっても口を噤むってことは考えられそうだな。にしても、カール兄上の追及を拒みきるだなんて、尊敬ものの剛胆さだ）
年頃の乙女としては、ちっとも嬉しくないに違いない賞賛の言葉を胸に、ウォルカードは彼女の誠意に応えよう、と思った。
正直なところ、「お怒りのご様子」のガスカールと対峙するのには、かなりの勇気をかき集

めなければならなかったけれど。

心を決め、ウォルカードはガスカールの待つ部屋の扉を開けた。

「お久しぶりです、カール兄……いえ、エルスカーネ公爵」

……室内の空気は、なぜか廊下より格段に低い気がした……。

エルスカーネ公爵ガスカールは、よく言えば大変生真面目な、悪く言うと融通のきかない頑固者だった。

それは、先祖返りの紫の瞳を持って生まれてきたことで、周囲から——実のところ、国王一家は彼をよく知り、且つアマンシールの保護下にあるということで、全く問題視していないのだが——危険だと見なされていることを、肌で感じるからこそ、身につけた性質だったのかもしれない。

出会った当初から、「家臣たる身に『兄上』はお止めください」と、耳にタコができるほどに繰り返し、ウォルカードはウォルカードで「尊敬できる年長の血縁者である兄上を、兄上と呼んでおかしいことはないはずです！」と主張し続けた。

結果的に、ディエーン一番の最高権威を有するアマンシールが、「公的な場でなければ、間

題はないだろう」と提案し、不承不承ながら、ガスカールもうなずいた。
以来、よほどのことでもない限り、頑固な公爵が身内の年長者として振る舞うことはなかったのだが、この日ばかりは、様子が違った。
「……カーディ」
常の彼なら、決して呼ばない、ウォルカードの愛称を口にしたガスカールの紫の双眸は、冷ややかな光を宿していた。
どうにも看過しがたい悪戯をウォルカードがやらかしたとき限定で見せる、ガスカールの本気の怒りモードだった。
「他人の手紙を偽造し、別の誰かを呼び出すのが、次期王太子として相応しい行いだと思っているのか？」
全身から怒りの波動をびしばし放っているくせに、口調だけは静かで……より恐ろしさが増す態度だった。
「あの……いえ。いいえ」
ようやくの思いで、やっとそう答えたが、怒り全開のガスカールの態度は容赦ない。
「相応しくないと知りつつ、行ったその理由は？」
ぴしぴしと、大粒の雹が直に肌にぶつかるような痛みと衝撃を覚える。
その剛胆さは尊敬に値する——と、先ほど思ったばかりの、選定者であるナルレイシアに対

して、今度は少しばかり恨めしさを覚えた。

（なーにーもー、完全黙秘を通してくれなくってもよかったのに）

オースリン侯爵令嬢ユーカリィヤ。

彼女と出会ったこと、そして時々文を交わしていたことは、以前ガスカールに話したこともあったから、その程度のことは白状してくれてもよかったのだ……そうしたら、王家の一員である自分が、選定者に接触するという、本来なら許されない行為に走ったその理由を、ガスカールだって理解してくれたかもしれないのに。

もっとも、頑固な青年公爵のことだから、「気持ちはわからないでもないが」という前置きをして、延々と懇々と説教されたに違いないけれど。

それでも、ここまで怒り心頭状態のガスカールと対峙する恐ろしい状況には陥らずにすんだはずだ。

（カール兄上の本気怒りモードに、正面から対抗できるヴィル・ダカールはもしかして、これがどんなに恐ろしいものか、実感できないのか!?）

大いなる誤解だった。

ナルレイシアは本気で怒り狂ったガスカールと対峙したことはなかったし、ウォルカードの態度にさえ内心びくびくしていたぐらい、普通の感性の持ち主だった。

ただ、普通よりは気が強く、しかもガスカールとは最悪な出会いをしたことで、彼に対抗し

ていたのだけれど……そんなことは、ウォルカードにわかるはずがない。
わかるのは、本気で怒ったガスカールの恐ろしさだけだ。ただし、それは単なる彼の放つ迫力だけが理由ではない。
彼が持つ紫の双眸こそが、最高の脅威なのだ。
ナルレイシアに異能の有無を問われた時には白を切ったウォルカードだが、実のところ、彼には精霊たちの姿こそ視認できないが、その声を聞くことができ、ときどきなら願いをかなえてもらえる程度には精霊の好意を得ているという恩恵がある。
そんな彼だからこそ、知り得た事実がある。
エルスカーネ公爵ガスカールの紫の双眸は、確かに先祖返りのものなのだけれど、それは一般に信じられているような、前王家エルスース縁のものではない。
紫の瞳は、そもそも精霊に無条件に愛される徴なのだ。
ガスカール自身に、その自覚はないし、彼の保護者であるアマンシールがうまく精霊たちのことをなだめてくれているおかげで、実害は被っていないが、彼には感情ひとつで精霊たちを突き動かす力があるのだ。
それはある意味、前王家の特徴を、先祖返りで生まれ持ってしまった以上に危険な力だ。
わかるからこそ、ウォルカードは決してそのことを口にしない。精霊たちの話から、いろいろと気づいていることもあるけれど、やっぱりいまの状況を脅かすようなことは、決して口に

しないと決めている。
ただ――。
（このカール兄上の、怒り心頭ど迫力モードだけは、なんとかして貰いたいんだけど……）
泣きたくなった。
この激怒する青年の感情に、近場にいる精霊全部が引きずられているのだ。
彼に精霊との交信能力がないのは、こうなっては幸か不幸かわからない。
わからない――が。
「すみません！」
かばっと頭を下げて、ウォルカードは謝った。
「カール兄上が見抜かれた通り、兄上の家紋と署名を偽造して、ヴィル・ダカールを強引にお招きしました！　彼女はなにも悪くありません！　ただ……ぼくが……ぼくが、ユーリのことが知りたくて……。さ、斎王になんか選ばれてからというもの、連絡もつかなくなってしまって、それでも精霊たちから様子を聞けていたうちはよかったんだけど、ヴィル・ダカールが見つかってからは、精霊も口噤んじゃって……。なら、本人から話を聞くのが一番の早道かな、と思って……無理矢理強引に、ここに来てもらいました！」
一息に言い切って、ウォルカードはガスカールの言葉を待った。
だが、いつまで待っても、言葉は降ってこない。

そろそろと顔を上げたウォルカードは、心外、と顔に書いた年長の身内の姿を目の当たりにすることになった。

そして、その後、ガスカールは実に複雑怪奇な百面相――ただしこれは、親しくつきあっている人間でなければ判別不能な変化に過ぎなかったのだが――を呈した後、首を傾げながら、ウォルカードに問いかけてきた。

「ユーリとは……もしかして、出会い頭に枕を投げつけてきたと言って、お前がぷりぷり怒っていた、あのユーリか？」

その後、ちゃんと和解したことも話したはずだったのだが……人間、聞いたこと全部が記憶されるわけではないらしい。

「オースリン家の令嬢だったのか!?」

いまさらなにを――と、思わないでもなかったが、どうやら初耳らしいガスカールの様子に、「はい、そうだったんです」とウォルカードは頷いた。

「そういうことだったのか」

ガスカールは、得心がいった様子でうなずいた。

先ほどまでの怒り心頭モードが、いつの間にか解除されていた。

（た、助かった……？）

胸をなで下ろしたウォルカードは、しかし次の瞬間、自分が早合点してしまったことに気が

ついた。

ガスカールの怒りに、即座に対応する用意のできた精霊たちの気配こそ散らばり、心臓を圧迫されるような危機感はなくなっていたが、よく知る年長の青年の、物言いたげな表情に、ウォルカードは引っかかるものを感じた。

（いったい、なにが）

あったのかと――内心首をかしげる彼に、黒髪の青年は、とんでもないことを求めてきた。

「事情はわかったが、だからと言って、この騒ぎは大きすぎる。こちらでも、それなりに都合を効かすことはできると思うから、即刻あの猿むす……もとい、選定者の身柄を返してもらいたい」

真顔の申し出だった。

「はあ？」

間の抜けた声を上げてしまったウォルカードを、非難できる者はいなかったに違いない。

扉の向こうから聞こえてくる足音とひとの声に、ナルレイシアは必死に耳をすませた。

廊下にまで絨毯が敷いてあるのか、足音のほうはよく聞こえなかったけれど、声が複数であ

ることはわかった。

声が、近づいてくる。

「わざわざ無関係な小娘まで連れてきた、だと？　面倒を増やしてどうする」

まだ若い男の、叱責する声が聞こえた。

「申し訳も……ですが、あの場に置き去りにして、後々こちらのことを調べられても面倒だと思いましたもので……」

腰の低そうな、もう少し年長らしい男の声が答える。

（リオライーシャを連れ去った実行犯とその主人ってとこかしらね）

ユーカリィヤが夢を通じて知ったことによれば、主人である男はリオライーシャを花嫁に望んでいるという話らしいのだが、そうだとすれば、ずいぶん年上ということになる。

この部屋を埋める調度を見れば、屋敷の主が相当に裕福であることは間違いない。だとしたら、リオライーシャが継ぐことになるオースリン家の財産目当てという線は、あまり考えられない。

（まあ、金は手に入るなら入るだけ欲しいって輩は少なくないって聞くから、可能性皆無ってわけじゃないだろうけど……もしかしたら、金はあるから今度は家格、とか……？）

富裕な商人のなかには、爵位を金で手に入れたり、貧しい貴族の娘と結婚することで、家柄の格を高めようとする者もいる。

(だとしたら、なんとなく納得できるかも……この微妙に趣味の悪いところとか)

けっこう辛辣なことを、ナルレイシアは考える。

そうこうするうちにも、声は段々近づいてきた。

「……なら、どこか別の場所に放置してくればよかっただろうが！　その程度のことも判断できないのか」

叱りつける声は、傲慢な響きに満ちていた。

威張ることで、己が優位を確認しようとするイヤらしさが滲んでいる。

(こういう男って、大抵救いのない馬鹿なのよね)

そして、馬鹿だからこそ先が読めない厄介な相手でもあった——対応に気をつける必要あり、と彼女は心のメモ帳に書きこんだ。

「……しかしながら、どうやら件のご令嬢と面識がある様子でしたし、なにより一見質素ながら、かなり上質の服を着ていたものですから……」

「馬鹿な。このロスタロイドに、あの小娘の知り合いがいるものか！　だが、待てよ……双子の片割れのほうの知人という線は捨てられないな……オースリンの娘と面識があり、上質な服を身につけていたとなると、どこかの貴族の娘か——おい、その連れてきた娘の特徴を言え。もし、かなり上の家の娘だった場合、解放するにしても、手間隙かける必要があるからな」

自分の未来の花嫁——一方的決定——を、小娘呼ばわりするあたり、どうにも愛情があると

は思えない。

加えて、台詞の後半部……後腐れがないのなら、さっさと処分するつもり満々だったのが読み取れる。

明らかに、ひとの命などなんとも思っていない男なのだ。

（最っ低ー。だけど、斎王院に入るとき、家から持ってきた私服の持ち込みが許されなかったのは、ある意味幸いだったかも。汚れても破れても大丈夫な普段着姿だったら、殺されてたかもってことだもの）

意外なところで命拾いしていたことを知り、ナルレイシアは胸をなで下ろした。

配下らしい男の声が、続いて耳に飛びこんでくる。

「生憎、身寄りを示すようなものは持っておりませんでしたが、なかなか見栄えのする娘です。髪も肌も爪もきちんと手入れされておりましたし」

その言葉を聞いて、ナルレイシアはいままで鬱陶しい、読書の邪魔ばかりしてくれる傍迷惑な存在としか認識していなかった、斎王院で身の回りを世話してくれる女官に心で詫びた。

（ご免なさい、ヴィスティ。毎日卵白で髪洗ったり、爪をヤスリでこすったり、朝夕必ずバラ水やら香油塗ったり、時間取るだけで役にも立たないことばっかり強要されて腹立たしいと思ってたけど、反省するわ……たまには、いいことがあるのね）

そのせいで、大幅に読書の時間が削られたときには、恨めしくも思ったけれど、あの手間隙

がなかったら、今頃冷たくなって下町の小路に転がっていたかもしれない——そう思えば、世の中決して無駄なことはないのだと認識させられる。

もっとも、当のヴィスティは、磨き甲斐のある女主人を得た途端、極限まで磨き上げるという使命を勝手に心に刻んだだけのことだった——というのは、後日判明した話なのだけれど。

「やはり貴族の娘か……そうでなくても裕福な家柄の出なのは確かなようだな。それで、髪の色は？　目は？　大体それで、どこの血統かはわかる。まあ、お前のようなやつにはわからんだろうがな」

（汚れ仕事までさせてる部下のこと、褒めるどころか逆にこき下ろすって、どういう態度よ？　まあ……あんまり人相もよくなかったから、腰掛け部下で、内心舌出してるかもしれないけど……）

そんなことを考えていると、部下らしい男が答えるのが聞こえた。

「髪は金で、瞳はこのあたりでは珍しい黄玉でした。年の頃は十五、六で、動きが都育ちの令嬢とは思えぬほどに機敏だったことを考えますと、恐らく地方出身で、外歩きに慣れた娘ではないかと」

大当たり、である。

（よく、あんな短い時間で、そんなとこまで読み取れるものだわ……）

そんな場合でないことは、百も承知していたが、つい感心してしまったナルレイシアだっ

た。

だが、主人らしい男が興味を引かれたのは、台詞の前半部だったらしい。

「……金髪に黄玉の瞳の、十五、六の少女、だと……？　まさか……いや、考えられないことではないな。すぐにその娘を捕らえている部屋に案内しろ！　いや、待て。顔を合わすのはまずい。薬を嗅がせたと言ったな？　どのくらいの時間、効くものなんだ？　もし、すでに目覚めているようなら、もう一度嗅がせるなり盛るなりするんだ」

徹底して、顔を知られる危険を避けるつもりのようだ。

（よほどに注意深いのか、それともとことん小心者なのか……でも、他人の命のこと、虫けらみたいに扱うやつが、ここまで顔を知られることを嫌がるなんて……なにか、別に理由がある……とか？）

だが、その理由がさっぱり思いつかない。

（うーん）

と、首を傾げたとき、部屋の扉が開く音がした。

（寝たふり、寝たふり、眠ったふり！）

本当に眠っているのかどうか、探るような視線を感じたが、ナルレイシアは体から力を抜いて、目を閉じたままやり過ごした。

「大丈夫です、こちらへ」

部下の男の言葉に安心したのか、もうひとつ、気配が近づいてきた。
「……本当に、眠っているのか？　寝具が乱れているようだが……一度目覚めたということはないんだろうな？」
念を押す男の言葉に、実際、一度目覚めて部屋を歩き回ったナルレイシアは、ひやりとするものを感じた。
しかし、部下らしい男の声が、それを否定した。
「ご心配なく。この娘に嗅がせた薬には、ときに悪夢を見せる副作用があり、意識を失ったまま身動きすることも珍しくないのです。薬の効果が切れても、すぐに眠るよう、催眠香も焚いておりますから、娘に意識はありません」
（いえ、実はしっかり意識あるんですけどー）
などと、自己申告するナルレイシアではない。
ただ、なぜ催眠香の影響を受けずにいられるのか、それだけは気になった。
（そう言えば、昔、何針も縫う大けがしたとき、麻酔のお薬が通常の量では全然足りなくて、二倍近く飲んだことあったっけ……もしかして、わたしってばひとより薬が効きにくいってこ
となのかしらん？）
こうした状況ではありがたいけれど、日常生活においては迷惑でしかない体質だった。
これからの人生、薬代が常に二倍かかるというのは、結構な財布の負担だ。

が――。

そんなことに拘泥している場合でないことを、ナルレイシアはすぐに、身近に迫った人物の指の感触で思い出した。

「どれ」

自分が意識を失っていると信じ切ってか、男は乱暴に横に向いていたナルレイシアの顎を動かそうとした。

「ん……」

思わず声を上げたナルレイシアに驚いたのか、さっと顎から指が外れる。

今しかない！

彼女は寝返りを打つふりを装って、一瞬だけ薄目を開け、男の顔を、見た。

その際に受けた彼女の衝撃は、尋常でなく大きかった。

心臓が、爆発するかと思った。

（な、なんてことなの……!?）

脳裏に焼き付いたその顔に、ナルレイシアは打ちのめされた。

それは……その顔は、直接対面したことこそなかったが、彼女も見知った人物のものだったのだ――。

ディエーン王都ロスタロイドで知らぬ者のない、魔法屋敷を訪れたエルスカーネ公爵ガスカールを笑顔で出迎えたのは、この屋敷の女主人である、銀髪の老婦人だった。

ファティ・リンシャと呼ばれ、ロスタロイド中から愛されている女性は、突然の青年の訪問に対しても、一言の文句を口にしたりはしなかった。

当代柱神であるアマンシールとともに、身寄りを亡くしたガスカールを育ててくれた女性は、極上の茶を手ずから淹れてくれた。

「まあ、カール。あなたがこちらに立ち寄ってくれるだなんて、久しぶりで嬉しいこと。ほほ、心配しなくても、書庫の梯子に腰掛けたまま、読書に耽るだなんて真似は自粛してますよ」

朗らかな声でそう言うファティ・リンシャに、ガスカールは神妙な顔でうなずいた。

「それはなによりです。願わくば、以降もずっと、それを心がけていただけるとありがたいのですが……」

母とも祖母とも慕う女性への、控えめな懇願は、しかし本が好きで好きで好きでたまらないという、老婦人の譲歩を勝ち取ることはできなかった。

「まあ、相変わらず堅苦しいことを言うこと。本を読む楽しみなくして、なんの人生でしょ

う」

「……恋なくして、という言葉は時々耳にしますが」

全然こちらの心配をくみ取ってくれる気がない、と見て取った青年は渋面で応じた。

しかし、その言葉に、なぜかファティ・リンシャは受けた様子で、ころころと笑う。

「なんて楽しいことかしら、あなたの口から恋だなんて言葉が飛び出すだなんて！　このことを聞いたら、きっとアマンシールも喜ぶに違いないわ。いえねぇ、わたくしも彼も、実は密かに悩んでいたのよ？　幼いあなたを引き取って、ほとんど代わりばんこに育てたわけじゃない？　スカーこそいてくれたけれど、それ以外は同じ年頃の友達もいなくて、わたくしたちのようなお爺ちゃんお婆ちゃんの相手ばかりさせてしまって……もしかしたら、あなたに華やかな噂ひとつないのは、そのせいなんじゃないかって」

初老に見えるとはいえ、まだまだ華やかさの方が勝るファティ・リンシャと、三十代後半にさしかかったばかりにしか見えない柱神アマンシールのふたりを、「お爺ちゃんお婆ちゃん」呼ばわりするのは明らかに間違っている。

もっとも、言っている本人が、そのあたりのことをわかった上で言っているのが確信できるだけに、否定の言葉さえ虚しく感じる。

「ファティ・リンシャ」

一刻も早く本題に入りたいという焦りがあったためか、ガスカールの口調は自分でも意外に

思うほど、きついものとなった。

しかし、ファティ・リンシャは動じない。

「はい、なにかしら、カール？」

暖簾に腕押し、糠に釘――有名な二つのことわざを、ガスカールは否応なく思い出した。

思い起こせば、知り合って以来、幾度となく覚えたさまざまな疑問を、この態度で煙にまかれてきたのだ。

だが、今回ばかりはそれを看過することはできない。

かかっているのは、この国の未来であり、その行く末の一端を担う少女の命なのだから。

「ファティ・リンシャ」

姿勢を正し、彼は養い親の片割れの顔を、真正面から見据えて告げた。

「あの山ざ……ではない、選定者に選ばれた娘の行方が、現在知れぬままとなっております。恐らく、危険な事態に巻き込まれたものと考えられます。彼女を無事に保護するためにも、貴女のお力をお借りすることはできませんか？」

「ナーシアが……？」

心底驚いたように、ファティ・リンシャは目を大きく瞠った。

しかし、その次の刹那、彼女の身を包む空気――纏う雰囲気が、劇的に変化した。

それは、それまでの偽装を脱ぎ捨てた何者かが放つ、強大にして印象的な本来持つ気配。

ひととは異質の――もっと圧倒的な力を有する者の、それだった。

「なぜ、それをわたしに――？」

頼むの？

言外の問いに、ガスカールは床に額ずいてしまいたいほどの圧迫感に耐えながら、必死に彼女の目を見つめつづけながら、答えた。

「……貴女が、既に代替わりを終えられたとはいえ、れっきとした柱神その方であることを、わたしが知っているからです。この国の行く末のためにも……あの娘の命を拾い上げるためにも、なにとぞお力をお貸し下さい……！」

ファティ・リンシャは即答しなかった。

ガスカールを見つめる彼女の双眸は、人のそれではなく、もう一次元高みに立つ者の、ひとならざる存在のものだった――。

嵐と共に

プロローグ

それは、ある夏の日のこと。

ディエーン王都ロスタロイドにあって、魔法屋敷と呼ばれる不思議の館の女主人である銀髪の女性は、届いた手紙の送り主の名を目にするなり、懐かしそうに、嬉しそうに口元を綻ばせた。

「ここ数年、体調を崩していたということだけれど、避暑地の別荘に客を招く気になったということは、本当に快復したのね……よかったこと」

「ご友人ですか？」

と、尋ねたのは、十代後半に差し掛かって間もない少女である。

金髪に黄玉の瞳を持つこの少女の名はナルレイシアと言う。

最初、老いの見え始めた銀髪の女性――ファティ・リンシャの代わりに、書庫の整理と管理をするために、ロスタロイドにやってきたのだが、紆余曲折があり、いまではほとんど家族同然の扱いをされている。

「ええ。どうやら体の調子もよくなったようで、別荘に招待したいと……あら、困ったこと、海辺だわ」

上品な初老の女性の、青灰色の双眸に翳りが走ったのには理由があった。

なんとなれば、一緒に連れていくつもり満々だったナルレイシアには、海辺に関しての拭い難い悪夢の過去があったからだ。

物心ついたころには、すでに『不幸中の幸いの権化』と周囲から呼ばれていたナルレイシア——とことん運が悪いというのに、毎回最悪の事態にだけは至らないということでついた渾名だった——は、幼い頃に訪れた海辺で、高波にさらわれた挙げ句、岩肌で大怪我を負い、生死の境を彷徨った経験を持っていたのだ。おかげで、彼女にとって海は禁忌の領域と化していた。

とはいえ、ナルレイシアにとって、ファティ・リンシャは大切なひとだった。

自分のトラウマを理由に、彼女が楽しみにしているに違いない、昔ながらの友人との再会を阻む気は皆目なかった。

ので——ナルレイシアはことさら明るく、屋敷の女主人に提案したのである。

「どうか、行ってらして下さいな。せっかくの、ご招待じゃありませんか。わたしなら、大丈夫ですから」

自ら留守番を申し出たナルレイシアに、しかしファティ・リンシャはなかなかうなずこうと

はしなかった。

一夏を友人の別荘で過ごすとなれば、短くとも二月の留守となる。いくら精霊たちに守られた屋敷でも、ひとり残していく気にはなれないのだろう。

「やっぱり、今回は……」

お断りすることに――と言いかけたファティ・リンシャを遮るように、力強い味方の援護があった。

ファティ・リンシャの知り合いで、さらには、他国の柱神さまの縁者らしい青年――スカルトードだった。

緑がかったつややかな金髪と、煙るような灰緑色の瞳を持つ彼は、本人自身が柱神だと名乗ってもおかしくないほどの、圧倒的な美貌を誇る青年だった。

「ご心配には及びませんよ。お留守の間、わたしももちろん入り浸らせていただくつもりですから」

少女ひとりが留守番する屋敷に、入り浸るなどとは、本来言語道断な言葉なのだが、彼の目当てがこの屋敷の書庫の蔵書にあることを知っているファティ・リンシャは寛大にうなずいた。

まあ、そういうことならと、応じつつ、ちらりと黒髪の養い児――ガスカールという名の青年は、れっきとしたこの国の公爵なのだが、幼いころに両親を亡くしたところをファティ・リ

ンシャたちに引き取られたこともあり、彼女のことを母とも祖母とも慕ってくれているのだ——に目を向けて見れば、不機嫌丸出しの表情で、しかしなにかを言うつもりはないらしく、むっつりと黙りこんでいた。

（スカーとナーシアを一緒にしておきたくないのなら、自分も残るぐらいのことを言えばいいのに……本当に、不器用で馬鹿なんだから……）

ファティ・リンシャはそう思ったが、他人がずかずかと踏み込んでいい問題ではないので、小さく息をつくにとどめた。

そして、今度はナルレイシアのほうに視線を向けたわけだが……渦中にある少女は、微かな緊張を孕んだこの場の空気に気づく様子もなく、「スカーさんが様子を見に来てくださるのなら安心ですね」などと暢気に答えていた。

（ああ、カールもカールなら、ナーシアもナーシアだわ……）

ひとりはどこまでも意地っ張りな頑固者、もうひとりは年頃の娘にあるまじき本の虫兼鈍感の化身。

銀髪の老婦人は、空高く匙を放り投げたくなった。

1

ファティ・リンシャとガスカールが、出立して三日目のこと――本に埋もれて読書を堪能していたナルレイシアは、忙しなく玄関の扉を叩く音に気づいて慌てて立ち上がった。

いまこの屋敷に自分ひとりしかいないことで、彼女が不安を覚えることはない。

なぜなら、ここは魔法屋敷と呼ばれる不思議の館で、敵意や悪意を抱いた人間は、決して玄関にもたどり着けないよう、精霊たちが守ってくれているからだ。

（スカーさん、かな？　昨日も一昨日も朝からおいでになったから、てっきり今日も朝一番にいらっしゃると思ってたんだけど、珍しく寝坊でもなさったのかしらん？）

本の虫同盟を結ぶ青年には、出会って以来、本当に色々、色々とお世話になっていることもあって、彼女の彼に寄せる信頼には絶大なものがある。

それだけに、玄関の扉を開けた途端に目にした、スカルトードの様子には、驚きを禁じ得なかった。まず、いつも綺麗に櫛で整えられた金髪は、くしゃくしゃに乱れているだけでも考えられないことなのに、慌てて羽織ってきたとしか思えない麻の上着のボタンがずれている。お

洒落で常に髪や服装に気を配っている彼とも思えぬありさまだった。
しかも――尋常でなく、顔色が悪かった。
「ど、どうなさったんですか!?」
（まさか、体調を崩して具合が悪いのに、無理をおして……!?）
そこまで自分のことを心配して――とは、間違っても考えないナルレイシアだった。
「スカーさん！　ひどい顔色ですよ、夏風邪召されたんじゃありませんか!?　そりゃあ、ファティ・リンシャの蔵書の素晴らしさはわかりますけど、具合悪いのに読んだところで、ろくに頭に入りませんよ!?　寸暇を惜しんでも本読みたい気持ちは、痛いほどよーっくわかりますけど、でも！　ここは――」
帰って養生したほうがいい――とまで、ナルレイシアは言うことができなかった。
スカルトードが、いきなり頭を下げて謝罪してきたからだ。
「ヴィル・ダカール！　まことに申し訳ありません！　故郷から、急の知らせが届き、戻らねばならないことになってしまいました！」
彼の故郷がこのディエーンでないことは知っていたので、ナルレイシアは深く問いただすようなことはしなかった。
故郷からの急の知らせ――しかも帰郷する必要がある、となれば、よほどのことに違いないからだ。それでも、手紙や言伝てでなく、直に言いに来てくれたスカルトードの誠意に感謝し

つつ、彼女は「はい」とうなずいた。

「わざわざ足を運んでくださって、ありがとうございます。でも、そういうことでしたら、急いでお戻りにならないと！　わたしは大丈夫ですから、どうか」

そう答えた彼女に、スカルトードはもう一度深々と頭を下げた。

どこまでも礼儀正しいひとだなあ、と思いながら、スカルトードを見送った後、ナルレイシアは少しだけ考えこんだ。

食事のことだった。

読書に没頭するあまり、過去二度ほど寝食を忘れ、倒れかけたことのあるナルレイシアに、ファティ・リンシャは規則正しい食生活を送るよう、くどいまでに言い置いて出かけていったのだ。

見張り役は、屋敷に集う精霊たち――言いつけを破ったら、即座に書庫から放り出され、しかも書庫には鍵をかけるという念の入れようだ。

それを防ぐという意味で、柱神の縁者であり、精霊の気配に敏感なスカルトードがそばにいてくれるというのはありがたかったのだが……。

（んー、ここで書庫から放り出されるような真似、わたしがしたら、絶対精霊たちがファティ・リンシャにご注進に走るわよねえ……。そんなことになったら、わたしのことを心配して、戻ってらっしゃるかも……せっかく、懐かしいご友人と過ごされるために出かけられたの

に、そんな申し訳なさすぎること、できっこないわ）

しかも、そうした運びでファティ・リンシャ共々ロスタロイドに戻るようなことになったら、厭味皮肉の口撃を惜しみなく見舞ってくれるに違いない人物がいるのだ。

それは、絶対に遠慮したい。

黒髪紫眼の青年は、たとえそれが、こちらの身を案じてのものだとわかっていてさえ、怒ったりへこんだりせずにはいられない言葉ばっかり選んで投げつけてくれる人物なのである。

どうしたものかと、しばし考えた後、彼女が取った方法は、ある意味自分を知る者のみが選べるもの、だった。

栞を挟んだ頁にたどりつくと、ナルレイシアはレースのカーテンごしに、陽の高さを確認した。

そろそろ太陽が中天に差しかかろうとしていた。

（よし、ちょうど正午ぐらいね）

時計でも一応確認し、彼女は席を立った。

読書に夢中になるあまり、寝食を忘れることのないよう、彼女が考えついた方法とは、自分

の読書ペースから逆算して、食事時に差しかかるあたりの区切りのいい頁に、前もって栞を挟んでおくこと、だった。

しかも、間違っても書庫から締め出されたりしないよう、二冊か三冊を持ち出して、自室で読むようにしていたから、いまのところお目付役の精霊たちからのお咎めは受けずにすんでいる——そこまで用心しなければ、あっさりと寝食を忘れてしまうことに疑問を覚えないあたり、彼女は正真正銘の本の虫だった。

しかし——ファティ・リンシャが出立して十日目、スカルトードが故郷に戻ると挨拶に来てから一週間目。台所に入ったナルレイシアは、食糧が底をついているという非常事態に気がついた。

(しまったああ！)

本の続きが気になるあまり、食料調達を怠ったあげく、保存食に頼り切っていたせいで、屋敷の食糧は殆ど尽きかけていた。

(そ、そういえば、最初の二日はスカーさんが持ってきてくださったお野菜とかお肉のおかげで、豊かな食卓を満喫できてたよーな気が……)

その後は、ひたすら台所にある保存食を、「食べられたらいいか」感覚で料理していたような気が……いや、きっと気のせいではない。

「か、買い物に行かなきゃ……」



つぶやきながら、ナルレイシアが買い物メモに書き出したのは、薫製肉、腸詰め、酢漬け甘藍、塩漬け瓜――など、やはり保存のきくものばかりだった。

健康的な食生活を送ることより、少しでも長持ちする食材でやりくりすることを優先する彼女は――同居人がいる状態なら、しっかりきっぱりそのあたりのことも留意するのだけれど――確かにひとりで暮らすには、難のある人物かもしれなかった。

「久しぶりじゃないか、良く来たねえ！」

ナルレイシアが買い物のために外出し、立ち寄った店の女主人は、彼女のことを歓迎してくれた。

ロスタロイドの下町近くにある、居酒屋兼宿屋『踊る赤馬亭』――赤馬とは火事の隠語で、縁起の悪さでは他の追随を許さない店名なのだが――不吉この上ない看板を、改める気皆無の剛胆な女将は、まだ若い、実に印象的な女性である。

淡い金髪と褐色の肌という、北国と南国の血が絶妙に融合した容姿のこの美女は、ナルレイシアにとって恩人であると同時に、なにかと相談に乗ってくれる、ありがたいひとだった。

というのも、ナルレイシアが、ロスタロイドにたどり着いて間もなく、酔漢に突き倒され、

頭を打って意識を失ったところを、スカルトードに保護され、この店で面倒を見てもらったという過去があるからだ。

その後も、生まれ持ったありがたくもない因縁やら、更に付随して生じた厄介な事情やらもあって、スカルトード同様、めちゃくちゃにお世話になったこともあり、なるべく心配をかけないようにしようと心がけていたのだが……このときばかりは、彼女は本能――の内、食欲――の下僕と化していた。

空腹を覚えた時点で食材の不足を知り、慌てて買い出しに出たナルレイシアの胃袋は、『踊る赤馬亭』の扉を開けた途端、漂ってきた美味しそうな匂いに、もはや抵抗できなくなっていたのだ。

「……ランディータさん、お願い……すぐに食べられるもの……お願い」

言うなり、ナルレイシアはテーブルにぱたん、と倒れこんだ。

自覚がないだけで、実は相当空腹だったらしい。

本の虫症候群の患者の症状には詳しいらしい――ナルレイシア同様、本に囲まれると寝食を忘れるという悪癖の持ち主であるスカルトードとは長年のつきあいらしいというから相当だ――女将ランディータが呆れたように問いかけてきた。

「……まさか、何日も飲まず食わずだったわけじゃなかろうね!?」

「それこそまさかです。ちゃあんと、食べてました…よ」

「じゃあ、水でもお茶でもいいけど、水分補給は？」

問われて、ナルレイシアはぎくりとした。

ファティ・リンシャの屋敷は、精霊の加護を受けた魔法屋敷として有名だが、精霊たちは本来の季節を無視するような力は、よほどのことがない限り発揮しないのだ。湿度を調整してくれるおかげで、随分過ごしやすかったのは確かだが、けっこう汗なんかはかいてたような……気がしないでもない。

更に言うなら、保存食を中心に料理するようになってから、夢中で本を読んでいる最中でも、なんだか喉が渇いたりして……でも、先を読みたくてそうした感覚を無視していたような気も……。

そう打ち明けると、ランディータは特大の雷を落としてくれた。

「この馬鹿娘！」

耳を劈く大喝だった。

「あんたのこと、仮にも女だから、男よりは身体保全能力強く出来てるだろうって、思ったのが間違いだった！　とにかく！　今日は帰さないよ！　いいや、この様子だと、二日はうちで、しっかり面倒見る必要ありと見た！　まず、あんたはしっかり食べるもの食べて、必要な水分摂って、体の均衡取り戻さなきゃだめなんだから！」

あと、これからファティ・リンシャが戻ってくるまでの間、三日に一度は、監視の意味を兼

ねて、お屋敷に伺わせてもらうよ！

指をつきつけての迫力満点な宣言に、さしものナルレイシアも辞退の言葉を口にすることはできなかった。

「……ご面倒おかけして、すみません……」

まったくだよ、と答えるランディータの声は、しかしからりとしていた。

こういうのを、きっと大人の気遣いと言うのだと、ナルレイシアは至らなさ満載の自分を情けなく思うと同時にランディータへの感謝を胸に刻んでいた……。

2

塩分過多摂取と、水分補給不足による軽い脱水症状は、ランディータの強制的な世話のおかげで、翌日の午後にはほとんど解消されたのだが、思いがけない嵐の到来で、ナルレイシアは帰宅を一日延ばさざるを得なくなった。

それはもう、恐ろしい暴風雨と雷が、ロスタロイド周辺を襲ったのだ。

雷にも、海辺で受けたトラウマ同然の、痛くて辛い記憶があったナルレイシアは、一晩中寝台のなかで震えていた。

とはいえ、夏の嵐は過ぎ去れば、晴れるのも早い。

「本当に、お世話になりました！　ありがとうございました！」

ランディータに対する感謝の言葉に、誓って嘘偽りはなかったけれど、ナルレイシアは一刻も早く、ファティ・リンシャの魔法屋敷に戻りたいと思っていた。

なぜなら、精霊の加護厚いかの屋敷では、彼女が震えて身動きできないほどの雷に襲われることがないからだ。

（帰る、帰る、絶対帰るーっっ！）

そんなナルレイシアの心の声に気づいたのか、ランディータは敢えて引き留めようとはしなかった。

ただし、不摂生厳禁の釘を刺すことと、巷の情報に疎い彼女に注意を促すことは忘れなかったけれど。

「塩漬け肉は、調理前に塩抜きすること。薫製肉もやっぱり塩がきついから、味付けはつもり程度に控えること。あと、絶対、お茶でも白湯でもいいから、水分補給はこまめにすること！だからって、この時期の生水はやばいから、絶対飲まないこと！　それと、ここんところ、この界隈に限らず物騒な事件が起きてるらしい上に、人を襲う野犬が出るって話だから、決して人目のない小径なんて歩かないこと！」

いいね――と念を押され、ナルレイシアは思わず背筋を伸ばし「はい」と答えた。

ランディータには、それだけの迫力があったのだ。

「絶対、絶対、約束します！」

直立不動の姿勢で、答えたナルレイシアだったが……もちろん、ランディータとの約束を破るつもりなどなかったわけなのだけれど……心の一部は、屋敷に置いてきた、読みかけの歴史書の続きに飛んでいた。

だもので、『踊る赤馬亭』を辞して、帰路をたどる彼女は――元の木阿弥だが――いつもの

くせで、魔法屋敷への最短路――裏道を含む――を辿っていた……視界にちらりと映った、どきりとするほどに、鮮やかな赤い色に気づくまでは。

（え!?）

石畳に散るそれは、血の色。

（なに!?）

思わず振り返ったナルレイシアは、その血を流した存在を探した。

見つからないなら、いい。動けるだけの力が残っていて、その場を立ち去ったのかもしれないから。

けれど、見つかったら――見つけたら。

そのときは。

正直なところを言うなら、探しながらも見つけたくはなかった。面倒事に関わることを嫌ったからではない、石畳を濡らすその赤い色は、かすり傷ではあり得ないほどに、広かったからだ。

（昨日の夜の……あの酷い嵐のなかで、誰かがこんなに血を流すような怪我をしたのだとしたら……？）

そう思うだけで、動悸が激しくなった。

けれど、ナルレイシアは見つけてしまった――細い路地裏で、血にまみれ、倒れ伏している

青年を。

血と雨の乾ききっていない、その青年の髪は、緑がかった、独特な色彩を誇る金――。

「うそ……」

とつぶやき、駆け寄って――覗き込んだその顔は、意識を失い、瞳こそ閉じてはいたが、間違えようのない知人のものだった。

（うそ……だって、故郷で大変なことが起こったって……だから、一刻も早く戻らなくてはならないって……）

そう言ってらしたのに――なぜ!?

頭部と右肩から、血を流している青年の体にすがりつきながら、ナルレイシアは必死にその名を呼んだ。

「スカーさん！　しっかりなさってください、スカーさん！　どうか、意識を取り戻してください！」

ナルレイシアの必死の呼びかけにも、青年は反応してくれなかった。

近しい女性の親族のように、彼が慕うファティ・リンシャはいま、ロスタロイドにはいない。

皮肉まじりに本音を言い合える友人である黒髪の公爵も……やはり、いない。

だとしたら……いま、この時点でスカルトードに一番近しいひとは……？

即座に答えを出し、ナルレイシアはそばにいた子供に、『踊る赤馬亭』の女将ランディータへの伝言を頼んだ。

ランディータの行動は迅速で、四半時を待たず、彼女とスカルトードは保護されたわけだが、そのさらに半時後、外ならぬスカルトードによって、ナルレイシアとランディータのふたりは、恐慌状態にたたき落とされた。

なんとなれば……。

意識を取り戻すなり、スカルトードは、見知らぬ人間に対する目を、ナルレイシアとランディータのふたりに向けた挙げ句、「麗しいお嬢さん方。ご心配をおかけしたようで申し訳ない……だが、どこかでお会いしましたか？」という、とんでもない言葉を放ってくれたのである。

しかも、さらに、さらにである。

「スカー!?　どうしたの、しっかりして！」

「スカーさん、いったいどうなさったんですか!?」

という、ふたりの呼びかけに、彼はなにやら悩んだ後で「もしかして、それがわたしの名前なんでしょうか？」と逆に問い返してきたのだ。

そのときの衝撃といったらなかった。

「スカー!?」

「スカーさん!?」
ランディータとナルレイシアのふたりが、揃って顔色を失ったことは言うまでもない。

3

頭部にべっとり血がついていたにもかかわらず、スカルトードの頭部に受けた傷は、ごく軽いものだったらしい。

「まあ、頭ってのは傷の割に大出血することが多いしね」

とは、酒を出す店の女主人で、酔客（すいきゃく）同士の喧嘩（けんか）にも慣れているランディータの言である。

「そ、そうなんですか」

ほっとして、そう答えたナルレイシアは、しかし次の瞬間、ちっともよくない現状を思い出した。

スカルトードの受けた傷は、それだけではなかったのだ。

右肩に受けた、まるで獣に食いちぎられたかのような傷は、ランディータから聞かされた人を襲う野犬――あるいは、それ以外の肉食獣の襲撃――を思わせるもので、ナルレイシアとしては気が気ではなかった。

……まあ、幸いにも、これまで襲われた被害者が辿（たど）った運命――すなわち死、だ――からは

逃れ得たわけなのだけれど。
だが、最大の問題が、そこには残されていたのだ。
（体の傷が大したことなかったのはよかったけどっっ！　でも記憶がなくなっちゃったのは大問題じゃないのーっっ！）
その事実で、ナルレイシアたちを混乱の渦にたたき込んでくれた本人は、時間とともに徐々に記憶を取り戻してくれるかも――という、周囲の期待を裏切り、発見三日後のいまに至っても、記憶のかけらも戻らない状態にあった。
しかも、スカルトードを看た医師によると、頭部の傷はどうやら転んで頭を打ったせい、らしい。
「襲われたところをかわそうとして転んだのか、滑ったおかげでその獣の狙いが外れて致命傷にならなかったのかはわからんが、運のいいことだ。もっとも、そのせいで頭の中身がすぽんと抜けたとあっては、痛し痒しといったところだがな」
とは、その医師の見解で、しかも周囲を調べた警邏隊員からは、気になる情報も入ってきていた。
スカルトードが倒れていた路地の奥で、喉を切り裂かれた若い女性の死体が発見された、というのだ。
その殺され方が、最近連続して起こっている強盗殺人のそれとそっくりだったと聞いて、ナ

ルレイシアはますます不安になった。

スカルトードを赤馬亭に運びこんだ後で聞いたのだが、連続強盗殺人の被害者には、必ず獣の牙による傷が残されていたのだそうだ。最初は、強盗犯に殺された被害者の遺体を、飢えた獣が見つけ、餌と見なしたのではないか――と考えられていたそうなのだが、遺体には、『喰われた』痕跡は一切なかったのだという。

では逆に、獣に襲われ息も絶え絶えの被害者に目をつけた人間が襲い、金品を奪ったのか――とも考えられたそうだが、どちらにしても、獣が『喰う』ためではなく、単純にひとを襲い傷つけるという点で、おかしいということになったらしい。

そしていま、最も信憑性が高いとして、捜査に当たっている関係者たちが考えている線というのが、強盗犯が、いかなる手段かを用いて、獣を操り、自分の仕事を楽にしているのではないか――というもの。

発見された女性は、ロスタロイドの酒場の歌姫で、これまで狙われた、裕福そうな旅行者という条件には当てはまらなかったが、倒れていたスカルトードが旅装だったことを考えれば、不運にも現場を目撃したせいで、殺されてしまったという可能性は否定できない。

もしくは、裕福な後見人を持つ歌姫を強盗犯が襲ったところに、偶然スカルトードが通りかかった――という逆のことも。

「つまり、スカーは実際に狙われたにしろ、偶然巻き込まれたにしろ、最近ロスタロイドを騒

がせているはた迷惑な人殺し野郎の顔を見た可能性が高いってんだね!?　なーのーに、当の本人ときたら記憶すっ飛ばしちゃって、犯人の顔もそのときの状況も、何一つ思い出せないってわけだね!?　肝心なところで、なんで全然使えないんだよ、あいつったら！」

怒り爆発のランディータの言葉に、概ね同感だとは思ったものの、ナルレイシアはさすがに被害者であるスカルトードを、そこまでけなすことはできなかった。

（そりゃあ、まあ、確かに……そういうことなら、唯一の目撃証人であるスカーさんが、また狙われることはあり得るわけだし、だったら、襲われる前に、そこらへんの事情だけでも思い出してもらえたら、スカーさん自身も安全な身になれて、一番だとは思うんだけど……）

ただ、どうにも気になっていることが、ひとつ。

「……なんで、スカーさん、この時期にロスタロイドにいらっしゃったのかなぁ？　急いで故郷に戻らなきゃならないからって、十日前、わざわざお屋敷にいらして下さったんですよね」

ナルレイシアのこの言葉に、ランディータが目を瞠った。

「十日前？　だったら、確かにいまここにいるのはおかしいね……あいつの故郷はガライラの片田舎だって聞いた覚えがあるから」

ガライラ大公国は、ディエーンの北部に位置する小さな国である。

国境こそ接していないが、近隣諸国のひとつに数えられる国ではあるが、それにしても一週間で往復するのはいささか難しい。

しかも、早急に戻らなければならない事情となれば、大抵は近しい身内の不幸が考えられる。途上で新たな知らせを受け取ったにしても、戻ってくるには早すぎる。

「一時深刻な状態に陥ったお身内の方が持ち直されたとわかっても、お見舞いには行かれるはずですよねえ」

「儚くなったってんなら、葬儀には参列しなきゃなんないだろうし……」

言いにくいことをずばずば言うのは、ランディータの長所でもあり欠点でもあった。

「ランディータさん、そんな言い方は……！」

咎める目を向けたナルレイシアに、褐色の肌の美女は、「ごめん、ごめん」と謝りながら、

「でも、どちらにしろ、ここにいるはずはないんだよねぇ」とこぼした。

確かに、それが目下の謎だったから、ナルレイシアも「ですよねえ」とうなずいた。

「あと、考えられることといったら……」

そう言いかけて、ランディータはふっと、気遣うような視線をナルレイシアに向けて尋ねてきた。

「医者の話だと、記憶が欠けてることを除けば、スカーの怪我の方も心配ないらしいし、お屋敷に戻るかい？　確かにまた雨が激しくなってきちゃったけど、雷は遠いようだし、なんなら辻馬車呼んであげようか？」

傷を負ったスカルトードを見つけ、舞い戻ってきたナルレイシアが、あの嵐の翌朝、決死の

覚悟をたたえた様子で、ファティ・リンシャの屋敷に戻ることを主張したことを、ランディータは覚えていてくれたらしい。

が――。

ナルレイシアは、その気遣いに感謝しつつも、硬い声で「いいえ」と答えた。

雷鳴が聞こえるという時点で、彼女にとって、それは深刻すぎる事態となっていたのだ。

（雷がくる、雷がくる、雷がくる……っっ！）

それは、恐怖以外の何物でもなかった。

「こ、ここに……いさせて下さい。ご迷惑はおかけしませんから」

顔を引きつらせ、そう告げたナルレイシアに、ランディータは感心した様子で何度もうなずいた。

「本当に、責任感の強いお嬢さんだねえ。そこまで言うなら、いてくれても構わないけど…万が一、なんかやばいことが起こっても、恨まないでおくれよ？」

まるで、それが確定事項のように告げてきたランディータに、ナルレイシアもさすがに不穏というか……怪しいというか……そういうものを感じて、問いかけた。

「……もしかして、そういうことになりそうなんですか？」

「いや？　ただの勘。ただ、あんたとスカーが揃ってうちにいると、間違いなく騒ぎが起こるっていう過去の経験からの、ね」

返す言葉がなかった。

自分が身を寄せていたせいで——あれは、スカルトードは単に口を利いてくれただけだったから、責任は全部自分にあると思うのだが——ランディータが経営するこの『踊る赤馬亭』が賊の襲撃を受け、かなりの被害を出す羽目になった出来事から、まだ二年も経っていない。

「あ、あの節は、本当にご迷惑を……」

もごもごと言うナルレイシアに、剛胆な女将は手をひらひらと振った。

「ああ、気に病ませるつもりはなかったんだよ。ま、確かにいかな魔法屋敷でも、ひとりきりでいるよりは、うちにいるほうがまだ安心できるかもしれないね。雷なんてあっという間に近づいてくるもんだし、馬車に乗ってるからって、落ちないとも限らないからね」

ランディータの言葉に、ナルレイシアは胸の動悸が激しくなるのを感じた——雷は、本当に恐ろしいのだ。

だから、ランディータがあっさりと話題を変えてくれたときにはほっとした。

「……にしても、不意打ちを食らうとは、あいつらしくもない……いったい、何に気を取られていたんだか……」

「……やっぱり、警邏隊のひとが言ってたように、強盗殺人の現場に偶然通りかかって、それで周囲にまで気が回らなかったのでは……？」

ナルレイシアの言葉に、ランディータはため息まじりに「そうかもね」と答えた。

「だけど、情けないったら！　あいつの傷、頭のやつが一番軽かったんだよ!?　なのに、肝心の記憶をなくすだなんて、間抜け。間抜けすぎ！」

（ランディータさん、それ、ちょっと酷いかも……）

と、ナルレイシアは思ったが、それを口にすることはなかった――いや、出来なかったのだ。

「そん……」

な言い方って――と、彼女が口を開きかけた、まさにその瞬間、一度雨戸を開いた、玻璃を嵌めこんだ窓から、目映いばかりの青白い光が届いたのだ！

それが、なんの光であるのかを認めると同時に、ナルレイシアはその場にしゃがみ込んで、両手で耳を塞いでいた。

「いやあああああぁぁぁっっ！　雷だけはいやあああぁぁっっ！　どっか、ここじゃないどっかに行っちゃってえぇぇぇっっ！」

嵐、再来――。

しかも、天から降ってきたのは、雨ではなく、とんでもなく大きな雹だった。

ランディータが慌てて雨戸を閉めてくれたおかげで、窓が破られることこそなかったが……

それからしばらくの間、ロスタロイド中の人間が、屋根を打ち付けるドゴッ、とか、バゴッ、とか、ガコン、とか――異様な音を聞きながら、不安に苛まれつづけることとなったのだ。

この世の終わりとは、さすがにほとんど誰も思わなかったが……天変地異の前触れか、と不安に思った者は……珍しくなかったというのが、後に判明した。

4

雹こそすぐに止んだが、代わりに土砂降りの雨と雷が、ロスタロイド中を襲うことになった。

（ま、また鳴った！）

雨戸を閉め切った窓からは、稲光は見えなかったが、精霊たちが気を利かしてくれるファティ・リンシャの屋敷とは違い、音ばかりは防ぎようがない。

両手で耳を塞いでも、どうしたって聞こえてくる雷鳴に、ナルレイシアは真っ青な顔で「うぅぅ」と唸った。

そんな彼女とは対照的に、落ち着き払った態度で息をつくのは、『踊る赤馬亭』の女主人ランディータだった。

「この嵐じゃぁ、店は開店休業だね。この勢いで雨が降り続くとなると、ロスタロイドの排水設備でも間に合わなくなっちまう可能性もあることだし、浸水したときのために、ちょいと準備しておこうかね」

そう言うと、彼女は従業員たちにてきぱきと指示を出し始める。

「テーブルクロス、はがして。汚水に浸ると腐食したり臭いがなかなか抜けなかったりで後々面倒だから、テーブルと椅子は二階に運んで！　食材と調味料と酒は、空いてる部屋に運んでから、鍵かけること！　薪代も馬鹿にならないんだから、廊下でもいいから、しっかり濡れないように上に持って行くんだよ！　なにより水！　浸水しないうちに、さっさと井戸から汲んできて、あるだけの水瓶に溜めとくこと！　溜めてから運ぶなんて馬鹿な真似、するんじゃないよ！　で、全部終わったとこで今日の仕事は終わりだ。早くしないと家に帰れなくなるよ！　はい、始め！」

ランディータがぱん、と手を打った途端に、用心棒を含めた従業員たちが一斉に動き出した。

「あ、わたしも……」

なにか手伝います――と言いかけたナルレイシアに、ランディータは「いいから、スカーの様子でも、見に行っとくれ」と告げた。

「うちの連中は力自慢が多いから、すぐに片付くから大丈夫だよ。それより、あいつのそばにいてやっててくれないかな？　嵐なんぞにびくつく可愛らしい神経の持ち主じゃぁないのはわかってるけど、自分のことが全然わからないっていう、今の状況は、さすがにあいつでもきついんじゃないかと思うから、さ」

彼女の薄茶の瞳に宿る、やさしい光を目にして、ナルレイシアは「はい」とうなずいた。
（ランディータさん、結構酷いこと言ってたけど、本当はスカーさんのこと、ちゃんと心配してたんだ……）
そう思うと同時に、反省した。
（なのに、わたしったら、全然駄目じゃない。いくら気丈に明るく振る舞ってらしても、スカーさんが不安でないはずがないのに、そんな当たり前のことにも気づけなかっただなんて……）
しかも、彼が記憶を失うような大怪我を負ったのは、こんな嵐の中だったのだ。
（思いやりに欠けているわ、わたし）
大いに反省しつつ、ナルレイシアは深々と頭を下げた。
「そうします。皆さん、大変でしょうが、頑張ってくださいね」
そうして、二階のスカルトードの部屋に向かったナルレイシアは、ついぞ気づくことはなかった——雷鳴が轟く度、真っ青になって両手で耳を押さえ、床にしゃがみ込んでしまう自分が、はっきり言って邪魔でしかなかったことには。

……大怪我をして、記憶を失ったスカルトードは、しかし一見したところ、どこまでも明るかった。

ナルレイシアが部屋に入るなり、彼が口にした言葉といえば――。

「おお、黄金の小鳥姫」

だった。

がっくりと、膝をつきそうになった。

これが、女性を口説くために口先だけで紡いだ言葉だったら、ここまで脱力しない。浅薄な口先男の口説き文句には、幸か不幸か、耐性があるのだ。

もし、そういう讃辞であったら、鼻で笑って一刀両断して終わりだ。

しかし、タチの悪いことに、記憶をなくしたスカルトードが口にする女性讃美の言葉の数々は、紛れもない本音だとわかってしまうから、困るのだ。

本の虫同盟を結んだ自分に対しては『黄金の小鳥』、昔からの知り合いで「気の置けない仲間みたいなもんだ」と両者の関係を説明したランディータに対しては『琥珀の女神』呼ばわりをやめようとしないのだ。

あまりにも自分の知っているスカルトードと違いすぎて、ナルレイシアは会う度に混乱しそうになる。

「は、はは……お体の方は如何ですか？」

「お気遣いいただき、まことにありがたく思いますよ、黄金の小鳥姫」

目映いばかりの笑顔で、そんな恥ずかしい呼び名を口にされ、ナルレイシアはますます体から力が抜けそうになった。

（その、黄金の小鳥姫って呼び方やめてーっ！）

と、叫びたいところなのだが、なぜだか、そうは言えないのだ……多分、脱力感が大きすぎるせいだろう。

そんな、彼女の心中を悟ったのか、スカルトードは微かに眉宇をひそめ、問いかけてきた。

「もしかして、わたしは以前、違うように貴女のことを呼んでいたのでしょうか？　ならば、そのように呼んだ方が良いのでしょうか……貴女がもし、ご不快に思われないようでありましたら、是非、それを教えていただきたいのですが……」

渡りに船の提案に、ナルレイシアは飛びついた――絶世の美貌の青年に、これまた信じられないぐらい魅力的な声で「黄金の小鳥姫」と呼ばれるのは、どうにも落ち着かないというか、勝手に胸がどきどきしてしまって困るからだった。

「いえ、とんでもない！　わたしのことは……その、家名のダカールで呼んでくださってました」

本当は、未婚の女性に冠する敬称「ヴィル」付きだったのだけれど、そこまで告げるのは憚られた――ヴィル・ダカールとはすなわち「ダカール家のご令嬢」といった意味なのだ……記

憶を持たない相手に、そんな呼びかけをさせるわけにはいかないではないか。

相手は柱神さまとの縁が深い一族のひとで、自分は、それなりにディエーンでは手広く商売をやっているものの、貴族でもない商会の社主の娘に過ぎないのだから。

しかし、本当に記憶を失ってしまったらしい青年は、とんでもない言葉を口にしてくれたのである。

「……ファティル・ダカール……？」

「やめてくださーいっっっ！」

ナルレイシアは叫んだ。

ファティルとは、高貴な未婚の女性に冠される尊称で、普通貴族の令嬢にしか用いられないものだからだ。

因みに既婚女性に冠される尊称はファティである。

「それはやめて、絶対やめて！　お願いしますから――っっ！」

じたばた暴れながら、必死に言いつのるナルレイシアの様子に、なにを感じ取ったのか、スカルトードはしばしの沈黙の後、「ええっっと……では、ヴィル・ダカール？」と問いかけてき、彼女はこくこくとうなずいたのだ。

それでも、胸の動悸は収まらず、ナルレイシアは適当な理由をつけて、いったん彼の側から離れることを選んだ。

（し、知らなかった……）

踊る赤馬亭の二階の廊下まで避難したところで、彼女は口元を両手で覆い、思わずその場にしゃがみ込んでしまった。

胸はまだ、どきどきしていた。

あの声で、名前を呼ばれるだけで、勝手に胸が暴走するのだ。発作に近いかもしれない。

（ランディータさんが、スカルトードさんが色恋絡みでいろんな恨み買ってる可能性が高いって言ってたの、ここに至ってすっごく納得かもー。あの外見だけでも、女性の心を奪うには充分なはずなのに、あんな魂ごと痺れさせるような声まで持ってるだなんてー!?　しーかーもー、話術、めちゃくちゃ上手そうだし）

そんなつもり一切なしに、女性の心を奪ってしまった――ということは、大いにあり得ることだとナルレイシアは考えた。

そうして、だ。

その女性に心を寄せる男性がいたとしたら……その男性にとって、スカルトードは間違いなく手強い恋敵ということになる。

（く、口説く気皆無なのに、勝手に妬まれたり恨まれたりするだなんて……お気の毒だわ。きっと、以前にもそういうことがあって、だから振る舞いとかに気をつけるようになられたのね……）

少なくとも、記憶をなくす以前のスカルトードには、こんなにどきどきさせられた覚えはないのだから、そうとしか考えられない。

あるいは、貴重な同志と気まずい関係に陥らぬよう、ナルレイシアに対してだけ、気をつけていたのかもしれないが……そこらへんのことは、彼女にはわからない。

ただひとつだけ、はっきりしているのは――。

（早く記憶を取り戻していただかなくては――）

ということだった。

魅惑の笑顔と美声は、とんでもなく心臓に悪いのだ……。

5

驚いたことに、スカルトードの美声は、つきあいの長いランディータにまで影響を与えた。
「そのこっ恥ずかしい呼び方はやめとくれ。ランディでいいから……」
食事を運んできた彼女は、「琥珀の……」と言いかけるスカルトードの言葉を遮って、そう言ったのだが、うなずいた彼が「ランディ」と口にしたとたん、真っ赤になった。
「やめ！　それなし！　女将と呼ぶこと！」
がしゃん、と乱暴に食事の載った盆を、寝台脇の小テーブルに置くと、ランディータはナルレイシアの腕を引っ摑み、大股に部屋を出た。
そうして、廊下に出てから、彼女は呆然とつぶやいたのだ。
「……あれは、誰だい？」
「やっぱり、ランディータさんもそう思いましたよね？　名前呼ばれるだけでどきどきするなんて、わたし、自分がおかしくなったかと思っちゃいましたけど、違いますよね？」
記憶のないスカルトードは、まるで別人だという意味で、ナルレイシアは聞いかけたのだ

が、褐色の肌の美女は、深刻な顔でかぶりをふった。
「違う……どう考えても、あれは別人だ。あいつに、あんな力はない…」
「力……ですか？」
確かにもの凄く魅惑的な声だけれど、と首をかしげたナルレイシアに、ランディータは呆れたような、感心したような微妙な目を向けて言った。
「そうか……すっかり、忘れてたけど、あんたは選定者なんだよね」
選定者とは、創世七虹神によって選ばれた、次なる柱神を見極める役目を担った者の呼称である。
確かにナルレイシアは選定者ではあるが、話がどう繋がっているのか、皆目理解できなかった。
「あの、ランディータさん？」
わけがわからず、問いかけた彼女の目の前で、ランディータは乱暴に自らの髪をかき乱した。
「まったく、こんなことになるんなら、見つけたとき、すぐにスカーの屋敷に送り届けてればよかった！　顔だけでもはた迷惑なのに、あんな物騒な声まで持ってる身内がいるだなんて、あいつ、一っっ言も言ってなかったくせに！」
ナルレイシアを置き去りにして、「悔しい、面倒くさい、厄介だ」を連発しはじめたランデ



ィータの言葉に、彼女はまさか、と目を瞠った。
「……あのー？　ランディータさん？　まさかと思いますけど、あのひとがスカーさんじゃないだなんて考えてらっしゃるわけじゃ、ありませんよね？」
「ほかに、どんな風に聞こえるんだい？」
逆に問い返されて、ナルレイシアは「だって、あり得ません！」と叫んでいた。
「あんな顔がふたつもあるだなんて！」
スカルトードの美貌は、そこいらに転がっているような代物ではないのだ。
ひととは思えぬほどの……というか、到底ひとが持ち得るはずがない、美の極致としか呼びようのないものなのだ。
緑がかった艶やかな金髪も、煙るような灰緑色の双眸も、瑕瑾ひとつ見いだせない完璧すぎる造作も……あんなひとが、この世にもうひとりいるだなんて、到底信じられないことだった。
「あたしだって、そう思ってたけど……でも、あんな、声に宿る力は、スカーにはなかった」
はっきりと断言されても、ナルレイシアには得心がいかない。
（声に宿る力って言われても……）
確かにもの凄く魅惑的な声で、呼ばれただけでどきどきしたけれど――。
それだけで、別人と断定はできないのではないか――そう問いかけたナルレイシアに、褐色

の美女はほろ苦く笑った。

「だから、あんたは神々に守られた選定者だって言ってるんだよ。あたしは、あの男に愛称とは言え、名を呼ばれた瞬間、魂ごと支配下に置かれそうな、圧倒的な力と恐怖を覚えたよ。愛称だったのと、あいつに邪な意図がなかったから、なんとか正気ではいられたけどね。完全な名を呼ばれたら、どうなるか……考えたくもない。スカーが柱神の縁者だってことは知ってたけど、それがこんな恐ろしい身内を抱えてることに繋がるだなんて……思ったこともなかったよ」

そう言えば、とナルレイシアは以前、ファティ・リンシャが話してくれた、古の物語を思い出した。

柱神の娘として生まれた少女は、幼いころから精霊たちと親しみ、その力を借りて空を駆けることさえできたという話を……。

もうひとり知っている柱神の縁者は、不思議な力を持っているわけではなさそうだが——少なくとも目にしたことはない——とんでもなく長生きしていることは知っている。

つまり、柱神の縁者は、全員ではないとはいえ、不思議の力を持ち合わせている可能性が高いということか。

「……確かに、他人の空似とだけは、絶対思えませんけど……」

でも、とナルレイシアは思った。

（もしかしたら、スカーさんが生まれつき持っていたその力が、ただ封印されていただけなんだとしたら……？　記憶を失ったせいで、その封印が解かれたのだとしたら……？）

だとしたら、ランディータの推理は乱暴すぎる。

そんな彼女の思いを、踊る赤馬亭の女主は見て取ったのだろう。

「まあ、そういう可能性も否定はできないだろうけどね」

譲歩するように、そう言った後、彼女は再び綺麗な金髪を――今度は両手でかき乱して、

「ああ、もう、どっちにしてもっ！」と叫んだ。

「なんで、外は嵐なんだい!?　人死にの心配のない程度の雨だったら、構わずあの厄介者のこと、スカーの屋敷に送りつけてやれたのに！」

やっぱり――。

（ランディータさん、ちょっとひどい……）

と、ナルレイシアは思った。

本の虫同盟の盟友であるスカルトードへの友情は、彼女のなかで揺るぎなきものだったのだ――少なくとも、この時点では。

踊る赤馬亭の、通りを隔てた斜め前に建つ『生ける花たちの館』の一室で、男はするりと離れていく温もりに気づいた。

目をやれば、女は薄手の靴下を足に通し、寝台の側の椅子の背もたれにかけていた服に手を伸ばしていた。

「行くのか？」

名残惜しさを覚えながら、そう問いかけた男に、女は「ええ」とうなずいた。

「こんな嵐じゃ、客など来るまいに」

皮肉げに告げた男に、女は「そうでしょうね」とうなずいた。

けれど、彼女は衣服を身につけていくのをやめなかった。

「なら……なあ？」

男が手を伸ばしてくるのを、女はぴしゃりとはねつけた。

「線香は燃え尽きているわ。わたしのお仕事は終わっているの。それでもわたしと一緒にいたいのなら、あなたはわたしのために線香を買ってくれなくちゃ」

線香を買うとは、一種の隠語である。

実際には、その一本が燃え尽きるまでの時間を女性ごと自由にする権利を得ることを示す。

花街の常識だった。

「……もったいぶりやがって」

毒づく男に、女は動じない。

「おかげで、今夜はゆっくり眠れそうよ。たまには、こんなことがあってもいいと思うわ……人間は、夜眠って朝起きるものだということを思い出すためにもね」

そう言い、女は立ち上がり、部屋を出て行きかけ、ふと思い出したようにこう告げた。

「あんたを慕ってるあの子供……あんたがどう思ってるかは知らないけど、大事にしてやった方がいいと思うわよ？　あんなに邪険にされても慕ってくれるだなんて、きっと他にいやしないんだから」

「訳知り顔で口を挟むんじゃねえよ！」

怒鳴りつけた男に、女は気を悪くした様子も見せず「あら、そう？」と言うと、そのまま部屋を出て行った。

取り残された体の男が、憎々しげに毒づく。

「どいつもこいつも馬鹿にしやがって……」

爛々と、憎悪に瞳を燃やしながら、男は寝台の上に起きあがった。

女に提案したことが、受け入れられることはまずないと、わかった上でやったことだというのに、断られた事実が、胸にざっくりと傷を走らせていた。

しかも、女が最後に告げた言葉が耳に残っている。

（大事にしろ、だぁ……？）

もちろん、大事にしてるとも——と男は思った。自分を慕って何でも言うことを聞く、役に立つ便利な子供なのだ。大事にしないはずがないではないか。

（なんにしても、今夜で終わりだ）

外は、嵐——。

邪魔な命を摘み取るには、絶好の夜だった——。

6

嵐のなか、看板を下ろした『踊る赤馬亭』の扉を、どんどんと叩く音に最初に気づいたのは、店の女主人であるランディータだった。

時計は夜半にさしかかっている。

いつもであれば、一階の居酒屋は、仕事を終えた男たちでにぎわっている頃なのだが、なにしろこの嵐だ——浸水に備え、椅子もテーブルも二階に避難させた店の扉には、本日休業の札が下げられていた。

灯りも落としているから、間違っても店が開いていると思っての訪いでないことははっきりしていた。

「どこの馬鹿者だい、こんな嵐のなか、夜更けまで出歩いてるだなんて……」

ぶつくさ文句を垂れながら、それでもランディータは店の扉を——小さく——開いた。

足をねじ込むこともできないほど、小さく開いた扉の向こうに、立ちつくしているのが濡れ鼠になった十前後の少年であることに気づいた彼女は、眉宇をひそめた。

「ここは、子供の来るような店じゃないよ。さっさとお家へお帰り」
そう言って、扉を閉めようとしたところ、少年は必死の形相で、扉に手をかけた。
「助けて……助けてください！　雷が……雷がぁぁっ！」
雨に打たれたせいばかりとも思えない、真っ青な顔で少年が頼みこんできた。
「こんな街中じゃ、歩いてる人間には雷は落ちないよ。さっさと帰りな」
告げた彼女に、少年はぶるぶると頭を振った。
「か、帰れない……。兄ちゃんが、出てけって……」
よくよく見れば、少年の顔には殴られたような跡があった。
ランディータはふう、と息をつく。
（こんな嵐のなか、放り出すとはどんなろくでなしだい）
この界隈はあまり治安がよろしくない――子供だからといって、無条件に信じていいはずもなかったが、さすがにこんな様子の少年を、追い出すことはできなかった。
夏とはいえ、外は土砂降りの雨だ。ひと晩中打たれたら、小さな子供は風邪どころか肺炎を起こすに違いないのだ。
それに……ランディータは、目の前の少年に対して、引っかかるなにかを覚えていた。だから、こう告げたのだ。
「……仕方ないね、入っといで。雨やどりぐらいはさせてやるよ」

折良く、というべきか悪くというべきか、そのときナルレイシアが、階段を下りてきた。

「ランディータさん、スカーさんが喉が渇いたとおっしゃって……水瓶、どこに運んだんですっけ……って、その子、どうしたんですか!?」

雨の勢いは変わらないものの、雷が遠くなったことで、冷静さを取り戻したらしい少女に、ランディータは肩をすくめて説明した。

「喧嘩したんだか、悪さしたんだか知らないが、ろくでなしの兄貴に家を追い出されたらしい。悪いけど、タオルと寝間着を持ってきて、空いてる部屋で着替えさせてくれるかい？　その間に、納戸の奥から薪ストーブ、引っ張り出して、お湯沸かすからさ」

つきあいが長い分、ランディータはスカーのことをよく知っていた。

貴族階級でこそないものの、裕福な環境で育った彼は、喉が渇いたからといって、決して生水を口にしたりはしないのだ。上質の葡萄酒か茶、最低限でも白湯を望み、聞き入れられない場合は決して口にしない頑固さを示す。

本人でなくとも――実のところ、彼女はそう確信していたのだが――その近しい親族なら、似たようなこだわりを示すに違いないと、ランディータは冷静に判断していた。

更に言うなら、屋根しか貸さないと告げたものの、家を追い出された少年のために、温かい飲み物なりスープが必要なことは明らかであり、そのためにも納戸の奥から薪ストーブを引っ張り出す必要はありそうだった。

（ただ、なーんとなくだけど、厄介事をたぐり寄せてるような気がするんだよねえ）

ランディータは、致し方ない仕儀でトラブルに巻き込まれることは少なくなかったが、自ら望んでそこに身を投じたことは……必要性を感じない限り、やったことはなかった。

今回は、その数少ない必要性を感じたからこそ、あえてトラブルの到来を容認したわけだが……。

その決断がはたして吉と出るか凶と出るかは、今の時点ではわからない。

けれど、恐らく、その流れに乗ることで、決着を早めることはできるだろう——と、彼女は判断したのである。

（なんてこと！）

ランディータから言われるまま、少年を部屋に——空いている部屋ではなく、彼女は自分が寝泊まりしているそこに連れて行ったわけだが——入れ、濡れた衣服を着替えさせながら、目にするつもりもなく目にしてしまった事実に、ナルレイシアは憤慨した。

少年の体には、殴られたあととおぼしきものが、数カ所に印されていたのだ。

（ひどい……！）

そう思いながら、彼女は少年に問いかけた。
「このあとは、全部お兄さんが？　お父さんとかお母さんは、そのことになにも言わないの？」
すると少年は、あっけらかんと答えたのだ。
「父ちゃんも母ちゃんも、もういないもの。兄ちゃんだけだ、一緒にいてくれるのは」
だから、こんな暴力にも耐えているというのだろうか――そう思うと、ナルレイシアは目頭が熱くなった。
「でも、こんなに跡が残るように殴られて……痛かったでしょうに」
かすれた声でそう言うと、少年は「そんなこと」と言って、胸を張った。
「なんでもないさ。だって、兄ちゃんは、父ちゃんや母ちゃんみたく、ジェティをオレから取り上げて、誰かに売ろうだなんてしないもの」
「ジェティ？」
「うん、これ」
そう言って、少年は、首から提げている布袋から、艶やかな漆黒の磁器製の豹を取りだした。
片手ですっぽり包みこめるほどの大きさにも拘わらず、その造形は見事で、いまにも動き出しそうな躍動感に溢れていた。

「なんて、綺麗……」

つぶやくと、少年は嬉しそうに「そうだろ？」と笑った。

「うん、本当に」

と、答えながら、ナルレイシアは磁器製の豹の両目の部分に嵌めこまれた、小粒の色石に気づいた。

豹の瞳として相応しいとは言いかねる——曇りのない、深い紫色をたたえた透明な石——。

（まさか、これって紫水晶……？　しかも、この色、透明さ……いくら小粒でも、これだけの品質だったら、結構値が張るんじゃないかしら？　もしそうなら、この造形といい黒釉のつやといい、均等で斑のないかかり具合といい……）

名のある職人が手がけた作品である可能性が高い。

そうした品は、貴族や裕福な階級の人間が注文して作らせることが圧倒的に多い——ならば、この少年はいかにしてこの磁器製の黒豹を手に入れたというのか……。

失敗作として、破棄されていたものを拾ったという線は考えられない。己が技に誇りを持つ職人は、失敗作は間違いなく処分するものだと、手広く品々を扱うダカール商会社主の娘であるナルレイシアは、父から話として聞いていたのだから。

「あ、この目に嵌めこまれた石、とても綺麗ね」

もう少し、少年と親しくなってから、詳しい話を聞き出そうと思って口にした褒め言葉は、

しかし逆効果にしかならなかった。

「返して！」

叫ぶと同時に、少年はナルレイシアの手から、『ジェティ』を奪い返した。

「あ、ごめんなさい」

慌てて謝ったけれど、少年はしっかりと『ジェティ』を握りしめたまま、強ばらせた表情を解くことはなかった。

（ああぁぁ、失敗しちゃったわ……）

悄然と、ナルレイシアは小さく息をついた。

少年の両親が、金になると踏んだ最初の材料が、黒豹の両目に嵌めこまれた紫水晶だったろうことぐらい、わかって然るべきだったというのに……。

（自己嫌悪、だわ）

胸に痛みを覚えながら、彼女は少年のそばから離れた。

ランディータに交代してもらうために――。

その判断は正しかったと見え、ランディータのいささか乱暴な対応にも拘わらず、少年はおとなしく与えられた部屋の寝台に潜りこんだ。

そのことで、ナルレイシアはますます自己嫌悪を覚えた。

自室に戻った彼女は内省した。

「駄目駄目だわ、わたし！　あの子が宝物に思ってるもの、取り上げようとした人たちと同じような態度を取っちゃうだなんて……あれじゃ、あの子のこと、盗人扱いしたも同然ですもの。ただでさえ警戒心抱いてるあの子の事情を鑑みても、ランディータさんにお願いすべきだったかもしれないわ……」

少なくとも、自分では役者不足だ。

（明日、ランディータさんに相談しよう……あれが単なる失敗作なら、なんの問題にもならないけど、万一盗難届けの出されてる品だったら、単に拾っただけでも、届け出なかったってことで、あの子に厄介事が降りかかること、確実みたいだし）

とは言え、事態が簡単に片付くかどうかは疑問だった。

外の嵐は、一向におさまる気配を見せない——もう、三日になるというのにだ。

床上浸水の被害も出始めているに違いない。夏ということで、食料の貯め置きの量は、どこの家でもそう多くはないはずだ……最悪の場合、餓死者が出ることも考えられる。柱神さまがおわすこのロスタロイドにおいて！

（いったい……なにが起こってるというの……!?）

不安を覚えながら、ナルレイシアは大きく身震いした。

脳裏にちらりとよぎった考えは、決してあってほしくないものだったのだ……。

7

ひときわ大きな雷鳴が轟いた。

「ひいっ！」

叫びながら、ナルレイシアは飛び起きた。

（近づいてる……近づいてくるぅうっっ！）

かつて、雷のせいで『も』、あやうく死にかけた経験のある彼女にとって、近づく雷鳴ほど恐ろしいものはなかった。

（や、やっぱり、まだそれほど酷くないうちに、お屋敷に戻るべきだったかしら!?　でも、スカーさんのことは心配だったし……なにより、遠いからって落ちてこないとは限らなかったし……うわーん、そうだわ！　そもそもお屋敷の保存食は、全部食べ尽くしてしまったんだから、戻ったところで食べ物なかったんじゃない！）

雷鳴に怯えながらも、食事の心配だけはせずにすむ今の状況と、雷の危険からは解放されるものの、空腹に苦しみつつ、水だけで送る日々――どちらがましか、考えるまでもない。

「そ、そうよ。何事も前向きに考えなくっちゃ。これはきっと、いつまでも雷に怯えていてはいけないという、神様の思し召しなんだわ。気をしっかり持って、ここを耐えきれば、きっと雷も平気に……」

必死に自分に言い聞かせようとしたのだが、またしても耳に飛び込んできた雷鳴に、彼女は「ひっ！」と叫んだ。

（無理ー！　慣れるだなんて、絶対、絶対無理！）

半ば泣きながら、そう思ったナルレイシアは、しかしそのすぐ後に聞こえてきた、妙な音に気がついた。

バタン、ガシャン、と何か硬い物同士がぶつかりあうような音と、ガラスの砕けるそれ。

（まさか……）

と、彼女は思った。

暴風で飛ばされてきたなにかが、雨戸ごと窓を破ったのではないかと思ったのだ。

屋根を葺く瓦でも飛んできたのなら、考えられないことではない。

（大変じゃない！）

こんな勢いの雨が窓から吹きこんだら、その部屋はまず間違いなく、家具もろとも台無しになってしまう。

いや、それがまだ、無人の部屋なら被害は家具だけですむだろうけれど、もしひとが使って

いる部屋だったら……!?

見に行かなければ、とナルレイシアは即座に決断した。

雷は怖いけれど……本当に、心底、怖いけれど。

そろそろと立ち上がり、備え置きのガウンを羽織ると、彼女は決死の覚悟で枕元に置いてあった角灯を手に部屋を出た。

(くわばら、くわばら、くわばら、くわばら)

雷避けの呪いを、何度も何度も繰り返しながら、角灯の灯りを頼りに、廊下に出たナルレイシアは、ここで、奇妙なことに気がついた。

(……誰も、起きて来ない……?)

重度の雷恐怖症である自分ほどに、ランディータたちが敏感に反応しないという線は、もちろん考えられることだったけれど、けれど、あのガラスの砕ける音にさえ、気づかなかったということがあるだろうか……?

それに加えてもうひとつ、彼女には気づいたことがあった。

(この、香り……!?)

甘く、頭の芯をじん、と痺れさせるような独特な香りが、周囲に充満していた。

雷に対する、極度の恐怖感がなければ、ナルレイシアとて目覚めるはずがないほどに、強い催眠効果を示す香の持つ独特の……。



「まさか……冥眠香……」

つぶやいたナルレイシアは、得心がいったと思った。

こんなものが焚かれていたら、ただでさえ眠りのなかにある人間が、覚醒できるはずがないのだ。

かつて、拉致された挙げ句、この香のせいで、身動きが取れなくなった苦い経験を持つ彼女は、そうと悟ると、真っ直ぐにスカルトードの部屋に向かった。

どうやって、相手が冥眠香を『踊る赤馬亭』全体に行き渡らせたのかはわからないが、そこまでしても狙われる可能性のある存在は、彼しかいなかった。

血まみれで倒れていたスカルトード――肩に獣に食いちぎられたような傷を負っていた彼。巷で評判になっているという、正体不明の獣を使った連続強盗殺人事件――。

彼は唯一の、その事件の生存者であり、目撃者なのだ！

記憶を失っていることなど、相手にとっては関係ない。いや、いつか記憶を取り戻し、警邏隊に己が目にした事実を証言される前に、なんとしても口を封じようと思ったとしてもおかしくない。

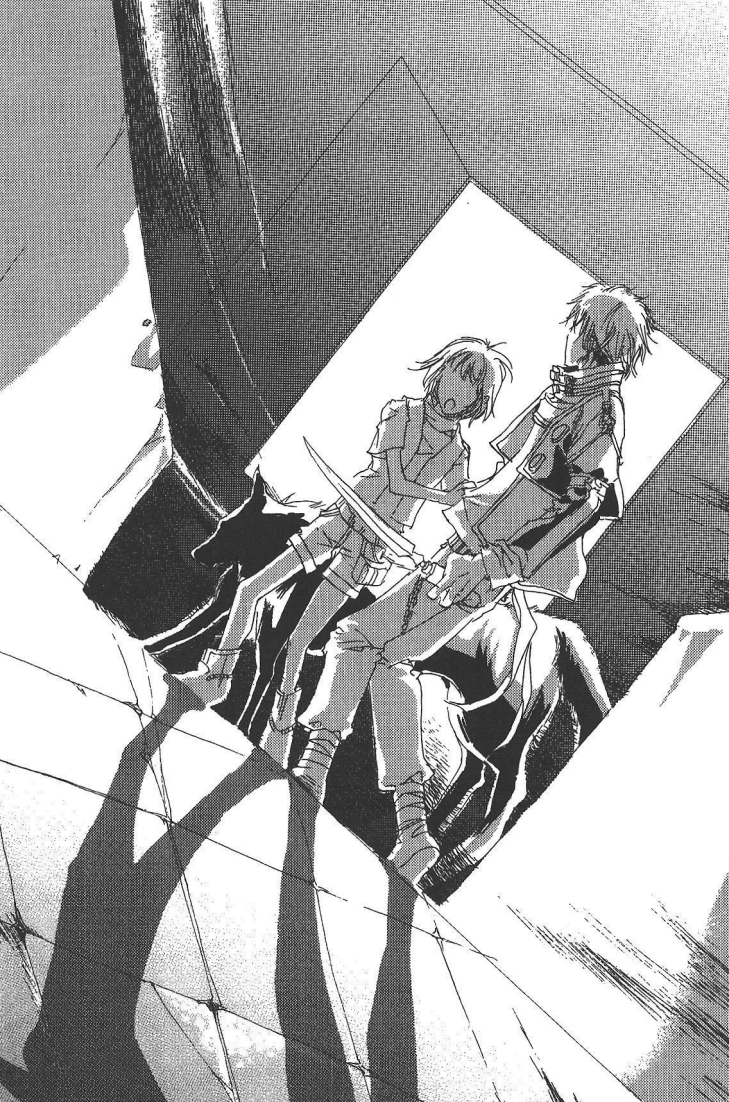
（スカーさん！）

店の女主人であるランディータによれば、スカルトードではないということだけれど、そんなことは関係なかった。

慎重に、しかしなるべく音をたてないように歩く上で邪魔になる靴を脱ぎ、彼女は彼の眠る部屋を目指した――。

足音を忍ばせる意味は、あまりなかったかもしれない。
スカルトードのために用意された部屋からは、雷鳴と打ち付ける雨の音が聞こえてきたのだから――しかも、部屋の扉は開けっ放しになっている。
その音の激しさこそが、窓が破壊された部屋がそこである何よりの証だった。
「スカーさん！」
叫びながら、部屋に飛び込んだナルレイシアは、自分の不安が的中したことを知った。
「な……」
内側から開かれた窓のそばに、あの少年が驚いた顔をして立っていた。
そして、スカルトードが眠る寝台の上に、見覚えのない若い男が――見るからに切れ味のよさそうな、大振りのナイフを手にのしかかっていたのだ！
「なにしてるんですか！」
大喝したものの、十七歳の少女である彼女の声と姿には、いかんせん、相手の危機感を煽る

迫力に欠けていた。
男は不快げに舌打ちしたものの、慌てた様子も見せず、ゆっくりと寝台から離れた。
余裕たっぷりの態度で、一歩、また一歩とナルレイシアに近づいてくる。
その瞳に浮かぶのは、明確にして揺るぎない殺意――他者の命を奪うことに、なんら躊躇うことのない光だった。
(殺される……!)
確信したが、ナルレイシアはその場を動けなかった。
恐ろしさゆえではない。自分が逃げ出したら、追いかけてくる前に、男が眠ったままのスカルトードの命を奪うことがわかっていたからだ。
だからと言って、黙って殺されるわけにもいかない――ファティ・リンシャの屋敷の蔵書は、まだまだ読み尽くしていないのだ!
「来ないで……来ないでよ!」
声が、震えた。
そのことで、自らの優位をより確信したのか、男は残酷な笑みを口元にたたえた。
そして、窓辺で立ちつくしている少年に、ぞんざいな口調で命じた。
「おい、この役立たず。一度だけ、見逃してやるから、どっちか選びな」
嬲るような、残酷な声音に、少年は怯えた顔で問い返した。



「どっち、って……？」

「だから、そっちの優男か、この小娘かってことだよ。お前が飼ってる化け物を使って、どっちかを殺せって言ってるんだ」

その言葉に、少年は蒼白になった。

「で、出来ないよ！　ジェティは元々人に怪我させるのだって嫌がってるんだもの！　なのに、殺すだなんて……そんなこと……」

思いがけない言葉に、ナルレイシアは目を瞠った。

（ジェティ……って、この子が大切にしてた、あの磁器製の黒豹……？　でも、化け物って……？　ひとに怪我をさせる……？　あんな、片手で包みこめる小物と、どこがどう話が繋がってるというの……？）

わけがわからなかった。

しかし、この、少年の訴えに、男は癇癪を起こしたように怒鳴りつけた。

「馬鹿野郎！　こんな羽目になったのも、てめえの不手際のせいだろうがよ！　いつまでも化け物の我が儘聞いてやってるんじゃねえ！　そもそもてめえが、もっとしっかりあの化け物の手綱を握って、言うことを聞かせてたら、あの女に気取られることもなけりゃ、口を封じる必要もなかったんだ！　全部、てめえのせいなんだ！　いつまでも良い子ぶってんじゃねえよ！」

「兄ちゃん！　でも、ほんとに、ほんとにジェティは……！」
必死に言いつのる少年に、男は唾棄するように言い放った。
「うるせえってんだ！　てめえが、あの化け物のこと、躾けるつもりがないんなら、おれによこせ！　そうとも、おれの方が、てめえなんかよりずっと上手にあの化け物を扱ってやれるんだ！　寄こせ！」
男が、高圧的な声を張り上げた、まさにその瞬間のことだった。
その場の空気が、凍り付いたのは――。

8

少年――フェスティン――には、楽しい家族の思い出などなかった。

若いころは真面目で働き者だったという父は、彼が物心ついたころには、職を失って久しく、その鬱憤を家族への暴力で晴らすようになっていた。酒場の下働きをして、家計を支えていた母は、いつも疲れた顔をしていて、夫である男の、子供に対する折檻を止めようともしないばかりか、ときに一緒になって子供を撲った。

兄だけは、フェスティンを撲ったりはしなかったけれど、庇ってくれたわけでもなかった。そして、ある日突然家を出て行ってしまった。

近所のひとたちは、痣の消えない彼を心配してはくれたけれど、だからといって、彼の面倒をみられるほどの余裕もなかった。

けれど、下町にあっては、そうしたことは珍しいことではなかった。

フェスティンは、だから、大きくなったら、兄のように家を出るのだと心に決め、毎日を堪え忍んで過ごした。父の気に障らないよう、なるべくおとなしくし、母をより不機嫌にさせな

いように、家の中の雑事を受け持った。

七つになったころからは、家から少し離れたところにある食堂で、水くみやゴミ捨てといった雑用をして、小銭を稼ぐことを覚えた。最初は家の近所の店でやっていたのだが、すぐに父にばれてしまい、貰った小銭を取り上げられた上に、「当てつけがましい」と殴られたからだ。

いつか独り立ちするときのために、と内緒で貯めていたお金は、けれど結局父に見つけられてまた取り上げられてしまった。そして、「家に入れようとも思わないのか、この親不孝者」と罵られた。

そのころには、父だけでなく母も、酒を飲むようになっていたから……本当は、稼ぎの半分ぐらいは、食費として使っていたのだけれど、ふたりとも、聞く耳を持たなかった。

したたかに殴られ、このままでは殺されると思い、逃げ出した先で――土に埋もれかけていた、ジェティ――そのときは、綺麗な黒い石だと思ったのだけれど――を見つけた。

近くの水場で洗って、綺麗に泥を落としたら、それは黒猫を象った小振りの置物だった。

（なんて綺麗なんだろう……）

思いながら、フェスティンは思わずそれを握りしめた。

犬も猫も大好きな彼だったが、もちろん家には飼えるほどの余裕はない。わかっていたから、一度だって「飼いたい」と口に出したこともなかった。

けれど――。

（これなら、ご飯食べないし、うるさく鳴いたりもしないし……）

なにより、これほどに小さかったら、父や母に見つからないように、持っていられるに違いない、とフェスティンは思った。

本当に生きている猫ではないけれど——。

「……こんなに綺麗なんだから、名前も綺麗じゃなくっちゃね……」

なんてつけてあげよう——そう思ったフェスティンは、昔近所に住んでいた自称詩人のお兄さんがことある毎に口にしていた言葉を思い出した。

『ファティアナ・ジェスティカーナ……神々にも愛された詩聖アランドールが、夢で虹神のひとり、冬を司る紫神である女神さまに見えたとき、かの方をお呼びするのに用いた言葉だと言われているよ。至高にして優美なる御方といった風な意味だと言われてるね。古代言語は失われて久しいから、正確なところはわからないけど』

苦笑しながら、傷薬を塗ってくれるお兄さんのことが、フェスティンは好きだった。

近所に住んでいたのは一年ほどで、ある日突然いなくなった彼のことを、近所のひとたちが「家出息子」、「連れ戻されて……」と噂しているのを聞いたときには、死んでいないのなら最悪の事態じゃない、と少しだけほっとした程度には。

「ええっと……なんだっけ？　ファチ……？　違うな……ジェスカ……違う、んーと……ジェティカーナ、でもないし……面倒だから、ジェティでいいや！」

舌を噛みそうになる長ったらしい名前より、こっちのほうが呼びやすいし、親しみやすかった。

「お前のこと、これからジェティって呼ぶから！　よく知らないけど、紫の女神さまのことなんだって！　おれが勝手に短くしちゃったけど。お前は黒猫だけど、表面つやつやしてて、光の加減によっては、青とか紫に見えないこともないからいいよな!?」

名前をつける――そのことで、その磁器の黒猫が、自分のものになって、より身近に感じられるようになった気がした。

そうして、小さな掌に包みこまれた焼きものの黒猫は、そのとき一瞬だけだけれど、熱を帯びたように感じられた。

まるで「いいよ」と答えるかのように。

その日以来、ジェティはフェスティンの大切な友人であり、なににもかえられない宝物になったのだ。

「兄ちゃん……も?」

濡れ鼠になり、この宿の扉を叩いて保護されたはずの少年の、感情といったものが一切欠如

した声を耳にした瞬間、ナルレイシアは自分がいま、まさに殺されそうになっていることも忘れて、そちらに目を向けてしまった。

ぶつかったのは、虚ろな……少年の瞳。

信じていたすべてに裏切られたかのような、絶望を通り越し、なにもかもを放棄したかのような……。

「兄ちゃんも、同じこと言うの？　父ちゃんや母ちゃんみたいに……ジェティのこと、渡せって？」

眼差しに宿る虚無は、少年の声にも浸透していた。

ナルレイシアは、胸が締め付けられるのを感じた。恐怖……そう、それは恐怖故には違いなかったが、最も危険なのは、目前の男でも、その手に握られている大振りのナイフでもないことがわかっていた。

危険なのは、少年の崩れかけている精神の均衡だった。

崩れてしまったとき、なにが起こるのかはわからないものの、それは絶対に避けるべき事態だと、本能が警鐘を鳴らしていた。

だのに、だ。

少年に問いかけられた、実の肉親らしい男は、なんら気づく様子もなく、酷い言葉を口にした。

「ああ、そうだよ！　お前なんかにあの化け物は勿体ねえ！　親父やお袋みたいに、売りに出そうだなんておれは考えやしないがな！　あれがなんだってかまやしないんだ。お前を守るためにあいつが親父やお袋に牙を剝くのを見た瞬間、おれは閃いたんだ……こいつを利用すれば、一切の証拠を残さず、人を襲って金目のものを手に入れられるってな！」

「……だから、父ちゃんと母ちゃんが逃げ出したあと、おれのこと、引き取ってくれたの……？」

「当然じゃねえか。ほかになんのうま味があつて、お前みたいな足手まとい、引き取る気になると思ったんだ？　まったく……思い切り役に立って貰うつもりだったっていうのに、お前ときたら急所を狙えと命じることすらできない臆病者で、せっかくあの化け物に獲物を襲わせても、最後にはおれがとどめをささなきゃならねえ始末だし。でもな、知り合いの文士崩れから、いいこと聞いたんだよ。なんでも、化け物ってのは、名前を呼ばれたら従うんだって？　お前馬鹿だから、うるさいぐらいにあの化け物の名前、口にしてたもんな。おかげで名前はわかったし、あとは、お前がおれにあの化け物の所有権を渡すって言やあ、万事解決するってもんだ。さあ、いいな」

ぎゅうぎゅうに胸を締め付けられるような気がした。

周囲に満ちる殺意、そしてあと数歩で自分の命を奪える距離にある男――その利き手に握られた大振りのナイフ。

にも拘わらず、ナルレイシアには、虚ろな目をした少年が、一番恐ろしく……同時に痛ましい存在に思えてならなかった。

「譲る……？　大事な友達で宝物なんだから、取り上げられたくないのなんて当たり前のことだって、言ってくれた兄ちゃんが……？　おれに……ジェティのこと、渡せって言うの？」

少年の顔色は、いまや蒼白だった。

なのに、その唯一の肉親である男は気づかないのだ。

「さっきから、そう言ってるじゃねえか。まあ、化け物を最初に見つけたのはお前だし、あの化け物もずいぶんお前に懐いてるようだからな、面倒は見てやるよ。わからないのか、お前なんかが持ってるより、オレの方がずっと賢くあの化け物を使ってやれるって言ってるんだよ、このの ろまの馬鹿！」

苛立たしげに言いつのる男のあまりの言いように、ナルレイシアは「馬鹿なのはあんたの方じゃない！」と叫びそうになった。

平気で、ひとの心を壊す言葉を口にする男――少年の大事にしている存在を、『化け物』と呼びながら、同時に物のように利用することしか考えていない男。

刃を突きつけられてさえいなかったなら、その場で拳を二、三発見舞ってやりたいところだった。

が――。

彼女がなにかを口にするより先に、悄然と肩を落とした少年が、小さく答えたのだ。
「わかったよ」
そう言って、少年は懐からあの陶製の黒豹を取りだし、男に向かって放り投げた。
「ジェティを、渡す……」
男には、言葉に対する理解が欠けていた。
皮肉にも、そんな男に刃をつきつけられているナルレイシアには、その違いがいやというほどにわかってしまった。
譲ると渡すは違うのだ！
けれど、彼女が口を開くより先に、放り投げられたモノは、あざやかに艶やかに恐ろしく変化した。
空中に放り投げられた、ほんの一瞬のこと――。
なのにその一瞬で、なにもかもを支配してしまったのだ。
音も立てずに降り立った、しなやかな黒豹の姿に、恐れ、怯えるより先にナルレイシアは見とれてしまった。
それほどに、美しい姿だったのだ。
気高く美しい……そう、この上もなく！
なにかの手妻などではないことは、はっきりしていた。なぜなら、その黒豹の目は、紫水晶

の色と輝きをたたえていたのだから！

そして、その目を向けられたのは――。

「はは。こんなに簡単だったんなら、最初からこうしときゃ良かったな。おい、ジェティ！おれがお前の新しいご主人さまだ！　おれの言うことを聞け！　まずは、そこに寝てるやつのど笛を食いちぎるんだ！」

黒豹が自分の方を向いたその意味を、完全に誤解したらしい男が、傲慢な口調で命じると同時に、黒豹は男に向かって――つまり、ナイフを突きつけられて、身動きができないナルレイシアを含む――襲いかかってきたのだ！

豹の大きく開いた口からは、鋭い牙が覗いていた。前肢から伸びた、鋭い鉤状の爪は、なぜか、瞳と同じ紫だった。

（こ、殺されるっっっ！）

大きすぎる恐怖は、全身をがんじがらめにし、瞬くことさえ許さないのだと……彼女はそのとき初めて知った。

そして、その次の刹那のこと――。

耳をつんざく雷鳴が響き渡ると同時に、目を焼く雷光が、窓の外から飛びこんでき、部屋中を満たした。

「ぎゃあぁぁっっっっ！」

男の悲鳴が、谺（こだま）した――。

9

いったい――。

何が起こったというのか。

すべてを目にしていたにも拘わらず、ナルレイシアには把握出来なかった。

なぜなら、それはあり得るはずのないことだったのだから！

雷が、窓を通って落ちることなど！

（信じられない！　だって、あんな……）

スカルトードが眠っていた寝台が、炎に包まれていた――まるで、開いた窓から、雷が落ちてきたかのように！

それは、直接目にした現実ではあったのだけれど……でも。

（あり得ないでしょ、どう考えたって！）

あり得ないはずのことが、目の前で起こったことに、ナルレイシアの頭はついて行けていなかった。

悪運の化身、不幸中の幸いの権化と呼ばれる彼女にあっても、ここまで常識を無視した現象にお目にかかったことはなかったのだ！

（ど、どういうことなのーっ!?）

半ば恐慌状態に陥りつつも、それでもひとの心配をしてしまうのがナルレイシアだった。

「ス、スカーさん!?」

（それにあの子とあの黒豹……！）

自分にナイフをつきつけて、殺す気満々だった男にまで心配が回らなかったのは、当然のことと言えよう。

とは言え、なにがなんだかわからないものの、いつでも喉を切り裂く距離にあったナイフの存在がなくなったことで、どうしたのかと思わず背後を振り返った彼女は、白目を剝いて倒れている男の姿を認めた。

（やだ、まさか死んでるんじゃ……!?）

と思った彼女は、しかし男のナイフを握ったままの指先が、僅かにぴくぴく痙攣してるのを見るなり、あっさり意識を切り替えた。

（そうよ、まずはスカーさんとあの子のことを……！）

なんとか、助けなければ——そう、思ったときのことだった。

耳にした瞬間、虜になってしまいそうなほどに美しい声が聞こえてきたのは。

「およし、幼き地の子よ」

炎に包まれた寝台から、それは聞こえた。

反射的にそちらに目を向けたナルレイシアは、あまりにもあり得ない、非現実的な光景に言葉を失ってしまった。

燃え盛る寝台の上で、半身を起こし、スカルトードが炎ごしに、あの黒豹の頭を撫でていた——驚くべきことに、その肌はもちろんのこと、身につけている衣服に小さな焼け跡すら見いだせぬ有様で！

それは決して生身の人間にかなうことではなかった。

（ど、どーゆーことーっっ!?）

この光景を目にしたことで、半ば以上恐慌状態に陥ってしまったナルレイシアにとって、もはやなにもかもが意味不明理解不能な世界となりはてていた。

しかも——である。

「なんだよ、あんた！　ジェティに気易く触るな！」

怒りを孕んだ叫びを上げたのは、ナルレイシアがその安否を心配したあの少年で——けれど、なぜだか顔を真っ赤にして怒りまくっていた。

（ふたりとも、なんだか全然気にしてないようだけど、でも炎上中の寝台の上にいっぱなしってのは、どう考えたってまずいじゃない！）

ひとまず、人外大魔境な価値観を持つらしい相手の態度には頓着しないことを決めて、ナルレイシアは、炎に包まれた寝台の上に身を起こしたスカルトードに駆け寄るなり、その手を握り、引っ張った。

「いいから、そこから出てください！　見てるだけで熱いんです。火傷しそうなんです！　気持ちが落ち着かないんです！」

もしかしたら、触れただけで雷に打たれたような衝撃を受けるかも――という決死の覚悟を裏切って、炎にも雷撃にも傷つくことのないそのひとの指先は、普通の人間と同じ温もりを伝えてきた。

（もしかして、本当にこのひと、スカーさんじゃない!?）

たとえ、どんなに信じているランディータの言葉とは言っても、ナルレイシアは心の底からは、「あれは別人」発言を信じてはいなかったのだ。

なんとなれば、スカルトードの美貌は人並みを外れるどころか、神でさえ同じ造形を作り上げるのは難しい代物だと思ったからだった。

それならきっと、自分などより古いつきあいのランディータにも隠していた特殊技能があり、記憶を失ったせいで、それを露わにしたのではないか――と。

そう考える方が、よほどナルレイシアにとっては辻棲の合う考えだったのだ。

けれど、この尋常ならざる事態が、真実を告げた。

（この人は……違う……）

直感ゆえに悟った真実を、正直に瞳にたたえるナルレイシアの前で、そのひとは、いとも優雅に「わかったよ」と答え、炎の中から歩み出た。

神の眷属にしか許されぬ傲慢な優美さでもって――。

なぜ、わからなかったのだろう。

その人の放つ気配は、知り人であるスカルトードのそれとは違いすぎるほどに違うものだったのに。

ランディータはとうに見抜いていたというのに。

否が応でも自らの未熟さをつきつけられ、ナルレイシアは身の置き所もないほどの羞恥を覚えた。

「あ、なた、は……」

問いかけようと、震える声を紡いだ。

けれど、相手はその声に答えることなく、彼女の背後で倒れている男にのみ、視線を向けていた。

「なんと、嘆かわしき男だ……」

人外の美貌に、憂える表情をたたえ、青年は冷ややかに、断罪の言葉を紡ぐ。

「自らを慕う弟まで、道具扱いして利を得ようなどとは……」

そうして、彼は黒豹と少年を振り返った。

「幼き地の子と少年よ……この男をどうするが相応しいと思う？」

男に向けられたものとは違い、温もりを感じさせるその声に、しかしナルレイシアはぞくりとするものを感じた。

（……唆してる……？）

いや、スカルトードに似た青年には、そんなつもりはないのかもしれない——少年たちがなにを選んでも……たとえ、それが男の死であったとしても、青年はかまわないと思っているのかもしれない。

そこに、彼らを試す意図などなく、単に彼らの望みをかなえたいと思っているだけなのかも——。

それでも、彼の声はあまりにも美しすぎた——心のタガを吹き飛ばしてしまいかねないほどに！

ただひとりの兄に「もういらない」と言われた少年——そして、唯一心を許す異質な黒豹まで、奪い取られるところだった、彼。

渡すと言って手を放した瞬間の、彼の瞳に浮かんでいた危険な光を、ナルレイシアは見てしまった。そして、紫の瞳の黒豹が、殺意も露わに襲いかかってきたときのことも――覚えている。あれは……あの牙は、きっと自分に向けられたものではない。

裏切られた絶望と怒りと憎悪を、少年が向けた先――それは。

（いけない……！）

そんな状況の少年に、あんな声で問いかけてはいけない――自制のタガをたやすく吹き飛ばすような、あんな声で「どうしたい？」などと尋ねては。

そう思った瞬間、ナルレイシアはスカルトードにそっくりな青年に向かいあい、真っ直ぐにその目を見上げていた。

「駄目です！　なんてこと、なんて声で言ってらっしゃるんですか!?　幼い子供に罪を唆すようなこと、大人が口にしてはいけないでしょう!?」

彼女の剣幕に、人外魔境の美貌の青年は、少しだけ驚いたように目を瞠った。

それから、彼は穏やかな笑みをたたえ――諭すようにこう告げた。

「誰が、彼らに罪を犯させると言ったね？　わたしは、ただ、彼らにどうしたいかを尋ねただけだよ？　それとも君は、どんな犯罪者であろうと、その罪は法によってのみ裁かれるべきだと言うつもりかい？　だとしたら、君は世間にはびこる罪というものを知らなさすぎる……この男は、他人の財布を奪うためだけの目的で、多くの命を奪ってきた。さらにはそのことに気

づいた善良な隣人にまで手をかけた……卑怯にもそこの弟や地の子を利用して、だ。そしてついには……先ほどのやりとりだ。無理矢理に共犯者にさせられた、ある意味最大の被害者である彼らの望みに即した罰を――というのは、間違っているかね？」

淡々とした口調で、美しい声が男の罪を暴き立てる……私刑が許されないなどという言い分は、きれい事に過ぎないと。

耳に心地よすぎる声で告げられると、まるで自分のほうが間違っているかのような気にさせられる――人生経験が不足している自覚のある身では尚更のこと。

けれど、ナルレイシアはそこで、おとなしく言いくるめられたりはしなかった。

「あの子たちに判決を下させようとするのが、間違ってると言ってるんです！」

あなたは、あの子たちが後になって悔いることになるかもしれないことを考えてらっしゃらない！

「絶望や憎悪や怒りで心がいっぱいになっているときに、衝動的に下した判断が、後々あの子の心の傷にならないとは限らないじゃありませんか！　いまのこの時点で、そんなことをあの子たちに尋ねるべきではないと思います！」

憤然として答えたナルレイシアに、意外な方向から反論が寄せられたのは、その次の瞬間のことだった。

「……それの、なにが悪いんだ」

少年が、ジェティと呼んだ黒豹の首を抱え込むようにして、ナルレイシアを睨みつけていた。

「兄ちゃんは、おれのこと裏切ったんだ……お前はいい子だ、役に立つ大事な弟だって、何度も何度も褒めてくれたのに……本当は、おれなんかいらなくて、おれの大事なジェティだけが欲しくて……そうして、おれからジェティのこと、取り上げようとしたんだ！　そんな兄ちゃんのことが憎くて許せなくて、死んでしまえって思って、なにが悪いっていうんだよ!?」

「駄目に決まってるでしょうが！」

ナルレイシアは一喝した。

「頭に血が上ってる状態で、本当に望んでることを選び取れたかどうかなんてわかんないじゃないの！　ここは、ちゃんと頭を冷やして、でもって、冷静になって、それでもその男のことが許せないなら、その時改めて罰与えりゃいいのよ！　そのときは止めないから、好きにしなさいって言ってんの！」

何気に護法精神に欠けたナルレイシアの主張が意外過ぎたのか、少年もスカルトードそっくりの青年も、言葉を失い、目を瞠った。

開け放たれた部屋の扉のあたりから、ぱちぱちと拍手が聞こえたのは、その直後のことだった。

振り返ると、そこには未だ旅装を解かずにいる、スカルトードが、いた。

そして彼は、感心しきりな声で、こう答えたのだ。
「まさにその通りです。あんまり馬鹿な騒ぎ、起こさないでください、大伯父さま」
衝撃的過ぎるその台詞に、ナルレイシアは言葉を失った――。

10

世の中には、同じ顔が三つあるとはよく言われることだが、ふたつあることが信じられない奇跡の美貌というものが存在することを、ナルレイシアは初めて知った。

瓜二つという言葉でさえ追いつかない——まるで、ひとりの人間が、ふたつに分裂したようなそっくりそのままのふたりの青年を前に、彼女はなんとも言えない気分を味わっていた。

場所は『踊る赤馬亭』……窓から雷が飛び込んできてから、嵐がぴたりと止んだものだから、建物中の窓という窓は開かれている——もちろん、催眠効果のある冥眠香を散らすために、だ。

そして、香の効果が薄れたところで目を覚ましたランディータを交えて、彼らは無事だった一室に集まっていた。

少年と、黒豹と、スカルトードと、彼に『大伯父さま』と呼ばれた——全然そうは見えない——青年と、ナルレイシアとランディータと……縄で手足を縛り上げ、猿ぐつわを噛ませたあの男、の六人と一頭。

ここ一昼夜というもの、満足に食事も摂っていないというスカルトードのために、薫製肉と葡萄酒がテーブルの上には並べられていた。

「うわー、やっぱり別人だったんだ……でも、ピンで見るとありがたいぐらいの顔なのに、ふたつ並ぶとなんだか落ち着かないねえ……」

と、微妙な感想を口にしたのは、この宿の女主人だった。

それは、ナルレイシアも同感だったので、思わずこくりと頷いてしまった。

なんというか……別に、同じ顔がふたつ並んでいようが、三つ並んでいようが、普通、ちょっとは驚くにしても、それでもこんな居心地の悪い思いは味わわずにすむと思うのだ。親子でそっくりな人間など珍しくないし、それよりは珍しいけれど、双子や三つ子だって、いないわけではない——運や命を食い合うと信じられ、大抵生まれると同時に引き離されることが多いのだけれど。

ただ……このふたりに関してだけは、どうも、そういう普通の反応ができないのだ。

恐らく——と、ナルレイシアは思う。

（ここまで整った顔だと、なんだかふたつあるのが間違ってるみたいに思えちゃうんだわ、きっと……）

スカルトードを初めて見たとき、神様はきっとこんな姿をしているのに違いないと、彼女は思った。

まさに奇跡としか呼びようのない美貌だったのだ。

その、奇跡がふたつ……落ち着かないのは、「こんなものがふたつとあっていいはずがない」という思いがあるからだ。

（でも、実際に並んでるし……）

現実は現実として認めるしかないと、彼女が一所懸命、自分の心に言い聞かせていたところで、恐らく同じようなことを考えていただろう、宿の女主人が、人生経験の豊富さゆえか、なんとか立ち直ってスカルトードに問いかけた。

「……で？　この、あんたのそっくりさんは、何者なんだい？　双子のお兄さんか、弟…って線はあまり考えられなさそうだけど……どうも、あんたより強者っぽいし」

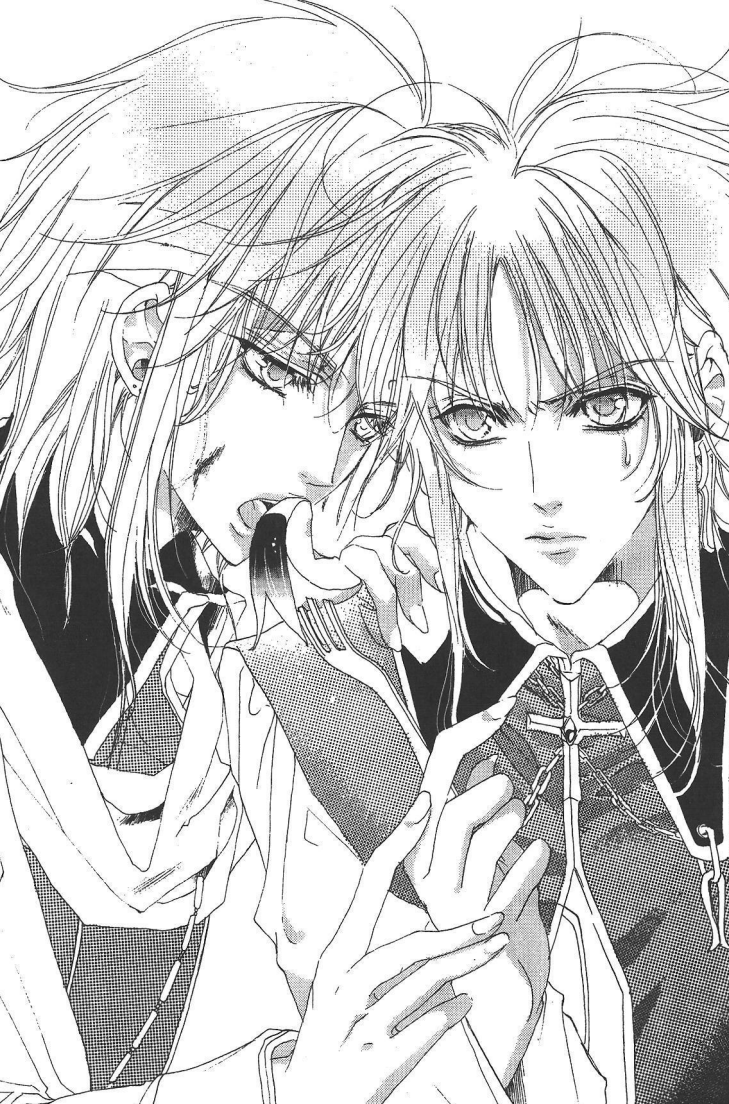
そう言えば、ランディータは冥眠香のせいで、スカルトードのあの言葉を聞いてはいなかったのだ。

（でも、大伯父さま……大伯父さま……って）

あの言葉が正しいのなら、自分が見つけて、ここに運び込んだ記憶喪失の青年は、スカルトードの祖父――父方か母方かはわからないけれど――の兄にあたるひとだということになる。

だとすれば……考えられることは……。

「も、もしかして……その方は、スカルトードさんの縁続きにあたるという、柱神さま、なんでしょうか……？」



まず間違いないとは思ったけれど、それでもどうか外れてほしいと願いながら、ナルレイシアは尋ねた。

（もしそうなら、わたし、柱神さまに食ってかかって意見しちゃったんだわーっっ！）

世界を支えるそのひとに――。

（恐ろしすぎる……っっっ！）

そんな彼女の思いを知ってか知らずか、スカルトードのそっくりさんは、にこやかに笑い、

「さすがは選定者だね」と答えた。

（ひーっっ！　いやぁぁっっ！　ただでさえ運悪いのに、神罰まで受けちゃったら、わたし絶対生き残れないーっっ！）

心臓破裂寸前の、彼女を救ってくれたのは、本の虫同盟の同志だった。

「なに、余裕ぶってらっしゃるんですか」

冷ややかに告げるなり、スカルトードは『大伯父』で『柱神』の瓜二つの青年の後頭部に拳を見舞った。

「あなたの放浪癖は存じ上げてます。だから皆、あなたの不在中も一族あげてフォローしてるんじゃありませんか。なのに、書き置きひとつ残さずに、ふらりと姿を消すなど……いつまでわたしを影武者に使うおつもりですか？」

過激な行為とは裏腹に、スカルトードの声は静かだった。

余計に怖い。
そう思ったのは、ナルレイシアだけではなかったらしく、お騒がせな柱神さまが首をすくめていた。
「あ、いや……今回は急ぐ必要があったものだから……」
そう言って、ちらりと彼が目を向けたのは、黒豹と少年だった。
（あ、そう言えば…あの黒豹に向かって「幼き地の子」って呼んでらしたんだわ……）
恐らく、それの意味するところは……。
片手で包みこめるほどの、小さな小さな磁器の黒豹――けれど、そのなかに精霊が宿っていたのなら、あの不思議にも説明がつく。
けれど……そんなことがあり得るのかどうか、わからなくて、ナルレイシアは恐る恐る問いかけた。
「あの……磁器に地霊が宿るなんてことが、あり得るんですか……？」
その言葉に、スカルトードが驚愕に目を瞠った。
「地霊が……？　それはまことですか、大伯父さま？　寡聞にしてわたしは聞いたことがありませんでしたが……？」
首をかしげながら、自分と瓜二つの青年を見るスカルトードの目は……何気なく剣呑だった。

「恐らくは生まれる寸前に掘り出された土の中にいたのだろう……炎に焼かれる衝撃で、初めて意識を持ったのかもしれないな。形作られ、黒釉で覆われたことで、幼き地の子は大地に戻り、眷族と交わることもかなわなくなったのだろう。しかし、職人が、炎に焼かれていない紫水晶を両目に嵌めこんでくれたおかげで、その子は外界と接触できるようになり、おかげでその存在はほかの精霊たちの知るところとなった。わかるだろう、トーディ？　わたしは急がねばならなかったのだよ」

（あのー？　スカーさんにはわかっても、わたしにはチンプンカンプンなんですけどー？）

ナルレイシアはそう思ったが、生憎口が挟める雰囲気ではなかった。

そう思っているのはランディータも同様らしく、ふたりでちらり、ちらりとスカルトードに視線を送ったところ、彼は苦笑まじりに答えてくれた――ただし、他言無用の条件つきで。

曰く、精霊は同族との絆が尋常でなく強いのだと。眷族が虐げられていることを知れば、その救済のために、時に手段を選ばず暴走することもあるのだ……と。

ナルレイシアは、男にナイフをつきつけられたまま、耳にした少年と男の会話を思い出した。

『出来ないよ！　だってジェティは元々、人を怪我させるのだって嫌がってるのに！』

『じゃあ寄こせ！　お前なんかより、おれのほうが、ずっと上手にあの化け物を使ってやれるんだ！』

人を傷つけることを厭っていたジェティ――地霊。
それを知り、なるべくそうさせないよう思いながらも、兄である男に協力してジェティにひとを傷つけさせていた少年……フェスティン。
ジェティを化け物と呼びながら、その力だけは利用しようとし、言うことを聞かない弟から取り上げようとした、兄であるあの男――。
傷つけたくないのに、そうせざるを得なかったとき、幼い地霊はきっと人間には聞こえぬ悲鳴を上げたのだろう。フェスティンもまた、同じ痛みを抱えていたがゆえに、その悲痛な響きはより大きくなっただろう。
幼い眷族のそんな声を聞かされたのでは、同族愛に厚い精霊たちは、さぞかし怒り狂ったに違いなく……。
（ええっとぉ……もしかして、限界近いジェティの悲鳴を聞いて、精霊たちが大暴走を始めたんだ、とか……？）
考えついた瞬間、ナルレイシアは芯から心が冷えた。
たったひとりの眷族を救うために、天変地異もかくやという騒ぎを起こすことも厭わないとは……精霊、恐るべし。
けれど、なぜその騒ぎが起こったのが、あのタイミングだったのか……それが、わからない。

よりにもよって、なぜ、スカルトードに瓜二つの柱神が、傷ついて倒れているところを自分が見つけ、『踊る赤馬亭』に運びこんでから、あんな大嵐になったのか……。本当に、ただの偶然だったのだろうか？

覚えた疑問を、ナルレイシアはスカルトードにぶつけた——当の柱神さまが、けっこう物騒な性格をしていることと、周囲への説明をあまり必要と感じていなさそうな態度に気づいていたからだ。

はたして、その人選は正しかった。

そのことを聞いたスカルトードは——さすがは身内の強みと言うべきか——そっくりな大伯父を迫力満点の笑顔でもって問いつめてくれたのだ。

「……どういうことなのですか、大伯父さま？」

そうして語られた言葉に、ナルレイシアのなかの柱神像は、少しだけ畏れ多さに欠けるものとなった。

この大嵐は、なにもジェティだけの責任ではなかったのだ……。

エピローグ

旧友の別荘から帰ってきたファティ・リンシャは、不在の間に起こった事件を聞くなり、「まあ」と目を瞬かせた。

「ネイスリーズがこのロスタロイドに？　残念なこと……お会いしたかったのに……」

数多の柱神と親交を持っているらしい老婦人の言葉に、「ちっとも残念なんかじゃありません」と主張したのは、ナルレイシアではなく、その身内である青年だった。

「書き置きひとつ残さずに、精霊たちに協力させまくって、煙のように行方を眩ませてくれたあのひとのおかげで、一族は下を上にの大騒ぎだったんですよ!?　おかげで、捜し出す間影武者を務めるよう、突然故郷には呼び戻されるし、その途中でこのロスタロイドで異変が生じた知らせを受けて引き返す羽目になったし！　それもこれも、あのひとが一言でも、『ロスタロイドに向かう』と言い残してくれていたら、回避できたんです！　あんな迷惑魔神、ファティ・リンシャが会う必要なんか、これっぽっちもありません！」

立て板に水のごとく、言いつのるスカルトードの口調は、少しだけ砕けていた。

ナルレイシアたちには見せない、拗ねた様子といい、彼がいかにファティ・リンシャを慕い、甘えているかの証明だった。

（……でも、まあ……そう言いたくなる気持ちはわからなくもないかも……）

と、ナルレイシアは思ってしまう。

なにしろ、あの絶世の美貌を誇る柱神さま――ネイスリーズは、スカルトードにそのことを責められたとき、あっけらかんと「だって、お前、わたしが会いに行くと言ったら、絶対逃げるじゃないか」と答えたのだ。

精霊たちの助けを求める声に応じたことは間違いないとしても、なんだか私情を優先した行動のように思えたのは……はたして気のせいなのだろうか。

「けれど、そうしたらあなたはどこかに雲隠れしたでしょう？」

ネイスリーズと同じことを、ファティ・リンシャが指摘すると、スカルトードは一瞬言葉に詰まった。

「……ことが精霊の暴走に関わる事態とあれば、そんな子供っぽい真似はしません。文字通り、世界の危機にも発展しかねない問題なのですから……」

（やっぱり、あれって世界の危機だったんだーっ！）

彼の言葉に、ナルレイシアは今更ながらに背筋が凍るのを感じた。

しかし、すでに解決済みということもあってか、発言者はそのことには何ら感慨を抱いては

いない様子でこう続けた。

「ですが、一番の問題は、あの大伯父が、よりにもよって紫属の柱神だということだと思うんですよ！　精霊たちが助けを求めてると言っては、あっちふらふら、こっちふらふら……ければど、その七割はただの方便なんですよ!?　そうしてあのひとが黙って姿を眩ますたんびに、わたしがその不在を誤魔化すための影武者として呼び戻されるんです！　今回だって、行き先さえ残しておいてくれたら、この屋敷の書庫で少なくとも十日は読書三昧の夢の日々を送れたはずだったのに……あのジジイのせいで……！」

よほど恨みがたまっているのか、スカルトードは常の彼らしからぬ言葉を口にした――〇〇をつけなかっただけ、まだ自制していたのだとは、後に聞いた話だ。

とは言え、このときナルレイシアには、もっと気にかかることがあったので、彼のらしくない言動には突っ込まなかった――身内によるあれこれそれどれなはた迷惑な内輪話を聞かされて、これ以上柱神に対する夢を壊したくないという思いもあったけれど。

「……あのー？　紫属の柱神さまって、そんなに特別なんですか……？　ご本人には聞きそびれてしまったもので……」

と、問いかける相手に選んだのはファティ・リンシャ――。

よほど酷い目に遭わされたのか、スカルトードはあのそっくりな大伯父の話題に触れられることさえイヤな顔をしたからだ。

柱神に属性があることは、ナルレイシアも知っていた。創世七神――虹神は、それぞれ虹を構成する色彩でもって呼ばれているのだから。

因みにこのディエーンを守護する柱神の属性は『黄』――黄神の加護を持つ神宝に、半身として選ばれたからだ。

紫属というからには、ネイスリーズは紫神の守護神宝に選ばれた柱神であるはずだった。だが、なにがどう特別なのか、どうにもわからない。

(そりゃあ、柱神さまは精霊に特別に愛されてらっしゃる分、暴れ出した精霊を説得するのもお得意だとは思うけれど……)

だが、それなら、このディエーン――ロスタロイドにも、れっきとした柱神がいらっしゃるのだ。

なのになぜ、紫属のネイスリーズがわざわざ他国から足を運ばなければならなかったのか――なぜ、ディエーンを守護する柱神ではいけなかったのか。

尋ねられたファティ・リンシャは、ふわりと微笑み、ティーカップを受け皿に置いた――かちりとも音を立てない優雅な所作に、いつものことながら見とれてしまう。

「……そう、紫属の柱神は特別なの……というか、特殊なのね。すべての精霊の産みの親である紫神と、最も深い絆で結ばれている存在なのだから。柱神は属性に拘わらず、皆精霊に愛されるものだけれど、我を失った精霊を正気に戻せるのは紫属の柱神だけなのよ。単に怒ったり

悲しんだりしているだけなら、他属の柱神でも宥めることはできるのですけれどね」

なのに、暗黒時代以降、紫属が激減してしまったのですもの――選ばれた柱神は大忙しよ……かつてに比べ、格段に不安定なこの世界で、精霊が暴走したら、天変地異なんて簡単に起こってしまうんですものねえ。

上品な笑顔、おっとりした態度で、とんでもなく恐ろしいことを口にしてくれる老婦人である。

「だから、スカー？　改めて言うほどのことではないとはわかっているけれど、ネイスリーズの悪戯は多少大目にみてあげてはくれないかしら？」

小首を傾げるようにして、頼みこむファティ・リンシャの笑顔は、人生経験を積んだものにしか持ち得ぬ落ち着きと、生来のものとわかる愛らしさの両方をたたえていた。

こんな顔と声で頼まれてしまったら、きっと誰も断れないに違いない――ナルレイシアはそう確信したのだが、意外にもスカルトードはこの『お願い』にうなずかなかった。

「過去のことに関しては譲りましょう……また、こんなはた迷惑な騒ぎを起こされてもこちらが困りますから、年に一度ぐらいは顔を見せに故郷にも戻りましょう。ですが……ですがね、今回の大騒ぎに関してだけは……っっ！」

思わぬ抵抗に、ファティ・リンシャは軽く目を瞠った。

「あら？　無事に解決したのでしょう？　磁器の豹に封じられた地霊と、その子と心を通わす

少年は、彼が保護して養い親になることになったと聞いたのだけれど？」

おかげで嵐はおさまったし、めでたしめでたし――ではないの？

不思議そうに、スカルトードに問いかけるファティ・リンシャを見ながら、自分のことではないのに、ナルレイシアは冷や汗をかく思いだった。

……ファティ・リンシャの言葉は間違いではない……大筋においては。

けれど、実際……現実には。

一触即発の危険な状況下にあって、真に精霊たちの暴走の引き金となったのは――それを止めるべくロスタロイドに駆けつけてきたネイスリーズ本人だったのだ。

地霊の幼子が封じ込められた『ジェティ』の気配をたどり、捜していたネイスリーズは、フェスティンの兄が、路地裏で女性を殺害する現場に行き当たってしまったのだ。

「なにをしているのだ！」

我を忘れた精霊さえも、正気に引き戻す迫力満点の一喝は、しかし生まれて間もないジェティには、衝撃と恐怖しか与えなかったのだ――それは決してジェティに向けられたものではなかったというのに。

恐慌状態に陥ったジェティは、いつものように『フェスティンのためにはならないことをするかも知れない人間』に対するように、飛びかかり、その牙でネイスリーズを傷つけたのだ。

だが、傷つけた、まさにその瞬間、ジェティはそれが、決して傷つけてはいけない相手だったことを本能的に知った。そしてネイスリーズはそれがあり得ない――あってはならない出来事なのだと直感した。

ふたつの意識の、ふたつの「あってはならない」という認識と、それが起こってしまったことに対する衝撃――。

恐らくは、それがネイスリーズの記憶を一時、奪うことになったのだ。

精霊が自分を襲うことなど、あってはならないことだったから――それは、精霊自身を破滅に追い込むことであったから。

同時にジェティの意識にまで介入したのかもしれない――そして、その大きすぎる負荷によって、ネイスリーズの一部は封じられた。

記憶という鎖に繋がれた務めも、呼吸することを覚えるより先に知った精霊たちと接するための意識の広げ方も……なにもかもを、忘れてしまった。

精霊たちが暴走したのはそのせいだった――。

「……止めるために駆けつけた本人が、逆に暴走させる引き金になるだなんて、本末転倒もい

いところですよ」

渋面でそう言ったスカルトードに、さすがにファティ・リンシャも今度ばかりはネイスリーズ擁護の言葉は口にしなかった。

あげくに世界を危うく滅ぼしかけたかもしれないのだ――とてもかばえるものではない。

「……けれど、ほら、終わりよければすべてよし、とも言うじゃないの？」

少しだけ乾いた笑い声で、ファティ・リンシャが言えば。

「あの大嵐の後片付けまでして帰ってくれたのなら、うなずく気になれたかもしれませんがね」

と、相変わらずの不機嫌な面持ちでスカルトードが答えた。

そう言えば、そうだった――と、ナルレイシアも思い出す。

嵐が去った後、連続強盗殺人犯であるフェスティンの兄を警邏隊に引き渡すなり、まだ『ふたり』は不安定な状況を脱しきれてはいないから、という理由で、ネイスリーズは早々にこのロスタロイドを引き上げたのだ。

ネイスリーズが事情を語った際、同席していたランディータは、彼が巻き起こした大迷惑のツケを、スカルトードに払わせることに、かけらも躊躇しなかった――ついでに、雷がおさまった後は、ぴんぴんしていたナルレイシアのこともだ。

泥水が浸水した『踊る赤馬亭』の床と壁を、以前通りにピカピカに磨きあげるため、ナルレ

イシアは腰が痛くなるほど雑巾と格闘することになった。その上で、消毒用の酢をまいて、さらにはその強烈な酢の臭いを取るために米ぬかをといた水で、またせっせと雑巾がけをし……店内がすんだら、今度は店の外の掃除に駆り出され、泥だらけの石畳を、ブラシでごしごしこすったものだ。

スカルトードはそれに加えて、近所の清掃も手伝わされたあげく、『踊る赤馬亭』の営業停止期間の弁償までさせられたというのだから、気の毒すぎてなにも言えない。

壊すのは簡単、けれど作るのは難しい――とは、よく聞く言葉ではあったけれど、今回のことでナルレイシアが悟ったのは「汚すのは簡単、でも綺麗にするのはけっこう大変」ということだった。

多分、スカルトードも同じことを感じているに違いない。

そんな彼らふたりの心中を知ってか知らずか、ファティ・リンシャは優雅にお茶を傾けながら、とんでもないことを言い出してくれた。

「じゃあ、今度、そのふたりが落ち着いたころを見計らって、ネイスリーズをこの屋敷にお招きしましょうね。わたくしも、久しぶりに金太郎飴のような、あなたたちが並んだところを見てみたいもの」

金太郎飴――それは、東方の島国の伝統的なお菓子のひとつ……。

しかし、スカルトードとネイスリーズの超絶的な美貌ふたつを、よりにもよって金太郎飴に

譬えるとは……。

（もしかして、ファティ・リンシャが一番の大物なんじゃないのかしら……？）

脱力し、テーブルに突っ伏したナルレイシアはそう思った。

同じく脱力して、額に手を当てたスカルトードだけは、絶対に同意してくれるに違いないと確信しながら……。

きっと、それは間違っていない。

あとがき

こんにちは、前田珠子です。

番外編である『古戀唄』が五冊にもなってしまったこともあり、ずいぶん久しぶりになりましたが、『天を支える者』第三巻をお届けいたします。

そうは言っても、また私が不甲斐ないばかりに、まるまる一冊書き下ろすことができませんでした。待っていてくださった方々、本当に申し訳ありません。

二巻まで書いていたパソコンと、機種もソフトも変わってしまったため、名前や設定の確認は、専ら文庫でやることになったのですが、これが結構な量ありまして、付箋紙のせいで、文庫が太ること、太ること。登場人物のファーストネームはさすがに忘れてませんでしたが、フルネームとなると、結構記憶に穴が……（笑）。学生時代から、暗記物は苦手だったのですが、年々記憶力は退化している模様です。情けなや……。

某『脳を鍛える大人の〇〇トレーニング』を、毎日欠かさずやってはいるのですが……因みに現在の脳年齢は二十代後半を行ったりきたりしております。でも記憶力は相変わらず成績が悪いのですよねー、うーむ。

さて、二巻ラストで行方が知れなくなったナルレイシアの状況も判明し、意外なお方の意外な正体も知れたところで、次巻こそその決着を胸に、引き続き執筆の予定です。次回こそ、男衆には格好いい見せ場を用意してあげたいな、と。もちろんヒロインのナルレイシアにも、ますます頑張ってもらうつもりです。

今回収録の番外編『嵐と共に』は、雑誌コバルトに前後編として書かせていただいたものです。雑誌を読まれた方はお気づきになるかと思いますが、けっこう色々と違っています。実のところ、雑誌の規定枚数を大幅に上回ってしまったため、掲載にあたって原稿用紙にして二十枚ほど削ったという事情があります。今回収録にあたり、元々の原稿を使わせていただきました。また、一部蛇足かなと感じた部分は削らせていただきました。雑誌では語られなかった事情やエピソードも入ってますので、こちらも楽しんでいただけたらと思います。

この度も挿絵の明咲トウルさまを含む関係各所の方々に、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

そして、読んで下さる方々全てに、心からの感謝を捧げさせていただきます。

それでは、次の本でまたお会いできることを祈りながら――。

平成十八年　秋

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者3

COBALT-SERIES

2006年12月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著　者　前田珠子
発行者　磯田憲治
発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2006　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600849-1 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル





- 天を支える者
- 天を支える者2
- 天を支える者 古戀唄
- 天を支える者 古戀唄2
- 天を支える者 古戀唄3
- 天を支える者 古戀唄4
- 天を支える者 古戀唄5

〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。
前田珠子〈聖石の使徒〉シリーズ
イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者

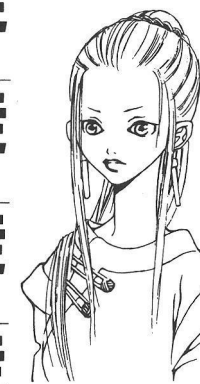
聖石の使徒
其は力を放つ者

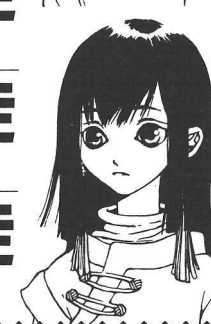
聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子

〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚
碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚
月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／夏門 澗

漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1～3
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥



コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。とともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか！

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」（大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】 〒101-8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt（1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売）をごらんください。

9784086008495

ISBN4-08-600849-1

C0193 ¥419E

1920193004199

定価 本体419円＋税



コバルト文庫